

<道北地域研究シリーズ No.19>

北海道北部の
地域振興 19

2019年3月

<道北の地域振興を考える研究会>

目 次

I. 2018 年度研究会の活動	清水池 義治	2
II. 道北の地域振興を考える研究会の活動経過		3
III. 研究会メンバー		
2018 (平成 30) 年度		6
IV. 第 22 回 道北の地域振興を考える講演会 (2018 年 3 月 19 日)		7
(1) 冒頭挨拶	清水池 義治 (道北の地域振興を考える研究会 会長) 結城 佳子 (名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター センター長)	
(2) 第 1 講演	蓑島 栄紀 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授) 道北の古代交流が現代に語りかけるもの—アイヌ史研究の新潮流	11
講演資料		27
(3) 第 2 講演	鈴木 邦輝 (名寄市北国博物館 嘱託学芸員) 天塩川に生かされたアイヌ～近世文献を中心に～	47
講演資料		59
(4) 調査報告	氏江 敏文 (日本考古学協会員) チャシから見えてくる道北アイヌの生活～中川町でのチャシ発掘調査より～	75
講演資料		85
(5) 末尾挨拶		93
V. 道北の地域振興を考える研究会 現地研修会報告 (2018 年 3 月 20 日)		94
木村 洋司「ニチロ畜産株式会社名寄工場による『名寄天牛』の取り組み」		

I. 2018 年度研究会の活動

清水池 義治

(研究会会長、北海道大学)

1. 『北海道北部の地域振興 19』の発行

ここに『北海道北部の地域振興 19』を発行します。次ページと次々ページに、道北の地域振興を考える研究会の発足（1997 年度＝平成 9 年度）から第 22 年目の 2018（平成 30）年度に到る活動経過を一覧表にして掲載します。

なお、前号から電子媒体のみでの発行となり、今号も同じ対応です。

2. 研究会セミナーと講演会

（1）2018 年 9 月 6 日・7 日に中川町などで「2018 年度道北の地域振興を考える研究会セミナー」を開催予定でしたが、9 月 6 日未明の平成 30 年北海道胆振東部地震の発生を受け、中止の判断をいたしました。

（2）2019 年 3 月 23 日に名寄市立大学にて、昨年 9 月に開催予定でした「2018 年度道北の地域振興を考える研究会セミナー」を開催しました。「北海道北部地域の観光戦略を考える」をテーマに、今野聖士会員（名寄市立大学）、杉川毅氏（宗谷シーニックバイウエイ事務局、稚内印刷（株）代表取締役社長）、日置友幸会員（中川町観光協会）、池田俊一氏（名寄市教育委員会教育部スポーツ・合宿推進課 主幹）から報告をいただきました。

内容は、次号冊子『20』に掲載する予定です。

3. 研究会会員の動向など

本年度は、会員の入退会はありませんでした。

2018 年度末（2019 年 3 月時点）で会員数は 33 名で、一般会員 27 名、顧問 6 名となっています。会員属性は、大学教員 14 名（名寄市立大学 5 名、北海道大学 4 名、稚内北星学園大学 2 名など）、民間団体 6 名（NPO、商工会議所、観光協会、一般社団法人など）、公務員 5 名（地方公共団体 3 名、国土交通省 2 名）などです。うち道北地域居住者は 16 名です。研究会活動のさらなる活性化に向けて、今後も会員拡大を進めていきます。

森久大会員は 2018 年 3 月に士別市立博物館を退職され、同年 4 月より帯広百年記念館に就職されました。新天地でのご活躍をお祈りいたします。

役職者の業務多忙により研究会運営が若干の停滞を来している点を受け、次年度 2019 年度には事務局体制の強化を図っていく予定です。

II. 道北の地域振興を考える研究会、従来の活動経過

年度	講演会(住民参加形態)	研究会会員の勉強会、研究会セミナー等	冊子発行	備考:冊子中の論文(勉強会、講演会の記録以外の論文)、特記事項など
第1年目 1997年度 (平成9年度)	第1回 1998(平成10)年3月26日、市立名寄短期大学 加藤 昭:北海道開発の過去・現在・未来 池田 均:ロシア・サハリン州の社会、経済の現状	1997(平成9)年12月17日-18日、北大雨竜演習林(母子里) 石井 寛:第6期北海道総合開発計画について 奥田 仁:産業クラスターと北海道第1次産業の発展方向 幡本 篤:上川北部の地域振興について 細田 直志:森林提案(基調)-北海道・下川町における森林資源のサステイナビリティー(持続的生産)とワイズ・ユース(賢明なる利用)-		
第2年目 1998年度 (平成10年度)	第2回 1999(平成11)年3月23日、市立名寄短期大学 藤森 郁雄:北海道農業にエールを送る! 山本 宏:これからの北海道の木材産業を考える	1999(平成11)年1月27日-28日、北大雨竜演習林(母子里) 谷口 秀之:第6期北海道総合開発計画と道北地域整備の展開構想 細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動(1998年度)	北海道北部の地域振興 71ページ、1998年11月	
第3年目 1999年度 (平成11年度)	第3回 2000(平成12)年3月23日、市立名寄短期大学 石井 寛:EUのエネルギー政策とスウェーデンの木質バイオマス利用の現状 七戸 長生:いわゆる産業クラスター論の前提と課題		北海道北部の地域振興 II 84ページ、1999年12月	
第4年目 2000年度 (平成12年度)	第4回 2001(平成13)年3月28日、市立名寄短期大学 小田 清:現代の地域問題と地域開発政策のあるべき方向について -北海道の抱える基本問題を考える 西本 肇:北海道の教育-人づくりから見えるもの-		北海道北部の地域振興 III 134ページ、2000年11月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その2(1999年度) 奈須 憲一郎:地域の内発的発展における「新住民」の果たす役割 -北海道下川町を事例として-
第5年目 2001年度 (平成13年度)	第5回 2001(平成13)年9月25日、市立名寄短期大学 北 良治:これからの社会保障のあり方と地方自治の果たす役割 津田 美穂子:高齢社会における住民生活と地域振興 加藤 昭(特別報告):世界水フォーラム(2003年3月、京都)の開催 -その内容と意義- 第6回 2002(平成14)年3月26日、市立名寄短期大学 奥田 仁:新たな地域発展の道-欧州と北海道- 七戸 長生:「人々の定住」をめぐる		北海道北部の地域振興 IV 123ページ、2002年2月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その3(2000年度)
第6年目 2002年度 (平成14年度)	第7回 2003(平成15)年3月24日、市立名寄短期大学 川上 幸男:幌延に住んで50年 森 啓:合併でまちづくりはできるのか 加藤 昭(特別報告):森と湖に親しむ全国大会-その内容と意義-	* 2002(平成14)年11月2日、旭川 澤口 二郎:これからの開発事業と道北地域 渡邊 政義:最近の道路整備を巡る話題	北海道北部の地域振興 V 174ページ、2003年1月	細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その4(2001年度)
第7年目 2003年度 (平成15年度)	第8回 2004(平成16)年3月26日、市立名寄短期大学 太田原 高昭:食の安全・安心と北海道農業 奥田 仁:過疎の克服と周辺地域の経済発展	2003(平成15)年12月6日、旭川 今 尚文:名寄市農業の現状と担い手育成・支援の取り組み 佐藤 信:道北地域の人口動態と過疎化について 2004(平成16)年2月7日、旭川 夏井 岩男:農業の多様な担い手育成について 山本 美穂:道北農村における伐境・耕境後退と土地利用	北海道北部の地域振興 VI 145ページ、2004年2月	神沼 公三郎:戦後のわが国における林業政策の軌跡と森林・林業基本法 細田 直志:下川産業クラスター研究会の活動 その5(2002年度・2003年度)
第8年目 2004年度 (平成16年度)	第9回 2005(平成17)年3月23日、市立名寄短期大学 松田 従三:家畜ふん尿のバイオガスシステムについて 桑原 隆太郎:道内市町村合併に関する主要論点 -北海道の自治の姿をどう描くのか-	2004(平成16)年12月18日、旭川 前田 憲:課題の整理と「道北」概念の範囲 佐藤 信:道北地域の社会的諸問題-いままでの研究成果の検討- 前田 憲:道北地域の教育問題 2005(平成17)年2月19日、旭川 久保田 宏:北・北海道の地域医療-むかし・いま・これから- 池上 佳志:天塩川流域の環境問題	北海道北部の地域振興 VII 244ページ、2005年3月	細田 直志:山村地域における持続可能な森林管理を求めて -Beyond the Despair-
第9年目 2005年度 (平成17年度)	第10回 2006(平成18)年1月13日、市立名寄短期大学 山下 邦廣:下川町の林業と森林組合の取り組み 森田 康志:道北の地域振興と北海道開発局の役割	2005(平成17)年11月26日、旭川 奈須 憲一郎:森林を活かして起業する-道北の地域振興実験- 宮入 隆:道北地域における広域野菜産地形成の現状と課題 神沼 公三郎:研究会10周年に向けて、目指すべきもの 加藤 昭:北海道総合開発計画及び国土形成計画について 2006(平成18)年1月14日、名寄 鎌谷 俊夫:西興部村の「自立」計画と課題 長岡 哲郎:下川町のまちづくりへの取り組み	北海道北部の地域振興 VIII 163ページ、2006年2月	
第10年目 2006年度 (平成18年度)	第11回 2007(平成19)年1月12日、名寄市立大学 「道北の地域振興を考える研究会」10周年記念=講演とシンポジウム= 「道北地域の現状と発展可能性」 報告 神沼 公三郎:研究会活動を振り返って 講演 島 多慶志:上川北部地域と名寄市の現状を考えて、将来を見据える 講演 久保田 宏:北・北海道における名寄市立大学の役割 シンポジウム:道北地域の現状と発展可能性を考える (シンポジスト)島 多慶志・亀井 義昭・河合 博司 (司会)神沼 公三郎	2006(平成18)年8月31日-9月1日、北大中川研究林(中川) 亀井 義昭:中川町の地域づくり 千見寺 正幸:音威子府村の地域づくり 吉田 俊也:北海道北部の天然林の変化-北大研究林の長期データを中心に 宮沢 晴彦:道北漁業の現況と担い手の動向 10周年記念誌の論文執筆のために、研究会会員による個別の研究発表 2007(平成19)年1月13日-1月14日、名寄 10周年記念誌の論文執筆のために、研究会会員による個別の研究発表	北海道北部の地域振興 IX 176ページ、2007年2月	

年 度	講演会(住民参加形態)	研究会会員の勉強会、研究会セミナー等	冊子発行	備考:冊子中の論文(勉強会、講演会の記録以外の論文)、特記事項など
第11年目 2007年度 (平成19年度)	第12回 2008(平成20)年3月21日、名寄市立大学 粟井 是臣:医療機関のネットワーク化と地域医療 山田 美緒子:地域に生きる、地域に学ぶ～なかとんべつ健康づくり～ 難波江 完三(特別講演):新たな北海道総合開発計画の特徴と課題	2008(平成20)年1月18日、北大北方生物圏フィールド科学センター(札幌) 山崎 幹根:北海道における道州制改革の課題 10周年記念誌の完成にむけて、研究会会員の最終討議	北海道北部の地域振興 X 114ページ、2008年3月	
第12年目 2008年度 (平成20年度)	第13回 2009(平成21)年3月23日、名寄市立大学 三島 徳三:ローカルイズムと地域産業政策～道北で可能性をさぐる～ 石井 寛:地域社会で期待される国・道有林の役割	2008(平成20)年7月12日、名寄市立大学 『北海道北部の地域社会—分析と提言—』を批評する集い 批評1 島 多慶志:本書に対する評価、そして道北地域の展望 批評2 亀井 義昭:地域づくりの視点から見た本書の特徴と問題点 批評3 白井 暢明:北海道における道北の地域づくりと本書 批評4 鈴木 敏正:社会教育の視点から見た本書の特徴と残された課題	北海道北部の地域振興 X I 165ページ、2009年3月	
第13年目 2009年度 (平成21年度)	第14回 2010(平成22)年3月24日、名寄市立大学 寺沢 実:シラカンバ樹液の利用 吉田 弥生:「心の過疎」を乗り越えるまちおこしへ～中川町エコミュージ アムセンターの取り組みを事例に～			
第14年目 2010年度 (平成22年度)	第15回 2011(平成23)年3月18日、名寄市立大学 基調講演 西村 宣彦:地方財政改革の現状と持続可能な地域づくり 研究報告 清水池 義治:フランス地域自然公園制度(PNR)の枠組み と天塩川流域での可能性(仮) 奈須 憲一郎:流域単位での内発的発展の構想～天塩川 流域をモデルとして～		北海道北部の地域振興 X II 96ページ、2011年3月	<特記事項>研究代表者・清水池義治、共同研究者・神沼公三郎、佐藤信、 吉田俊也、奈須憲一郎、三島徳三の計6名で名寄市立大学平成22年度学長 特別枠支援経費を申請し、認められた。共同研究のテーマは『『地方自然公 園』制度を活用したボトムアップ型地域振興の可能性—天塩川流域を対象と して—』。研究期間は2010年度、2011年度の2年間。
第15年目 2011年度 (平成23年度)	第16回 2012(平成24)年3月9日、名寄市立大学 特別講演 加藤昭:道北地域の人口動態及び振興について 小林 国之:地域のブランド化とブランド認証制度 ～フランス・地方自然公園制度を訪ねて～ 木村 花菜:芸術文化活動(アート)による地域コミュニティ・ネットワークづくり ～『心の過疎』の克服を目指して～	2011(平成23)年9月29日～30日、北大中川研究林(中川) 川口 精雄:わが町の地域づくり 佐近 勝:わが村の地域づくり 横山 貴志:地域資源の保存と活用について ～音威子府村の歴史的資源の視点から～ 清水池 義治:地域振興策における地域ブランド・アイデンティティの創造 ～ブランド論からのアプローチ～		
第16年目 2012年度 (平成24年度)	第17回 2013(平成25)年3月15日、名寄市立大学 吉田 俊也:北海道北部の天然生林～持続的利用への展望～ 青柳 かつら:地域のお宝を活用して天塩川流域の暮らしを元気に! ～士別市朝日町郷土資料室を核とした山村文化保存・教育普及活動 の事例～		北海道北部の地域振興 X III 182ページ、2013年3月	
第17年目 2013年度 (平成25年度)	第18回 2014(平成26)年3月20日、名寄市立大学 中嶋 信:名寄市立大学道北地域研究所に込められた願い 青木 紀:道北地域と名寄市立大学	2013(平成25)年9月12日～13日、中川町(ポンピラ温泉) 麻生 翼:健康・教育・観光分野での森林の利活用を通じて森林業の創造を ～下川におけるNPO法人森の生活の取り組み～ 田中 教幸:道北野外研修に参加した海外留学生から見た道北の現状と未来 菅原 萌:天塩川流域における地域活性化への広域的取り組みの可能性	北海道北部の地域振興 X IV 135ページ、2014年3月	2013年9月13日に国道40号音威子府バイパス工事現場を見学
第18年目 2014年度 (平成26年度)	第19回 2015(平成27)年3月19日、名寄市立大学 佐々木 政憲:地域に根ざし、地域に学び、地域を創造する大学～稚内北星 学園大学の取り組み～ 佐近 勝:おといねっぶ高校の歩みと創造力を育む芸術教育	研究会セミナー 2014(平成26)年11月22日～23日、稚内北星学園大学 斉藤 吉広:地(知)の拠点整備事業の全体像と進捗状況 ゴータムB. P.:稚内北星学園大学の地域ネットワークへの取り組み 清水池 義治:名寄市立大学における地域貢献の意味と課題	北海道北部の地域振興 X V 141ページ、2015年3月	2014年11月23日に稚内メガソーラー発電所、宗谷岬ウィンドファームなどを見学
第19年目 2015年度 (平成27年度)	第20回 2016(平成28)年3月18日、名寄市立大学 林 明日美・堂脇 聖美:豊富温泉もりあげ隊の取り組みと 移住者が地域とつながる拠点づくり 黒井 理恵:naniroCAFEから見る、まちづくりに重要なリスクテイクとチャレンジ	研究会セミナー 2015(平成27)年9月26日、音威子府村(天塩川温泉) 伊藤 徳彦:建設事業の事業地域における経済波及効果推計プロセスの構築 に関する研究～音威子府中川地域を事例として～ 疋田 吉織:博物館活動から地域づくりへ ～中川町エコミュージアムセンターの取り組み～	北海道北部の地域振興 X VI 134ページ、2016年3月	
第20年目 2016年度 (平成28年度)	第21回 2017(平成29)年3月21日、名寄市立大学 第1講演 神沼 公三郎:研究会の20年を振り返って 加藤 昭:道北地域の将来展望～道北研究会の新しい視点～ 第2講演 地元産小麦を通じた農商工・地域連携 基調講演:渡辺 幸一 トークセッション コーディネーター:佐久間 良博 パネリスト:草野 孝治、佐藤 導謙、相原 万百美	研究会セミナー 2016(平成28)年9月16日、名寄市立大学 今野 聖士:不足する農業雇用労働力とその対応 ～季節雇用から通年雇用へ向かう野菜産地～ 工藤 裕之:宗谷本線を軸とした道北新時代 ～「DMO」で変わる新たな道北ブランドの構築～	北海道北部の地域振興 X VII 135ページ、2017年3月	2016年9月15日にサンルダムの工事現場を見学

2018（平成30）年度

<顧問>

七戸 長生	北大名誉教授、元市立名寄短期大学長
加藤 昭	(一財)水源地環境センター顧問、元北海道開発事務次官
前田 憲	名寄市立大学名誉教授
石井 寛	北大名誉教授
三島 徳三	北大名誉教授、元名寄市立大学副学長・教授
神沼 公三郎	北大名誉教授

<会長>

清水池 義治	北大大学院農学研究院 農業経済学分野 食料農業市場学研究室 講師
--------	----------------------------------

<副会長>

斉藤 吉広	稚内北星学園大学学長
佐藤 信	北海学園大学経済学部 教授
藤田 健慈	名寄商工会議所 会頭
結城 佳子	名寄市立大学保健福祉学部看護学科 教授、同大学コミュニティーケア教育研究センター長

<事務局長>

今野 聖士	名寄市立大学保健福祉学部 講師
-------	-----------------

<監事>

播本 雅津子、伊藤 徳彦	(下記の会員欄)
--------------	----------

<以下、会員>

麻生 翼	NPO 法人森の生活 代表理事
石川 守	北大大学院地球環境科学研究所 准教授
伊藤 徳彦	(一社)北海道開発技術センター (DEC) 調査研究部 首席研究員
小尾 晴美	名寄市立大学保健福祉学部 講師
河井 恒久	(株)エフエムなよろ メディア事業部
黒木 宏一	九州産業大学経済学部経済学科 講師
ゴータム・ビスヌ・プラサド	稚内北星学園大学情報メディア学部 准教授
東海林 隆	旭川開発建設部 地域振興対策室長
伊藤 学	旭川開発建設部 道路計画課長
田中 教幸	岩手大学教授、同大学三陸水産研究センター長
奈須 憲一郎	eggplant 代表、下川町議会議員
播本 雅津子	名寄市立大学保健福祉学部看護学科 教授
日置 友幸	中川町観光協会 事務局員
疋田 吉識	中川町教育委員会 エコミュージアムセンター 主査
松倉 聡史	名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科 教授
宮沢 晴彦	北大大学院水産科学研究所 教授
森 久大	帯広百年記念館 学芸員
山本 宏	NPO 法人北海道住宅の会 副理事長、元北海道立林産試験場長
横山 貴志	音威子府村総務課地域振興室 主事
吉田 俊也	北大北方生物圏フィールド科学センター 教授、北管理部長、雨竜研究林長
吉田 弥生	北大大学院教育学院 博士課程

IV. 第22回 道北の地域振興を考える講演会

- (1) 冒頭挨拶 清水池 義治 (道北の地域振興を考える研究会 会長)
結城 佳子 (名寄市立大学コミュニケア教育研究センター センター長)
- (2) 第1講演 蓑島 栄紀 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授)
道北の古代交流が現代に語りかけるもの—アイヌ史研究の新潮流
講演資料
- (3) 第2講演 鈴木 邦輝 (名寄市北国博物館 嘱託学芸員)
天塩川に生かされたアイヌ～近世文献を中心に～
講演資料
- (4) 調査報告 氏江 敏文 (日本考古学協会員)
チャシから見えてくる道北アイヌの生活～中川町でのチャシ発掘調査より～
講演資料
- (5) 結びの挨拶

期 日 2018年3月19日 (月)

場 所 名寄市立大学

主 催 道北の地域振興を考える研究会 (会長：清水池 義治)

共 催 名寄市立大学コミュニケア教育研究センター (センター長：結城 佳子)

後 援 テッシン・オ・ペツ賑わい創出協議会 (会長：加藤 剛士 (名寄市長))

(1) 冒頭挨拶

司会：清水池 義治 (道北の地域振興を考える研究会会長、北海道大学大学院農学研究院 講師)

みなさん、こんにちは。予定の時間となりましたので、ただいまより第22回道北の地域振興を考える講演会を始めていきたくと思います。私は北海道大学大学院農学研究院の清水池と申します。3年前まで名寄市立大学で勤務しておりましたが、現在は札幌におります。本日の主催団体であります、道北の地域振興を考える研究会の会長を現在、務めさせていただいております。本日は司会進行をさせていただきます。この研究会の会長は、長らく北海道大学の神沼公三郎先生がお務めでしたけれども、昨年5月に交代いたしました。私が会長に就任いたしました。よろしくお願いたします。

さて、本日は、3月の年度末であります。ご多忙の中、講演会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。本日のテーマはアイヌです。本日は3人の報告者の方をお招きしております。北海道大学の蓑島栄紀先生、名寄市北国博物館の鈴木邦輝さん、日本考古学協会の氏江敏文さんのお三方です。ご多忙の中、講演をお引き受けいただいたことを御礼申し上げたいと思います。特に蓑島

先生、わざわざ札幌からお越しいただきまして、本当にありがとうございます。本講演会は、例年、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターの共催もいただいております。特に、本日に向けての各種の準備、宣伝等をご協力いただきました。ここで御礼を申し上げます。加えて、後援として、テッシン・オ・ペツ賑わい創出協議会のご支援も今回いただいております。併せて御礼申し上げます。さらに、北海道開発技術センター、北海道河川財団、ならびに石狩川振興財団の3団体からもご支援をいただいております。この場を借りて御礼を申し上げます。

この道北地域振興を考える研究会ですけれども、今年で21年を迎えました。受付で配布しました研究会の活動記録を見ていただきますと、例年講演会とセミナーを大体2回ずつぐらい開催してきています。また、それらの内容を取りまとめた研究会誌『北海道北部の地域振興』を、ほぼ毎年発行してきました。そこで取り上げられている課題は実にさまざまです。当然のことながら、道北地域に関わる事柄が中心で、森林や農業、あるいは福祉に関わるテーマを取り上げたこともございます。道北の地域社会に関わるありとあらゆるテーマに関して、これまで数多くの講演でありますとか、研究報告を行ってきました。しかし実は、本日のテーマでありますアイヌについては、今まで取り上げたことがございませんでした。

今回のテーマ設定とした背景をちょっと簡単にお話しします。今、地域社会を今後どうするかを考えていく場合に、その自治体なり、もうちょっと広い単位の地域、地域の範囲はいろいろあると思いますが、その地域社会がどういう歴史を持っているのか、どういう文化を持っているのかが、その地域に住んでいる住民のアイデンティティーを考える上で重要だと考えています。もっと分かりやすい言葉でいえば、プライドと言ってもいいのかもしれませんが、その際に、地域の歴史なり文化が非常に大きな比重を占めています。私は本州の広島県出身なので、その気になれば、地域社会の歴史は相当さかのぼることができ、実際に地域の歴史は意識してきました。そういった面では北海道の場合、開拓で現代社会がスタートことも関係して、明治以降の話がどうしても中心になってきます。一方で、この北海道にはアイヌという方々によって長い歴史と社会、そして文化が受け継がれてきたのも事実です。

私も道北地域の名寄市で7年ほど暮らしてきた中で、地域振興を考えるためにアイヌのことも取り上げればよいのではという話を、実は折々でそういう話を地域住民の方とさせていただく機会がありました。しかし、正直言いますと、あまり反応が良くありませんでした。その理由はいろいろあるかもしれませんが、特に道北地域のアイヌのことに限っては、その歴史なり社会がどういったものだったかあまり共有されていないのかなとも感じました。その中で、自分の中で一つ大きかったのは、今日もいらっしゃっていますけれども、中川町エコミュージアムセンターの疋田さんに、アイヌのチャシの話をお伺いしました。それがきっかけとなり、最近いろいろ出ています本などを読み、天塩川流域に住んでいたアイヌの方々が、本州や周辺の諸外国とも非常に活発な交易活動をしていたのではないかという話を聞き、非常にアイヌのイメージが大きく変わりました。これは、ヨーロッパに行ってもアイヌが実は話題になるぐらい、世界的にもかなり関心が高い話になっています。ただ、そこで語られているアイヌのイメージは、自然と共生して非常にエコロジカルな

生活をして、それに基づいた文化を営んできたというもので、一般的にもそういうイメージで思っている方が多いと思います。いわゆる狩猟採集の生活をしている人たちということですね。それは、一面では間違いではないんですけども、一方で、先ほども言いましたように他の社会との非常に活発な交流や交易という関わりを持っていて、この道北地域が、もしかしたらその拠点だったかもしれなかったわけです。そういうような歴史を踏まえますと、今の道北地域に関しての見方も少し変わるような気がいたしまして、今回、こういったテーマを設定させていただいたということになります。

本日は、先ほどご紹介の3名の方々からお話しいたします。最初にお話しいただく蓑島先生からは、古代史研究ご専門ですので、その古代史の中身を中心に、道北に限らずアイヌが他の地域とどういう関係を持っていたのかについてお話しいただきます。つづく鈴木さんと氏江さんに関しましては、それぞれ名寄にお住まいの方ということもありますので、これまで地域に密着した研究をされてきた方々となります。そこで、鈴木さんからは、主に文字記録に基づきまして、天塩川に生かされたアイヌというテーマでお話しさせていただきます。氏江さんからは中川町におけるチャシ発掘作業に関する報告をいただくということになります。

確かに、アイヌの社会や文化は、直接、今の社会とつながるというわけでは必ずしもないかもしれませんが、今後のこの道北地域を考えていくという上で、アイヌの歴史や社会、文化は、切っても切り離せないと私は考えております。本日は、通常の講演会より若干長めに5時半まで時間を取っておりますので、皆さまにとって有意義な時間となりますようお祈りいたしまして、かなり長くなってしまいましたが、私からのあいさつとさせていただきます。本日はどうもよろしくお願いたします。

引き続きまして、共催団体の名寄市立大学コミュニティアカ教育センターの結城センター長からごあいさついただきます。よろしくお願いたします。

結城 佳子（名寄市立大学コミュニティアカ教育研究センター長、名寄市立大学教授）

皆さま、本日は年度末のお忙しい中、また雪でお足元の悪い中、本学に足をお運びいただきまして心より御礼を申し上げます。私は共催団体となっております名寄市立大学コミュニティアカ教育研究センターのセンター長をしております。当センターは、設置からようやく2年がたとうとしております。本学には、名寄女子短期大学として開学して以来50年あまりの歴史がございますが、その間、地域に立脚し、地域の皆さまに支えられてきた大学でございます。今後、さらに地域の皆さまとの密接な関係性の中で、大学としても、地域としても、より発展していくことを願って、センターの設置に至りました。2年間たちまして、教育、研究、そして地域交流を活動の三つの柱とし、広い分野でセンターの活動をしてまいりましたけれども、まだまだ課題がございます。その一つが地域に関する課題についての研究の部分でございます。本学は大学という、研究者の集まりの組織でございますので、それぞれの教員がそれぞれのテーマを持って研究活動しております。本学はその特性から、地域の課題について研究テーマとしている教員もたくさんおります。ただ、大学として、組織としてこの地

域の課題にどう取り組んでいくかということをはっきりと研究というのは、一つ一つ細かく見れば取り組んできているとも言えるのかもしれませんが、まだまだ今後充実していく余地があるかというふうにも思っております。そういう意味では、こちらの研究会とのこれまでの関係、またこういった研究会の機会、そういったものをさらに発展させまして、今後研究活動にさらに進めてまいりたいというふうに思っております。

本日のテーマ、アイヌでございますけれども、私の個人ごとではございますが、私が朝鮮半島と日本の歴史に関心を持ちましてから、もう20年以上になります。その中でお知り合いになりました韓国のある歴史学者が、歴史は川の流れであるとおっしゃいました。これからの流れの行く末を考えていく上では、これまでの流れをしっかりと理解しなければならない。ですので、名寄を中心としたこの道北地域を考えていく上では、これまでの道北地域のこともしっかりと知っていかなければならないというふうな思いをしております。今日のテーマは大変関心深いテーマで、研究会の皆さまにはこういった機会をいただきましたことを心より御礼を申し上げたいと思います。今日ご講演を担当される3人の先生方のご講演も大変楽しみにしております。短い時間ではございますが、皆さまにとりましても有意義な時間となりますことをお祈り申し上げまして、共催団体責任者としてのごあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

(2) 第1講演 道北の古代交流が現代に語りかけるもの

—アイヌ史研究の新潮流

養島 栄紀 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授)

はじめに

こんにちは。ただいまご紹介いただきました、養島と申します。本日はこの会にお招きいただき、また皆さまにはご足労いただき、お礼申し上げます。私のタイトルは、「道北の古代交流が現代に語りかけるもの—アイヌ史研究の新潮流」ということで、大変大風呂敷なテーマとなっております。内容もかなり大風呂敷なもので、この後の鈴木先生や氏江先生の緻密なお話に比べると、非常に大ざっぱな話になってしまうかと思うのですが、一時間程度お聞きいただければと存じます。私、悪い癖で、資料を作りすぎる癖がございまして、今回は特に多くて、かなりはしょったり、かいつまんだりしないと間に合わないかと思えます。その点もあらかじめご了承ください。

スライド1ですが、ヒグマの写真が映っています。そしてこちらは、江戸時代後期の『蝦夷島奇観』という本に描かれたアイヌ民族のクマ送り、イオマンテの絵ですね(右上)。この二つは、当然関わりが深いわけです。一方、これは北海道に生息するイタチ科の動物(左下)、エゾクロテンの記念切手で、こちらは平安時代の『源氏物語絵巻』の部分になります(左上)。前者は明らかに関係が深いですが、後者については何か関係があるのか、と疑問に思われるかもしれません。北海道のクロテンと、平安朝の貴族たち、一見、あまり関係なさそうに見えるけれども、実は深く関わっていた。これが今日の話の一つの大きなポイントになります。

アイヌ史と古代北海道史の課題

まず、「アイヌ史と古代北海道史の課題」ということで、ちょっとお話をさせていただきます。右下(スライド2)ですが、アイヌ民族が片手にトゥキという、お酒を満たした器を持ち、片手にイクパスイという、神様に祈りを届けるのに使う大事な儀式道具を持って、儀式をしている様子のイラストです。近年でも行われている、「伝統的な」アイヌ文化らしい儀式ということになります。

実は、千歳市のユカンボシ C15 遺跡や、新千歳空港のあたりの美々8 遺跡など、何カ所かの遺跡では、10世紀やそれ以前にさかのぼる可能性の指摘されるイクパスイ状の製品が出土しています。左下(スライド2)の写真がそうです。そもそも今回の企画は「アイヌ」が大きなテーマですが、私のタイトルには「古代交流」という言葉が入っています。アイヌの歴史で「古代」という言葉が使われることは、実は従来、あまり一般的ではないのですが、私は、アイヌの歴史にも「古代」があったという立場です。

ここにいらっしゃる方の多くがご存じだと思いますけれども、北海道の歴史年表では、日本史の歴史教科書で習う本州中心の年表とはだいぶ違った時代区分がなされています(スライド3)。「旧石器」や「縄文」といったあたりは、いわゆる日本史の教科書的な年表と、細部に違いはありますけれども、時代の名称としては同じ名前が使われているわけです。ところがその後、弥生、

古墳、飛鳥、奈良、平安といったような時代が、北海道の歴史年表にはありません。縄文文化の後、本州で弥生、古墳のあたりは、北海道では「続縄文文化」ということになります。その後も「オホーツク文化」や「擦文文化」(さつもんぶんか) というような独自の区分が存在し、一般には13世紀ぐらいからを「アイヌ文化」「アイヌ文化期」と呼んでいるわけです。

この時代区分については、以前からさまざまな意見があります。例えば「続縄文文化」という時代区分、名称に対する異論などもあります。しかし、ここでとくに強調したいのは、13世紀からを「アイヌ文化期」と区分することについてです。この年表をはじめて見たとき、多くの方は、アイヌ文化、アイヌ民族が13世紀に突如として現れた、という印象を抱くのではないのでしょうか。では、広い意味での「アイヌの歴史」が13世紀から始まるのかというと、必ずしもそうは思っていない研究者が大半だと思います。

要するに、こうした誤解を招くような歴史年表、時代区分は、そろそろ検討しなおしたほうが良いのではないかと。近年、何人かの研究者の取り組みがはじまっています。その中で、私もいろいろ考えているところでして、結論の一つを先取的に言いますと、「続縄文文化」は大まかに言うとおよそ前半期と後半期に分かれます。続縄文後半期は、ほぼ3～7世紀ころにあたります。3世紀は、本州でいうと邪馬台国とか、卑弥呼とか、そのくらいの時代です。およそこの続縄文後半期(3～7世紀)から、擦文文化(7～12世紀)の時代までを、「アイヌ史における古代」ととらえることができないか、私はここ数年来、試行錯誤しながら考えているところです。

アイヌ史の地理空間

今、時間軸の話を書きましたが、もう一点は、アイヌ史を、地理学的、地政学的と申しますか、そうした面から幅広くとらえたときの特徴についてです(スライド4)。日本地図で見ると、北海道は日本地図の北の端っこになって、その先は載っていないわけですが、実際には、当然ながらその先に広がる世界があるわけです。つまり、道東から千島列島をへてカムチャツカ半島に至る道、道北からサハリンを経由してアムール川流域に至る道、その他に、津軽海峡を越えた本州との交流も盛んです。日本列島のなかで対外交流の窓口というと、弥生文化が入ってきたとか、長崎の出島であるとか、北部九州がクローズアップされる傾向が強いわけですが、北部九州や南西諸島と並んで、北海道は日本列島の歴史のなかでも屈指の、対外交流の玄関だったわけです。写真の資料はよく引き合いに出されるものですが、知床の羅臼町で見つかった、続縄文前半期のころの刀子、ナイフです。鞘に銀の装飾がされています。日本列島には、弥生時代に北部九州のほうへ鉄器など金属製品が入ってくるようになりますが、この知床の銀は、九州などで見ついている銀よりも早い。つまり今のところ日本列島で最古の銀製品ではないかと言われています。同時代の「鮮卑」や「匈奴」であるとか、北方ユーラシアの遊牧世界で使われたナイフ、その装飾品と共通性があるとも言われます。これは、一つの引き合いといえますか、例にすぎませんけれども、日本列島とその周辺の歴史のなかで、北海道は、異文化交流の活発な地域として重要だったことがおわかりいただけると思います。

マイノリティ史研究の新潮流

もう一点、先ほどの清水池先生のごあいさつの中にもありましたけれども、アイヌ民族を含むマイノリティ、先住民族などのマイノリティの研究には、およそ1980年代、90年代ぐらいから、世界史的にも新しい見通しというか、潮流が非常に強まってきている状況があります。ここに挙げましたのは、田村愛里さんという方が1997年に書かれた本の抜粋です（スライド5）。

「たしかに、抑圧された人々の歴史の復権をとおして国民国家を問い直すことは必要であるが、マイノリティ集団の総体的独自性を主張するだけでは、異文化集団が共存しうる多元社会の実現、という今日の課題にこたえられない」「迫害され、ひっそりと辺境に押し込められたマイノリティ集団ではなく、国家や異文化間の差異を自らの活躍の場としてダイナミックに存在してきた人々の生き方に焦点をあてていきたい」（『世界史のなかのマイノリティ』より）。

ここには、90年代ごろから現在に至るまでの、マイノリティ史研究の一つの潮流がよく表現されています。実を申しますと、私自身の研究も、学生時代に、こうした新しい潮流の影響を強く受けて始めたという面があります。アイヌ民族の歴史において、交易や富の蓄積など、ダイナミックで非常に力強い側面、アジア的なフィールドで活躍するプレーヤーとしてのアイヌ民族の実力、そうした側面に光を当てることで、アイヌを主体、主人公とする歴史を新しい見方から描くことができるのではないかと、そんな思いが、私の研究の出発点にはありました。最近では逆に、あまりにこうした見方が強くなりすぎて、抑圧・圧迫や差別、そうした歴史があったことは大前提で、それを見過ごすことになっては本末転倒だというような、そういう危惧が言われることがあるくらいです。それほど、アイヌ民族を含むマイノリティのダイナミックな活躍に注目する歴史研究は、ここ2～30年ほど、非常に盛んになっています。

アイヌ史研究の近年の展開

このような、言ってみれば「国際的」な「交易者」としてのアイヌ民族の歴史研究を、最前線で引っ張っておられる研究者のお一人が、旭川市博物館（※講演会当時）の瀬川拓郎さんです（スライド6）。瀬川さんはたくさんの著書を公にされていますけれども、最初にまとめられたのが、2005年に出た『アイヌ・エコシステムの考古学』です。この本の中で示されたさまざまな視角が、その後の著作にもエッセンスとして反映されていると思います。多くの刺激的な論点が提出されておりますが、一つには、北海道社会が10世紀ころを境に大きく転換するんだという見通しです。それを瀬川さんは「縄文エコシステム」から「アイヌ・エコシステム」への転換と呼びました。要点をかいつまんで申しますと、旭川、上川地方の遺跡を分析すると、縄文時代のムラは河川氾濫を避けて高い所に作られて、自然界のさまざまに利用できるもの、多様な資源の分布に応じて幅広く遺跡が立地している。当時の人々は、特定の資源だけを重視しないわけです。ところが、旭川、上川では、擦文時代になると、氾濫のリスクを冒してまでも、サケの産卵場の近くにムラが集中して営まれるようになる。それは、サケを集中的、集約的に取ることで、商品として外部社会へ出荷する、そうした新たなライフスタイルへの転換、さらには人間と自然界とのかかわりかたの転換があったのだ、ということを描かれています。

天塩川流域でも、サケの産卵場の近くに擦文文化の遺跡が集中するというのを、ここ数日のにわか勉強で改めて知ったのですが、天塩川流域にもある程度応用の利く話かもしれません。いずれにせよ瀬川さんは、アイヌの歴史を、素朴、平和で変化のないアイヌ社会ということではなくて、活発な生産、交易活動を基盤に、富の蓄積や、身分階層や戦いなどが存在するような、非常にダイナミックな社会としてとらえ直していきます。

瀬川説のもう一つのポイントは、従来のような、12世紀、13世紀に擦文文化が終わって、それ以後「アイヌ文化」になりますという時代の区切り方とは、違う視点になっているところです。つまり、いわゆる「擦文時代の中期」である10世紀ごろ、商品的価値の高い資源を重視する、新しいライフスタイルへの転換があり、その変化が、アイヌの長い歴史のなかでも非常に重要なんだ、そうした見通しを述べられているわけです。

瀬川さんの理論は、当初、旭川、上川のサケを中心に組み立てられたのですが、商品的に用いられる生産物への特化、集中と、対外交易への傾斜という状況の進展は、もっといろいろな産物についても言える可能性があります（スライド7）。古代以来、北海道から本州に運ばれたさまざまなモノを見ていきますと、たとえばヒグマ、アザラシ、アシカ、クロテン、ラッコ、シカなど、さまざまな毛皮類ですね。さらに医薬品としての熊の胆ですとか、あるいは高級な矢羽根に使われたワシやタカの尾羽。あるいは鷹狩りに使う、鷹匠が訓練して鷹狩りに使う生きたタカ。また、もちろんサケや昆布、こうしたさまざまな産物について、個別のモノについての研究を深めていくことで、今まで情報が少なくて分かりづらかった古代の北海道、アイヌを取り巻く流通の状況の具体的な手がかりが得られるようになると期待されます。

続縄文文化・擦文文化とオホーツク文化

続いて、古代北海道に存在したオホーツク文化、擦文文化という二つの文化について概要をお話いたします（スライド8）。スライドの左手にありますのが、北見市の常呂で見つかった、オホーツク文化の住居跡です。非常に大きくて、10メートル以上あるものも珍しくありません。形は、上から見ると六角形だったり、五角形だったりします。オホーツク文化は、大陸の靺鞨（まっかつ）と呼ばれた人々の文化と関わりが深いと言われますが、この巨大で六角プランの住居については、実は靺鞨の文化にも見あたらないのです。ただし、サハリンでは何カ所か似たものが見つかっています。こうした特殊な形態の住居の系譜が、オホーツク文化の出自にも関わって議論になっています。

それに対して右側は、千歳市の末広遺跡という擦文文化のムラの発掘の様子です。一軒一軒の住居は、ご覧のとおり四角くて、せいぜい4～5メートルという規模です。また、かまどの煙を屋外に出す穴がある。かまどがついていたんですね。かまどは、5世紀ごろに朝鮮半島から日本列島に入ってきた新しい文化ですけれども、それが日本列島、本州などにも普及して、およそ8世紀には北海道にもかまどが入ってくる、大きくはそうした流れになります。住居一つ取っても、オホーツク文化と擦文文化とでは、かなり特徴や歴史的背景に違いがみられるわけです。

さて、私が先ほどアイヌの歴史における「古代」の始まりではないかと言いました、続縄文後

半期の状況です（スライド9）。道北の一部には、鈴谷（すすや）式とか十和田（とわだ）式という、初期のオホーツク文化の遺跡が分布しています。しかしそれ以外の大半の地域では、北海道のかなり広範囲にわたって共通性の高い土器（後北 C2・D 式～北大式）が用いられていました。特に、3世紀から5世紀には、こうした土器は本州北部からもたくさん出土しています。この時期、北海道の人や文化が本州北部へ南下し、あるいは本州の中央部から弥生文化、古墳文化が北上して影響を及ぼしました。両者がクロスし、交流する中で、やがて続縄文文化は擦文文化に転換します。7世紀後半ころの出来事です。

擦文文化が成立したてのころ、分布の中心は、今でいうと道南と道央です（スライド10）。同じころ、オホーツク文化は、オホーツク海の沿岸に沿って、道東方面や千島列島にかけて分布域を大きく広げています。ちなみに、どうも6～7世紀ごろまでは、オホーツク文化は日本海沿岸にも南下していた形跡があります。近年、奥尻島でオホーツク文化の住居や貝塚が見つかっています。

オホーツク文化は基本的に海洋民と言ってよいような人々で、海辺にムラを作り、海で漁撈、漁業をしたり、アザラシやクジラのような海獣をとったり、そういう生活にたけた人々です（スライド11）。スライドの右下にありますのは、根室市で見つかった有名な資料で、骨角製の針入れなのですが、オホーツク文化の人が船に乗って、銚を構えてクジラ漁をしている様子が描かれています。オホーツク文化の人々の生活の一端を伝えるものです。オホーツク文化の人々は、こうした海に依存する生活の一方で、陸獣であるクマをたいへん深く信仰していました。アイヌ民族の熊送り、イオマンテの源流にはオホーツク文化が関わったのではないかという議論もあります。そのほか、クジラなどに対する儀礼の跡も見ついています。

オホーツク文化と大陸系文化

また、オホーツク文化には、北方ユーラシアの文化の影響が非常に強くて、金属製品など、大陸製のものを中心にたくさん持っていた点も特徴です（スライド12）。オホーツク文化が分布を広げ、擦文文化が成立した7世紀は、東アジア全体で変動があった時代です。細かなプロセスは時間の関係上省きますが、要するにこの時期、倭国（日本）でも、645年のいわゆる乙巳の変、大化の改新と呼ばれるような政変・改革など、国家建設への動きが加速します。その元をたどると、6世紀末に、中国では分裂時代が終わって、隋という統一帝国が誕生します。そのショックによって、アジアに激震が走るわけです。そうしたなかで、7世紀には、倭国から日本への国家形成、あるいは朝鮮半島で百済や高句麗が滅亡し、新羅が統一を達成する、あるいはその北に渤海という国家が生まれるというような、一連の激しい動きが生じます。そして、こうしたアジア規模の激動は、日本列島の北方や、南もそうですけれども、周辺地域にも確実に波及していく。大きく見れば、北海道史、アイヌ史も、7世紀のアジア的な動向と決して無関係ではなく、確実に連動している側面があるのです。

古代日本が、東北の蝦夷（エミシ）の人たちに何度も軍事行動、戦争をして領土を拡大していたことは、坂上田村麻呂とか、阿弭流為（あてるい）とか、よく知られていることだと思いま

すが、実は同じころ、大陸の渤海も、北方の靺鞨の人々を征服していき、領土を拡大していました。ただし、そうした中でも、北方の黒水靺鞨と呼ばれる強いグループなどは自立勢力を保って、オホーツク文化とも関係を持っていました。よく引き合いに出されますのが、枝幸町の目梨泊遺跡から見つかった、国指定重要文化財にもなっている一連の出土品です（スライド13）。ここに挙げたのは青銅製の帯金具、ベルト飾りですけれども、左下のものがロシアのトロイツコエ遺跡から出たもので、古代の極東地域、アムール川流域などで靺鞨人によって使われていました。ほとんど同じものがオホーツク文化にも何点も入っています。

中国の7世紀の文献には、「流鬼」と呼ばれる北方民族のことが書かれています。『通典』という唐代の史料であるとか、『新唐書』という唐についての歴史書など、いくつかの文献に載っています（スライド14、16）。それらによれば、「北海」のさらに北、三方を海に囲まれた地に「流鬼」の国があって、靺鞨の中には海を越えて流鬼と交易する者がいた。そして靺鞨は流鬼に、唐という大国が非常に繁栄していることを伝えたので、640年に流鬼の使節団が唐を訪れた、長安までやってきた、と記録されています。『新唐書』によれば、この時、流鬼は唐にテンの皮をもたらしたようです。この流鬼は、一体どこの人々だったのか、以前から論争になっています。サハリン説のほか、カムチャツカ半島にあてる説などもあって、必ずしも決着はついていないのですが、ちょっと時間の関係で論証を省きますが、オホーツク文化、特にサハリンのオホーツク文化こそ、640年に靺鞨との関わりを通して唐と交渉した流鬼なんじゃないかという意見を、北大名誉教授の菊池俊彦先生などが唱えられております。私はこの見解に賛同しているところです。

先ほど、オホーツク文化と靺鞨の文化とのつながりについてお話しましたが、7世紀のオホーツク文化の土器文化として、刻文土器と呼ばれるタイプの土器が普及します（スライド15）。これはもともと靺鞨に由来する大陸的な土器です。どうやら7世紀前後、オホーツク文化には、大陸の靺鞨からのかなり大きな影響が及んだようです。しかもこの時期は、オホーツク文化の分布がめざましく拡大する時期にあたっています。7世紀には、靺鞨とのつながりが強まって、その後押しによってオホーツク文化が全盛期を迎えたのではないかと、そんなふうに考えたいと思います。

擦文文化の成立と展開

一方、擦文文化は、続縄文文化が本州との交流によって文化変容するなかで、7世紀後半ころに成立します（スライド17）。はじめは道央、道南を中心地に成立して、その後、各地に分布を広げていきます。擦文文化の遺跡では、鉄器がしばしば出てくる一方で、石器はほとんど見つからない。かなり鉄器社会化が進展している、そういう状態です。また、擦文文化の土器は、土師器（はじき）という教科書にも載っている土器、古代日本で一般的に使われていた土器の影響を強く受けて成立しました。先ほどお示したように、本州とほぼ同様の、かまど付きの竪穴住居も普及していました。あるいは、「北海道式古墳」と呼ばれる小規模なマウンドを持つ墓、東北の八戸市などに、末期古墳と呼ばれる8世紀や9世紀のごく小規模な古墳がありますけど、それらと似た墓も見られます。また、ここはちょっと難しいところなんですけれども、擦文文化の前期には、狩猟や動物信仰の考古学的な痕跡が、前の時代に比べると少ないという指摘があって、むしろ

る農耕の比重が高かったんじゃないかという意見もあります。

今、お話ししたことをまとめて申しますと、擦文文化の生まれた当初は、少なくとも見た目では、物質文化の面で本州との共通性がかなり高いわけです。擦文文化は、続縄文文化が本州と交流していく中で、かなり大胆に本州文化の影響を取り入れて成立したと言えそうです。ところがその後、ちょっと時間が経ちますと、土器の形態や文様を見ても、再び独自の個性を強めていく。おそらくそこには、アイデンティティの表現のような意味があったと思いますが、そうした動きが強まっていくようになります。

時代ごとの分布を図示します。おおむね黄色い丸がオホーツク文化の遺跡で、オレンジが擦文のつもりで描いています。8世紀ころ、擦文文化の成立当初は、道南・道央を中心に分布しています（スライド18）。これが9世紀後半から10世紀になりますと、おそらく本州との交易で力をつけたことが背景にあるかと思いますが、まず日本海沿岸を北上して、さらに道東方面へと広がっていき、集落遺跡が各地につくられるようになります（スライド19）。11～12世紀の擦文後期には、北海道のほぼ全域が擦文文化で覆われる状態になっています（スライド20）。この時期には、青森県や、秋田県の北部、またサハリン南部や千島列島の一部でも擦文土器が出土します。

倭国・日本と古代北海道

ところで、7～8世紀の、続縄文終末期から擦文文化成立期のころの遺跡からは、しばしば鉄製の大刀が出土します（スライド21）。千歳市、恵庭市や江別市、また小樽市、余市町など、各地で見つかっています。大刀、刀というものは、単なる武器ではありません。「三種の神器」の一つにも草薙の剣がありますが、いわば地位、身分の印としての側面があったわけです。例えがいいかどうか分かりませんが、卑弥呼が魏に使いを送って金印や鏡をもらったとか、それと似たような関係が、倭国・日本の王権と、北海道社会との間にも一時期成立していた。各地の有力者が、倭・日本と外交して、刀をもらって、自分たちの身分、地位の後ろ盾にするというような、そういうことを想定できるかもしれません。そこで、この時期の文献史料を見ますと、『日本書紀』の斉明天皇の、658年から660年にかけて、阿倍比羅夫というヤマトの有力豪族が北方に船団を率いて行ったという記事があります（スライド22）。これについて、いろんなことが言われていますけれども、私は、続縄文末期から擦文初期にかけて、倭国と北海道社会との接触・交渉が実際にあった可能性は高いだろうと考えています。その背景や実態についてもいろいろ言われています。探検的なものだったとか、日本列島が北のほうで大陸とつながってるのとかどうか確かめに行ったりとか、同盟国の高句麗と北回りで連絡をとろうとしたとか、さまざまな意見がありますが、私は、基本的には倭人が古代国家を作っていく中で、大王、天皇の「徳」を高めたいということがあったのだらうと思っています。強力な国家を建設するためには、王様の徳を高めて、政治的な中心、支配者の求心力を強めたいという、そういう必要性に駆られるわけです。そのための方法の一つに、遠くの異民族と関わりを持って、そこの人々の朝貢を促すということがありました。「朝貢」といっても、実質は交易だったり、お土産を持ってやってきてもらって、盛大にもてなしたり、ということなんです。「我々のもとには、こんな遠くの人々まで朝貢してくる」と主張することは、中

国の古典にもとづいた、「王の徳」を証明するうえでの一つの定石、パターンでした。

『日本書紀』は、阿倍比羅夫が出会った人々として、「渡島蝦夷」（わたりしまのえみし）や「肅慎」（しゅくしん）などの集団を記録しています。これにもいろいろな意見がありますが、私は「渡島蝦夷」は続縄文末期や擦文の人々、「肅慎」はオホーツク文化の人々である可能性が高いと思います。「肅慎」は、本来、中国の古典に出てくる伝説的な北方民族の名称です。日本の史料では普通、「みしはせ」とルビがふってありますけれども、最近の研究では、実は「あしはせ」と訓むのが正しいんじゃないかと言われていました。

こうした、倭国、日本の人たちが自分のほうから北に行って現地の人々と交渉するという形態は、ごく一時的なものだったようです。8世紀になると、天平5年（733）、日本政府は、現在の秋田市に秋田城を置きます。多賀城のような、行政と軍事の機能を備えた「城柵」です。この秋田城には、渡島蝦夷が毛皮などを持って定期的に交易しにくるようになります。秋田城という交易基地の建設によって、北海道と日本社会のあいだの交易は安定的におこなわれるようになり、そうした状況が100年以上続きます。その過程で、さまざまな文化や物資が行き来しました。

古代北方産物の政治的意義

最初のほうで、オホーツク文化がヒグマを重視していたという話をしましたが、ヒグマの毛皮は、日本史上最古の北海道産物の記録とっていいかと思います（スライド23）。『日本書紀』によると、阿倍比羅夫が「肅慎」とトラブル、戦闘になったとき、阿倍比羅夫は「生きたヒグマ二つ」と「ヒグマの皮70枚」を入手して帰ったと記録されています。ヒグマの毛皮を何に使うかという、ちょっと後の記録になりますが、「およそヒグマの皮の障泥（あおり）は、五位以上、これを著（き）るを聴（ゆる）せ」という規程が、10世紀に成立した『延喜式』という法典に載っています。「障泥」は馬具の一種で、五位以上の貴族じゃないと、ヒグマの皮の馬具は身につけてはいけないということですね。北海道の産物は、そうした貴重品、ステータスシンボルとしての意味を持っていたということが言えます。

もう一つ、こうしたヒグマの毛皮のような北方の産物を入手することは、倭・日本の政府、王権にとって非常に重要な意味がありました（スライド24）。ここにあげたのは、『日本書紀』の斉明天皇5年の記事です。高句麗からきた外交使節が、都の市場でヒグマの毛皮一枚を売りつけようとした。日本にはヒグマの毛皮はないだろう、非常に貴重品だろうということで、高く吹っかけるわけなんですね。ところが、市場の役人は笑って取り合わなかったのです。その後、高句麗出身の渡来人で、絵師の子麻呂という人が、その使節を自宅に招待するのですが、その時、国庫からヒグマの毛皮70枚を借りて、ずらっと敷いておいたというのです。「国庫から借りたヒグマの毛皮70枚」は、明らかに阿倍比羅夫が「肅慎」から入手した70枚の毛皮です。それを見て、一枚のヒグマの毛皮を売りつけようとした高句麗の使者は、びっくり仰天して帰っていったという、そういう話があります。

これは、つまらない意地の張り合いのようにも見えますけれども、こうしたことが当時、国家間の威信を左右するような意味を持ったわけですね。北海道社会とつながりを持ち、その産物を入

手することは、アジア的な外交の中で、倭国、日本にとって非常に重要だったということが、こういう例からも分かると思います。

「古代アイヌ史」としての擦文文化の時代

先ほど、擦文前期の文化は、一見するとかなり本州的だとお話ししました。こちらは、復元されたものですが、「北海道式古墳」と呼ばれる、江別市で見つかった小規模な古墳です（スライド 25）。こちらの土器は、擦文前期の土器ですが、非常に本州の土師器からの影響の強い、あるいは土師器そのものと言っていいような土器です。この時代の土器には、輸入品である須恵器（すえき。窯を使って高温で焼かれた陶質土器）なども混じっています。あと、これは蕨手刀（わらびてとう）という刀です。柄の所が蕨のような形をしています。宮崎駿の『もののけ姫』で、主人公のアシタカが持っているのはこれだという設定になっているそうです。こうした刀などが、8世紀ころの北海道ではかなりたくさん見られるという状況があります。

このように、繰り返しになりますが、擦文文化は、本州との文化交流を踏まえて、本州文化の影響を強く受けて成立したということが、考古学的には言えるわけです（スライド 26）。ところが、少し時間が経ち、9世紀後半から10世紀ころになると、擦文土器は、本州の土師器の影響を受けた無文的な土器ではなくなり、豊かな独自の装飾を施す土器に変化していきます。ここで大事なポイントは、本州との交流が滞ったからそうなったのではなく、むしろ本州との交流はますます盛んになっているのです。そうした中で、かえって自らのアイデンティティを強調するようになる。そうした傾向が、土器一つ取ってもいうことができます。

こういう表現が適切かどうか、ちょっと分からないんですけども、ハードウェア面で本州系の文化をかなり大胆に受容しつつも、それを独自のソフトウェアで上書きするような、そういうプロセスがあったと言えるのではないのでしょうか。10世紀前後という時期は、先ほどご紹介したように、瀬川拓郎さんが「アイヌ・エコシステムへの転換期」とする時期とほぼ合致しています。10世紀は、一般的には擦文文化の中期とされる時期ですが、私は、この10世紀は、もっと幅広く、アイヌ史全体の中で一つの転換点となるような時代ではないかと思っています。

道北のオホーツク文化（7～8世紀）

だいぶ時間が押してまいりましたが、肝心の道北の状況などについて、もう少しお話しします。後の氏江先生のお話とも重なるところがありますが、道北における古代遺跡の変遷を見ていきますと、道北は、7～8世紀には基本的にオホーツク文化のテリトリーです（スライド 28）。礼文、利尻を中心に、網走とか、天塩とか、北見枝幸などでオホーツク文化の集落や墓が見つかっています。道南にも、奥尻島青苗砂丘遺跡というオホーツク文化の遺跡がありますが、それを例外とすれば、天塩河口あたりが、住居を伴うものとしては、オホーツク文化の分布のほぼ南限になるかと思います。オホーツク文化の土器は、もうちょっと南の方にも点在していますが、道北は、オホーツク文化が日本海沿岸やオホーツク海沿岸の各地に進出する際の、前進拠点のような場所だったと言えるかもしれません。

ちなみにオホーツク文化では、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、遺体の頭部に土器の甕をかぶせる、「被甕葬」と呼ばれる特徴的な埋葬方法が知られています（スライド 29）。網走市のモヨロ貝塚、枝幸町の目梨泊遺跡などでとくに顕著です。ところが、こうしたお墓の特徴は、利尻や礼文などのオホーツク文化ではみられないことが知られています。また、北見枝幸や網走モヨロ貝塚などでは、先ほどお話ししたような、金属製の貴重品と呼べるような品が多く見つかっていますが、そういう貴重品について、利尻、礼文などではちょっと乏しいということが指摘されております。これについて、高島孝宗さんなどのご研究があります。

反対に、道北、利尻・礼文や、サハリンでは特徴的だけれども、道東のオホーツク文化ではほとんど見られない文化として、ブタを飼うということがあります（スライド 30）。北方系のカラフトブタです。先ほどの『通典』の「流鬼」の記事には、女性がブタやシカの皮を着るという記述がありまして、流鬼＝オホーツク文化説の根拠の一つにもされています。オホーツク文化に強い影響を及ぼしていた靺鞨社会でも、ブタを相当飼っていました。たくさん飼うことが、一種の富のシンボルになるような意味合いもあったようです。

まだ難しいところはありますが、道東や北見枝幸などのオホーツク文化の遺跡には、かなり金属製の貴重な物が入っている。一方、利尻、礼文などではそうした物があまりみられない。けれども、その代わりブタを飼っている。もしかしたら、自分たちの富や威信をどこに傾けるかというところで、道北と道東で何か性格、価値観の違いとか、選択の違いがあった可能性はないかという気がしています。

道北の擦文文化（9～11世紀）

さて、9世紀後半になりますと、擦文文化のムラが道北にも出現します（スライド 31）。小平町や苫前町や、もっと北のほうにも、日本海沿岸で擦文文化の住居が見られるようになります。一方、このころを境に、オホーツク文化はしだいに後退していきます。ちなみに、ブタを飼う文化は、どうも擦文文化には受け継がれなかったようです。

10世紀から11世紀には、多数の竪穴住居を有する擦文文化の大集落が、道北の各地に続々と出現します（スライド 32）。小平や苫前、名寄、美深、天塩、幌延、利尻、礼文、さらには枝幸などにも進出します。こうした中で、オホーツク文化の人々は、多くはサハリンなどに撤退したのかもしれませんが、一部は、擦文文化の影響を受けて、「元地式」というちょっと変容したタイプの土器を作りながら存続していたようです。

当時の道北の擦文文化の状況を見てみますと、ソバとかキビとか、アワとかオオムギとか、穀物の炭化種子や花粉が出てきます（スライド 33）。雑穀の栽培をかなりやっていたようです。また、フイゴの羽口や鉄滓（鍛冶で出るカス）が出土し、小規模な小鍛冶、鉄加工をしていた痕跡がいくつかの遺跡で見つかっています。また、9世紀末から10世紀にかけて、青森県の五所川原市で焼かれた須恵器と呼ばれる高品質な土器、そういう製品が苫前町などで見つかっています。あるいはサハリン系のオホーツク文化末期の「南貝塚式土器」という土器が、ここ名寄市など、いくつかの遺跡で出土しています。擦文時代の道北には、南から北から、双方からの文化の流れ

があったと言えそうです。

これは、道北の日本海側の擦文土器を抜粋して年代ごとに並べた、中田裕香さんの作成された表です（スライド 34）。時期の目安になりますのが、B-Tm（白頭山 - 苫小牧火山灰）という、中国と北朝鮮の国境の、白頭山（長白山）が大噴火した時に噴出した火山灰になります。この大噴火の年代について議論があったのですが、最近、どうも 946 年で確定ではないかという、急速な研究の進展がありました。そこで、この 946 年を基点にみていくと、道北日本海沿岸の擦文の遺跡は、ほぼ 9 世紀後半から 11 世紀末ぐらいまでに収まりそうだといいことが言えそうなのです。つまり、擦文文化は全体として 12～13 世紀まで続くわけですが、どうも道北日本海側の擦文集落は、今のところはっきりしている範囲では、11 世紀終わりぐらいまでしか見られない、そうした状況があります。こちらは小平町の高砂遺跡で、220 軒の住居が調査されました（スライド 35）。9 世紀終わりから 11 世紀末にかけての集落で、12 世紀代にかかる土器はほぼないと言われていています。こちらは、後ほど氏江先生のお話にもあろうかと思いますが、幌延町音類遺跡という巨大な集落で、大規模な発掘調査は行われてませんが、800 軒ぐらいの膨大な数の竪穴住居があるという遺跡です（スライド 36）。

擦文時代における道北の意義

このように、道北では擦文遺跡が 11 世紀代で終わる可能性があるわけですが、これが何を意味するのかというと、なかなか難しいところです（スライド 37）。一つの考え方として、日本海沿岸では流通経済が活発だったので、他地域に先駆けて鉄の鍋であるとか、須恵器や陶磁器、漆器であるとか、そうした外来製品を多量に入手することによって、自家製の擦文土器づくりが早く終わったのではないかと、それだけ流通が盛んだったのではないかと。そうした仮説があります。瀬川拓郎さんは、道北にみられる大規模な擦文集落は、交易に特化した港湾拠点、流通基地なのではないかと推測されています（スライド 38）。

しかし一方で、北海道で出土する鉄製品を網羅的に分析した笹田朋孝さんは、今現在分かっている限りで、道東と道北とを比べると、統計的には道北の鉄製品はずいぶん少ないと指摘されています。したがって、道北での流通が他地域より盛んだったとは言えそうにない、と瀬川説に反論されています。こうした点は、今後も議論されていくことになるでしょう。

内陸の美深町でも、楠遺跡という集落遺跡が見つかっていて、ここも鉄製品の出土は少ないですが、ソバの花粉などが出ています（スライド 39）。また、ここ名寄市の智東 H 遺跡（現在は智東 8 遺跡）は、氏江先生や鈴木先生が 1970 年代に調査された遺跡です（スライド 40）。智東駅の、今朝方ちょっと現地の近くまで行くことができたんですけども、そういう遺跡もございます。ここでも、鉄製品は少ないですが、ソバの花粉が出てまして、ソバを栽培していた可能性があります（スライド 41）。あと、カワシンジュガイの皮がたくさん出てまいりまして、当然カワシンジュガイの身を食べていた。それで、貝殻については、アイヌ文化の「送り」のような儀礼的な扱いをしていた、そういう想定ができると思うのですが、カワシンジュガイの貝殻は、アイヌ民族の伝統的な農耕の中で、雑穀作物の穂を摘む道具として使われるということがありました。基本

的には身を食べていた、それが基本でしょうけれども、あわせて雑穀栽培が盛んで、その道具として使われていた可能性を考える必要があると思います。また、この遺跡では、サハリンのオホーツク文化の人たちが使う南貝塚式土器が出土しています。宗谷海峡を越えてさらに北との交流もうかがわせる、そういう遺跡です。

ところで、先ほど笹田朋孝さんの研究を引いて、道北では鉄の出土量が相対的に少ないというお話をしましたが、一方で、道北には、擦文文化全体を通してまれな、たくさんの鉄製品が集中的に出ているという遺跡もいくつかあります（スライド 42）。発掘調査としてはデータがやや曖昧になりますけれども、1952年、豊富町で二人の札幌の少年が竪穴を発掘しまして、土器碗11点、毛抜形太刀1点、直刀4点、鉄斧8点、鋤先1点など、他にも繊維製品など、非常に多くの遺物を発見しております。豊富町では1957年の北大の調査などもありまして、ここでも比較的多くの鉄製品、擦文文化の竪穴住居としては相対的に多い鉄製品が得られています（スライド 43）。毛抜形太刀というのは、日本刀の源流・原型と言われる太刀なんですけれども、そういう日本の平安時代の刀が出てきたり、一軒の住居址としては、擦文文化全体を通してまれな多量の遺物を保有するケースです。瀬川拓郎さんは、ここで出ている土器のお椀の底に、アイヌ民族のイトッパ（祖印）という記号に似た記号がついていることに注目しています（スライド 44）。それが家柄を示す、家系を示すと仮定すると、この竪穴では、違った系統のものが一度に出土しているので、1世帯ではなくて、複数の家系の人々が集まって、かなり大規模な儀式をおこなったのではないかと、そういう非常に刺激的な推測をされています。

以上のように、擦文時代の道北では、流通が非常に盛んだっただんじやないかと考えられる状況証拠がある一方で、統計的には鉄の量は少ない。でも一部には、例外的に豊富な遺物が出ている事例もあるわけで、今後も検討の必要な問題です。

オホーツク文化と擦文文化の関係とアジア・日本

もう時間がほとんどなくなってしまったんですが、本当にかいつまんで、残りの話をさせていただきたいと思います。従来、オホーツク文化と擦文文化という二つの文化は、相互の交流の痕跡も少なく、だいぶ異質だし、仲が悪いんじゃないか、没交渉なんじゃないかということが言われてまいりました（スライド 46）。『日本書紀』の阿倍比羅夫のくだりで「肅慎」と「渡島蝦夷」とがトラブルを起こしていることも、そうした推測の根拠の一つにされたりします。ただし、実は同じ『日本書紀』には、持統天皇の696年に、「渡島蝦夷」の人と、「肅慎」の志良守叡草（しらすえそう）という人が、共に朝貢してきて物をもっているという記述があります（スライド 47）。つまり、「渡島蝦夷」と「肅慎」は、7世紀終わりには、どうも必ずしも対立的ではなくて、歩調を合わせて共同行動するようになっていた、と言えそうです。非常に大ざっぱな話になりますが、本州の王権・国家、政府といえますか、そうした政治権力の介入によって、それまでは対立的だった二つの集団の関係が調停された、安定化した、そんなことがあった可能性も考えられます。

1999年に千歳市で調査され、話題になったのが、ウサクマイN遺跡です（スライド 48）。ここ

では富寿神宝という平安初期の貨幣、お金と、擦文文化の中心地では初めてと言えるようなオホーツク文化の土器、道東のほうの「ソーメン文土器」が見つかって話題になりました。最近ですと、知床の斜里町ウトロチャシコツ岬上遺跡で、神功開宝という8世紀のお金も見つかっています（スライド49、50）。こうした日本社会の銭が流入するような南との交流があったわけです。貨幣として通用していたわけではなくて、あくまで珍しいもの、一種の宝物、貴重品として入手していたのだと思われます。

先ほど言いましたが、8世紀には、秋田城という国家側の出先拠点で、日本社会と北海道社会との交易が行われていました（スライド51）。そうした状態は100年以上続いたのですが、この交易は、どんどん活発になっていきます。9世紀初頭、802年の記録を見ますと、秋田城に渡島蝦夷がさまざまな貴重な毛皮を持ってやってくるけれども、都の王家や貴族層が良い毛皮を欲しがって、使者を秋田に派遣して買いあさってしまうので、国庫に納める良い品が残らない、だからそうした行為を禁止せよ、そんな法令が出ています（スライド52）。このように、都の王族や貴族たちの経済活動も巻き込んで、秋田城での交易は次第に大規模化していったのです。

論証を省いて単純にモデル化しますと、オホーツク文化は大陸とつながって交流している（スライド53）。また、オホーツク文化は、日本社会向けにもさまざまな毛皮などを生産している。そうした生産物は、擦文文化を中継して秋田城にもたらされ、奈良・平安貴族たちの手に渡る。一種の中継貿易のような、北方圏の物資の流通網があったことが、おおまかには言えるのではないかと考えています。こうした日本社会との交易の拡大を背景として、擦文文化はオホーツク文化との関係を強めていくわけです。さらに、9世紀後半ぐらいになると、擦文文化の人々は、自ら北のほうに進出して、オホーツク文化圏の産物をより直接的に入手しようとするようになります（スライド54）。同じころ、オホーツク文化は擦文文化の影響を受けて変容を始めます。礼文島など道北のオホーツク文化の遺跡では、先ほどお話しした元地式土器の出現のように、擦文文化の影響によってオホーツク文化が独自性を弱めるようになっていきます。一方、道東の方では、やはり擦文文化の影響を強く受けて、オホーツク文化の変容・変質が進みます。これらはトビニタイ文化と呼ばれています（スライド55、56、57）。

実はこのころ、大陸でも情勢の変化がありました。長らく北方でオホーツク文化の後ろ盾になっていた靺鞨（とくに北部靺鞨を代表する黒水靺鞨）が、どうも9世紀には渤海によって制圧されてしまうのです（スライド58、59）。特に、9世紀初頭の渤海王大仁秀の時代に、そうした北部靺鞨征服があったことをうかがわせる記述が、中国の文献に載っています（『新唐書』渤海伝）。渤海による北部靺鞨の征服によって、オホーツク文化は伝統的な大陸とのつながりを失ってしまった可能性があります。そのことによって、オホーツク文化の人々は、鉄の入手などさまざまな面で、南の擦文社会への依存を深めざるを得なくなる。その結果、オホーツク文化は、擦文文化の影響をもろに受けて変容していく。おおまかには、そうしたストーリーが描けるのではないかと考えています。

一方、本州の方では、878年に出羽の国、秋田の周辺で、「元慶の乱」と呼ばれる大規模な蝦夷（エミシ）による反国家闘争が起こります（スライド60）。この元慶の乱をきっかけに、長く続い

た秋田城を拠点とする北方交易体制は崩壊します。日本社会と北海道社会との交流は、一時的に混乱したと思われませんが、10世紀には、今度は青森の各地に、鉄や須恵器など、新しい生産と交易の拠点がたくさん成立していきます。本州社会と北海道社会とは、津軽海峡をこえてよりダイレクトにつながり、北方世界の交易・交流はさらに大規模に発展していくようになります。

平安日本とワシ羽・クロテン皮

もう時間なのですが、最後にちょっとだけお話しさせていただくと、10世紀以後、擦文文化は道北や道東へ大々的に、あるいはサハリン南部や千島列島の一部まで広がっていきます。従来、その要因として、本州との交易が拡大していく中で、ヒグマであるとかアザラシであるとか、そうした毛皮をもっともっと欲しいということで進出していったとも言われていました。その一方で、最近注目されている産物に、ワシの羽根があります(スライド62、63)。弓矢の矢羽根として、平安時代の貴族たちが宮中の儀式に用い、あるいは武士たちが使ったものです。平安末期の『平治物語絵巻』などを見ますと、そうした矢羽根の模様や色が実に細かく書き分けられていて、武士たちがこうした矢羽根の装飾に相当こだわっていたということがよく見て取れます(スライド64)。なかでも、大陸からやってくる渡り鳥で、北日本、とくに北海道で越冬するオオワシやオジロワシの尾羽根は最高級品でした。江戸時代の記録が残っていますが、非常に高価なものです。

こちらは、『蝦夷島奇観』という江戸後期の絵巻の一部です(スライド65)。アイヌ民族がワシを捕獲する様子を描いたもので、その詞書(ことばがき)に、「みちのくの えぞがちしまの 鷲の羽に 妙なるのりの 文字もありけり」という鎌倉時代の歌が引用されています。要するに、東北地方のさらに北の方の、「えぞ」の土地でとれる鷲の羽根には、妙なるのりの文字(ありがたい梵字、サンスクリット文字)が書かれているよ、と言っているのです。鎌倉時代の人々が、北海道産のワシ羽根の複雑な模様をサンスクリット文字に見立てたりして、その味わいを愛好したということが分かる歌です。

オオワシやオジロワシは、道北・サハリンや道東にとりわけ多く分布します(スライド66)。近年、10世紀ころの擦文文化の道北や道東への拡大の背景には、こうした本州でのワシ羽根の需要の増大があったのではないかと、という可能性が指摘されています。

もう一つ注目したいのが、イタチ科の小動物であるクロテンの毛皮です(スライド67、68)。クロテン皮は、ヒグマよりもさらに高級品扱いされる貴重な毛皮でした。なかでも有名なのが、『源氏物語』の末摘花の帖で、光源氏が末摘花という女性に会った時、末摘花が「ふるきのかわぎぬ」(クロテン皮のコート)を着ていたという話です(スライド69)。この「ふるきのかわぎぬ」は、従来は大陸、渤海から輸入されていたという説が強かったんですけども、実は当時の記録をよく見てみると、渤海からクロテン皮が来ている実例は非常に少ないのです。それに、クロテン皮の利用は、10世紀の平安貴族社会に目立つのですが、渤海は、10世紀初めの926年には滅亡してしまっています。

では、平安日本はどうやってクロテンの毛皮を手に入れていたのかと考えたとき、注目すべき記述があります。1015年、有名な藤原道長が、中国(宋)に行くお坊さんに託して、中国の天台

山という仏教の聖地への贈り物として、「奥州の貂裘」というものを送っているのです（『御堂関白記』）（スライド 70、71、72）。奥州、つまり本州東北地方にはクロテンは生息していませんから、おそらくこれは、奥州藤原氏のような東北地方の権力者（この時期はまだそれに先立つ安倍氏・清原氏などの時期ですけれども）が、北海道方面から入手したクロテンの毛皮だと思われるわけです。また、江戸時代の事例を見ると、エゾクロテンは冬毛が黄色く、毛皮としての価値が劣るのに対して、サハリン産のクロテン皮は、本場の満洲でも珍重される良品で、4倍ぐらいレートが違ったという話もあります（松田傳十郎『北夷談』）。したがって、擦文文化の人々が、エゾクロテンよりさらに高品質な、サハリン産のクロテン皮を入手しようとしていた可能性も考えられます。現在、サハリンでは何カ所かの遺跡から擦文土器が見つかっています。一方、氏江先生のご研究がありますように、サハリンの南貝塚式土器が、何点か北海道内で出土しています。サハリンと北海道との相互交流があったわけです。私は、10～11 世紀前後の宗谷海峡を越える交流の背景に、平安貴族社会によるクロテン皮の需要があった可能性はないだろうかと考えております（スライド 73、74、75）。

さらにこのころ、大陸では、「海東青」と呼ばれた、おそらくサハリン産のタカが名産として注目されるようになっていました（スライド 76）。そうした大陸側のタカの需要がサハリンや北海道に影響を及ぼした可能性も考えていく必要があろうと思っています。

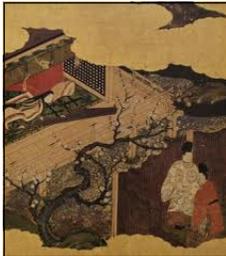
時間も過ぎていますが、こちらを紹介させてください。ごく最近（2018 年）、3 月 7 日の『岩手日報』で発表された記事で、擦文土器が、岩手県の平泉で見つかったという報道です（スライド 77）。今のところ、最も南の擦文土器の出土ということになります。平泉は、北方世界に深く関わった奥州藤原氏のお膝元ですから、擦文土器が出てきても不思議な場所ではありますが、実際に出るとやはりびっくりしました。今後もさらに注目されるところです。

おわりに

これで本当に最後になります。道北という地域は、ちょっと単純な言い方になってしまうかもしれませんが、古代を通して「境界領域」「接触領域」であって、決して「端っこ」であったわけではない。非常に豊かな異文化交流の場所であったということが一点です（スライド 78）。また、「アイヌ民族の精神」について、一般にしばしば「自然との共生」というイメージが強調されます。それは必ずしも完全に間違いとは言えませんが、その一方で、自然界の産物を存分に利用し、外部社会と活発な交易活動をおこなっていた人々としての側面がありました（スライド 79、80）。前近代のアイヌ民族は、想像以上に激しい商品経済の荒波に向き合いつつも、自然界や神々にたいする畏敬や感謝を見失うことなく、自分たちの社会と文化を持続可能な方向で洗練させてきたと言えるのではないのでしょうか。アイヌ民族は、一見相反するかのような二つの原理を、バランスを取りながら調停・両立させてきたと思うのです。そのような意味でも、近代以前のアイヌ民族の歴史は、現代社会に重要な示唆を与えてくれるのではないかと、ここ数年、私はそのように考えています。

かなり時間を超過してしまい、申し訳ございませんでした。これにて私のお話を終わらせてい

ただきます。ご清聴どうもありがとうございました。



「第22回道北の地域振興を考える講演会」

In 名寄市立大学
2018年3月19日



道北の古代交流が現代に語りかけるもの —アイヌ史研究の新潮流—

1



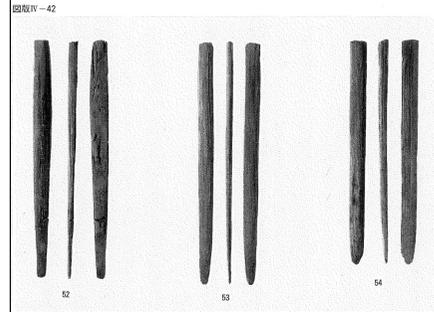
北海道大学
アイヌ・先住民研究センター
蓑島 栄紀
MINOSHIMA Hideki



序:「アイヌ史」と古代北海道史の課題

2

下:北海道埋蔵文化財センター編2003『ユカンボシC15遺跡(Ⅵ)』より、続縄文後半期～擦文前期の層位から出土したイクパスイ?



右:今石みぎわ・北原次郎太2015『花とイナウー世界の中のアイヌ文化』より、北原次郎太画



北海道の歴史年表と「アイヌ史」の課題

3

- 旧石器文化 約30000年前?～
 - 縄文文化 約13000年前～
 - 続縄文文化 前3世紀～6世紀ころ
 - オホーツク文化 5世紀～9世紀ころ
 - 擦文(さつもん)文化 7世紀～12世紀ころ
 - アイヌ文化 13世紀～近代
- 共存

⇒弥生文化がない(本州との分かれ道)
⇒以後、独自の歴史

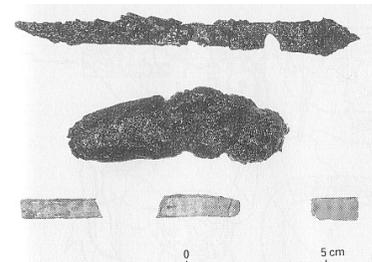
※アイヌの歴史は「アイヌ文化期」から始まったわけではない(それ以前も広い意味で「アイヌの歴史」ととらえる歴史像、枠組みが必要)
※遅くとも2～3万年前には北海道にも人類が居住していた。ただしどの時点からを「アイヌ」と考えるかについては難しい問題がある



日本列島の北の玄関:北海道

4

⇒北九州や南西諸島と並んで、日本列島における対外交流の玄関
• 本州との交流も活発
⇒本来、日本列島で最も異文化交流の活発な地域



図IV-3-1 植別川遺跡2号墓出土の刀子(上・中)と銀製品(下の3片)

(参考)マイノリティ研究の新たな動向

- 「たしかに、抑圧された人びとの歴史の復権をとおして国民国家を問い直すことは必要であるが、マイノリティ集団の相対的独自性を主張するだけでは、異文化集団が共存しうる多元社会の実現、という今日の課題にはこたえられない」
- 「迫害され、ひっそりと辺境に押し込められたマイノリティ集団にではなく、**国家や異文化間の差異を自らの活躍の場として、ダイナミックに存在してきた人びとの生き方に焦点をあてていきたい**」(田村愛里『世界史のなかのマイノリティ』山川出版社、1997)

⇒活発な交流・交易や、国際的活動にスポットあてる

⇒1990年代～現在までの研究動向をよく表現(限界も)

⇒「アイヌ民族の歴史には、交易やそれによる富の蓄積などのダイナミックで力強い側面が存在。そうした実力や主体性、アジア的なフィールドで活躍するプレーヤーとしての側面、その部分に光をあてることで、アイヌを主人公とする歴史を新しい観点から描くことができるはず」(※叢島の研究の出発点)

5

「縄文エコシステム」から「アイヌ・エコシステム」へ(近年の瀬川拓郎氏の見解)

6

- 10世紀前後を境に、北海道社会は「縄文エコシステム」から「アイヌエコシステム」へ転換(瀬川氏の仮説の要点)
 - 縄文時代のムラは、河川氾濫を避けて台地上につくられ、多様な生業条件に適応して立地(特定の資源だけを重視しない)。
 - 擦文時代のムラは、氾濫の危険を冒して、サケの産卵場の近くに集中(「商品」としてのサケを集中的に捕獲)
- ⇒擦文時代中期(9世紀末～10世紀前後)、商品的価値の高い資源を重視して、生業システムの大転換 = 「アイヌ・エコシステム」の成立

⇔12～13世紀に「アイヌ文化期」へ、という通説と異なる理解

⇒静的で平和なアイヌ社会像ではなく、**活発な生産・交易活動**や、**富の蓄積、身分階層、戦い**なども存在する動的な社会としてとらえなおす。



激動する古代の北方世界

国家と商品に抗しながら其生と持続を模索する古代アイヌの人びと。「縄文エコシステム」の終焉と新たな行旅現象社会への構造的転換。不変と純粋ではなく変化と異化に満ちアイヌ文化の成立とその固有性。戦々の前哨点を提示し、アイヌ考古学の地平を切りひらく創造的試み。

古代以来の北海道からの輸出品候補リスト

7

- 陸・海獣皮 ヒグマ・アザラシ・アシカ・ク ロテン・ラッコ・シカなど(時代順不同)
- 熊の胆(医薬品・天野哲也説)
- ワシ・タカの尾羽(高級な矢羽の材料。初見は10世紀)
- タカ(鷹狩りに使用)
- サケ(瀬川拓郎説では古代から。中世以後は確実)
- 昆布(古代から? 中世以後は確実)
- 金(確実なのは近世以後。瀬川説では古代末から)
- 大陸製品(蝦夷錦<近世または中世以後>・ガラス玉など)

⇒豊かな北方世界の特産品



(※榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iよりアザラシ皮(水豹皮)、矢羽根)

I : 古代の北海道—オホーツク文化と擦文文化

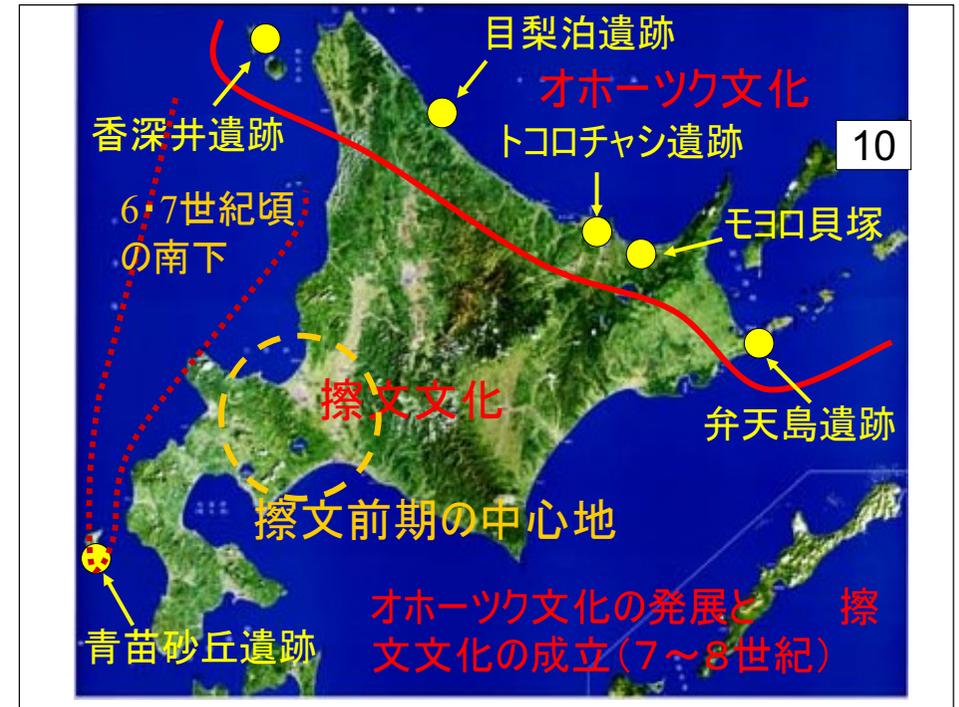
8



左:オホーツク文化の六角形の大型竪穴住居(常呂町トコロチャン遺跡)

右:「本州的」な擦文文化のカマド付き竪穴住居(千歳市末広遺跡) ※北海道開拓記念館1997『北の古代史をさぐる 擦文文化』より



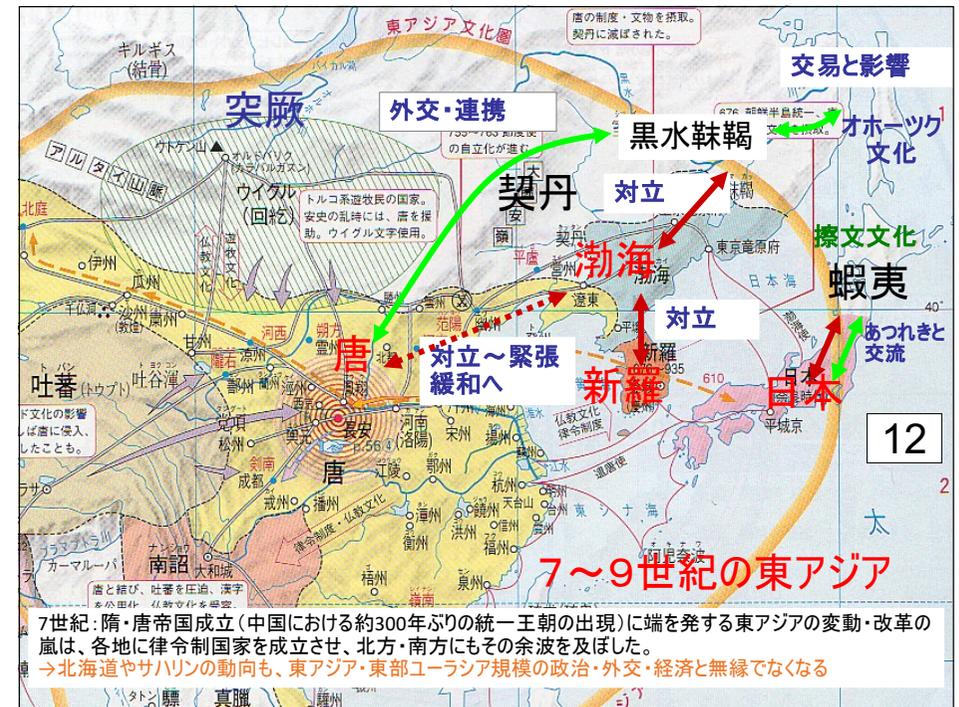


オホーツク文化の特徴

11

- 海辺の生活 海獣狩猟・海洋漁労が高度に発達
⇒基本的に「海洋民」か
- クマ・クジラなど動物への信仰が発達
※仔熊飼育型クマ送り儀礼の存在
- 五~六角形の大型竪穴住居
- 大陸系文化の色彩が色濃い(同時代の**靺鞨**(まっかつ)文化との関連)
- 豊富な金属製品(とくに大陸製品)

(※榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iより根室市弁天島遺跡出土の針入れ)



靺鞨とオホーツク文化

13



上:網走市モヨロ貝塚出土、下:ロシア連邦トロイツコ工遺跡出土、右:枝幸町目梨泊遺跡出土
(※榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iより)



サハリン・北海道方面の古代交流の記録 7世紀における「流鬼」の入唐

14

- 「北海」のさらに北、三方を海に囲まれた地に「流鬼」の国がある
- 靺鞨のなかに、海をこえて流鬼と貿易する者がある
- 靺鞨は流鬼に唐の繁栄ぶりを伝えた
- 640年「流鬼」の使節は、靺鞨に同行して唐に来朝
(以上、『通典』边防・流鬼条など)
- そのとき流鬼は、唐に「テンの皮」をもたらした(『新唐書』)

⇒古代中国の文献に記された「流鬼」とは、どのような人々か？



7世紀における靺鞨系土器文化の普及

15



7世紀、オホーツク文化の土器文化として、「刻文土器」が普及

→もともと靺鞨の土器文化に由来する大陸系要素

→靺鞨との関係の強まりを示唆

⇒しかもこの時期が、オホーツク文化の拡大期にあたる



上:礼文島浜中2遺跡出土(北大蔵)、
下:青苗砂丘遺跡出土(奥尻町HPより)



古代中国史料の「流鬼国」はどこか？

16

「流鬼国」=カムチャツカ半島説もある

→しかし、オホーツク文化は、靺鞨文化との関わりがきわめて深い

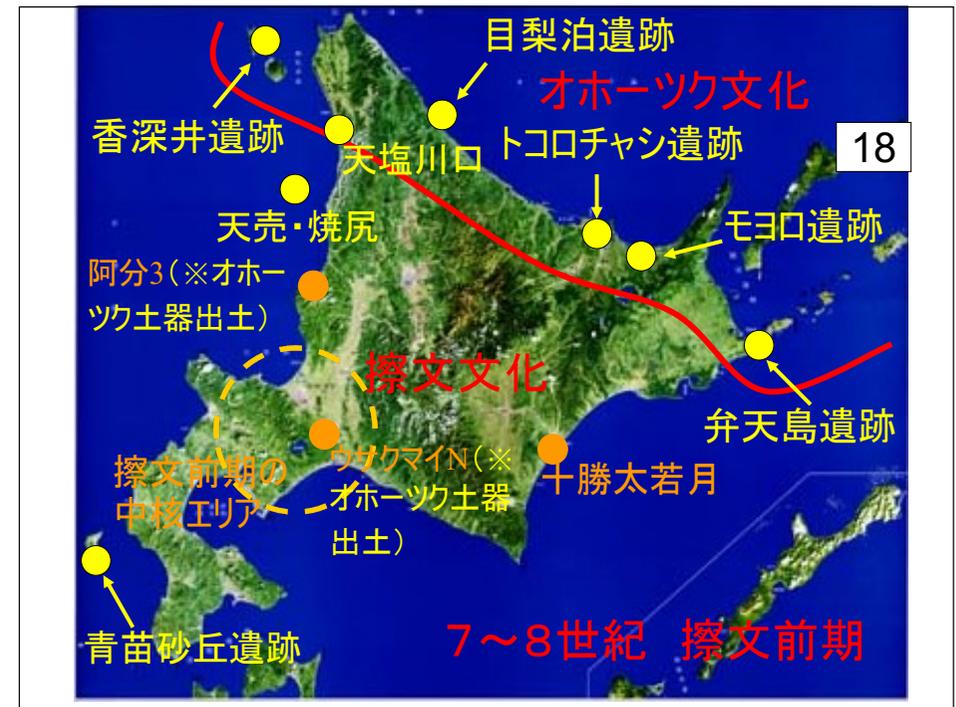
→640年に入唐した「流鬼」はサハリンのオホーツク文化人である蓋然性が高い(菊池俊彦氏など)

擦文文化の概要

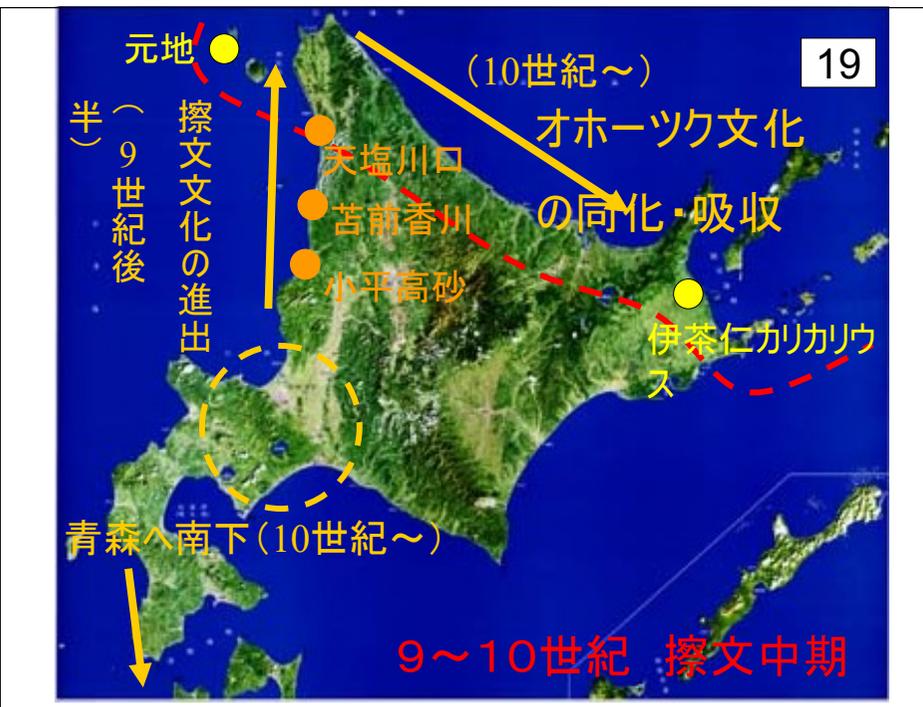
- 続縄文文化が本州との交流によって文化変容
⇒7世紀後半、「擦文文化」の成立
- ※道央・道南を中心地として成立し、その後、各地へ拡大
- 鉄器が出土する一方、石器はほぼ消失(鉄器の普及)=ほぼ完全な鉄器社会
- 擦文土器=前期には、本州の一般的な「土師器」(はじき)とかなり共通性の高い土器を使用
- 本州とほぼ同様のカマド付き竪穴式住居
- 小規模なマウンドをもつ「北海道式古墳」の存在
- 前期には、狩猟や動物信仰の考古学的な痕跡が希薄
⇒「農耕社会」とする意見も

17

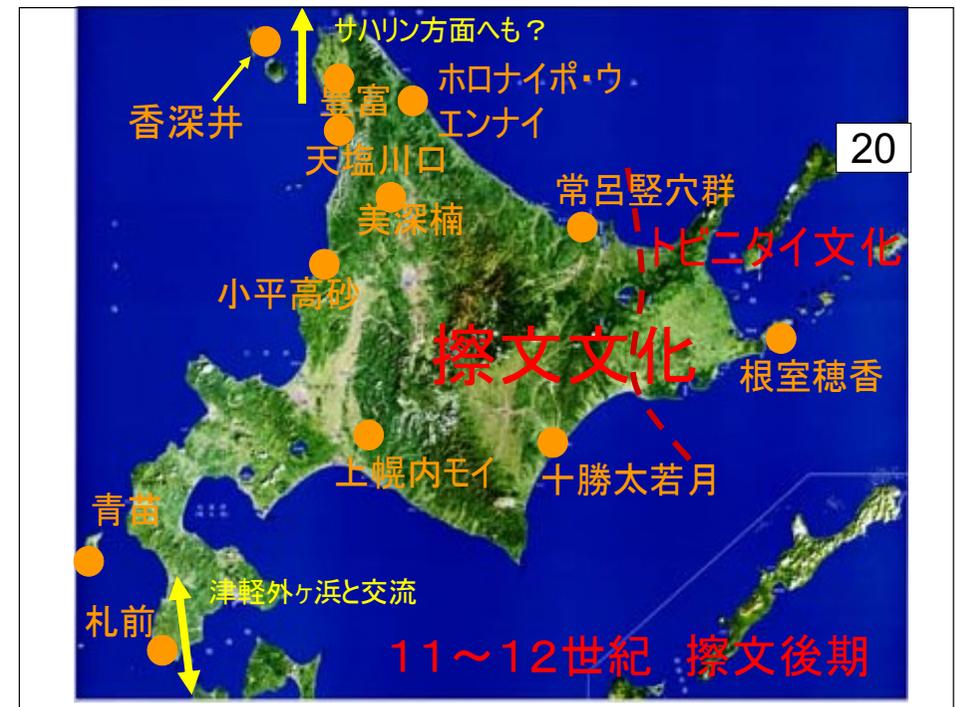
※成立当初は、土器・住居など、物質文化の特徴の多くで本州との共通性が強い
⇒ところがその後、再び文化的な独自性を強めていく
⇒「アイヌ文化期」へ(一般には13世紀頃と考えられている)



18



19



20

7～8世紀の鉄製刀剣の出土

21

- 千歳市ウサクマイA遺跡
 - 恵庭市ユカンボシE7遺跡、西島松5遺跡、柏木東遺跡
 - 江別市萩ヶ丘遺跡、後藤遺跡
 - 小樽市蘭島遺跡
 - 余市町フゴッペ洞窟前庭部土壌墓、天内山遺跡、大川遺跡
- 擦文期の鉄製武具の出土は7～8世紀にとくに多い
→古代王権・国家との接触・交渉の開始を物語る可能性高い



余市町大川遺跡
7世紀の土壌墓出土の直刀



22

・阿倍比羅夫の北航経路

『日本書紀』斉明4～6年(658～660)

⇨古代国家形成の過程で、北方の異民族に交易路を広げ、朝貢を促そうとした行動(威信や「徳」の源泉)

渡島蝦夷(わたりしまえみし)＝北海道の続縄文終末期～擦文早期の人々と接触・交流

肅慎(あしはせ)＝オホーツク文化とトラブル・戦闘

・8世紀の「朝貢交易」

天平5年(733) 秋田城の建設

8～9世紀末まで、渡島蝦夷の定期的な「朝貢」と「饗給」の場となる→本州との交易が恒常化

ヒグマ～日本最古の北海道物産の記録

23

- オホーツク文化集団は、高度な海洋適応の一方で、ヒグマの狩猟と儀礼を重視
- 『日本書紀』斉明4年(658)～6年 倭の有力豪族・阿倍比羅夫の北航
→「肅慎」(オホーツク文化か)と戦闘
→「生熊二・熊皮七十枚」を入手
(斉明4年(658)是歳条)
- 「凡熊皮障泥、聴五位以上著之」
(『延喜式』弾正台 ※10世紀成立)
⇒障泥(あおり・乗馬に用いる泥よけ)。律令国家段階には五位以上の貴族に限定されたステータス・シンボル



写真23 壁穴住居内に安置されたクマの頭骨 オホーツク文化 札文町番深井A遺跡

(『北海道開拓記念館常設展示解説書2 アイヌ文化の成立』より)

古代東アジア外交と北方産物

24

- 『日本書紀』斉明5年(659)是歳条
 - 「高句麗の使者が、飛鳥の都の市場にヒグマの毛皮を一枚持ってきて言った、「綿60斤で買わないか」。市場の役人は笑って取り合わなかった。」
 - 「高句麗出身の画家の子麻呂が、その使者を自宅に招いた。そのとき、国庫からヒグマの毛皮70枚を借りて敷いておいた。それを見て驚愕した高句麗の使者は、恥ずかしくて帰っていった。」
- ⇒倭国が「肅慎」から入手した多量のヒグマの毛皮が、高句麗の外交使節を驚かす
- ⇒北海道産の「モノ」は、外交の場面で国家の威信を左右するだけの意味を持った

「本州的」な擦文文化前期(8世紀頃)

上:千歳市ウサクマイA遺跡出土の蕨手刀(北海道開拓記念館1997『北の古代史をさぐる擦文文化』より) 中:江別市後藤遺跡の「北海道式古墳」復元(榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iより) 下:千歳市ユカンボシC15遺跡出土土器(八木③段階)

25



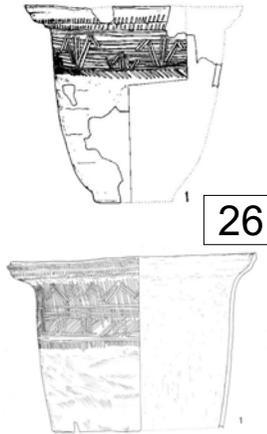
74 蕨手刀 千歳市ウサクマイA遺跡

擦文文化の変遷にみる「古代アイヌ的」な動き

- 7～8世紀において、北海道の考古学的文化は、一見すると顕著な「本州化」
⇒本州社会や古代王権・国家からの強烈なインパクトなしには考えられない
- ところが、9世紀後半～10世紀になると、擦文土器は無文的な本州の土器文化とは全く別の方向へ独自の発展を遂げる
⇒本州社会との交易・交流はますます大規模化するが、むしろ独自の個性とアイデンティティを表出

※ハードウェア面で本州系文化を大胆に受容しつつ、それを独自のソフトウェアで上書き?

- ⇒同時期に擦文文化は各地への進出・拡大を開始
- ⇒10世紀を転換点とする擦文文化の独自化と新展開
=「アイヌ史」上の転換点の一つとみるべき

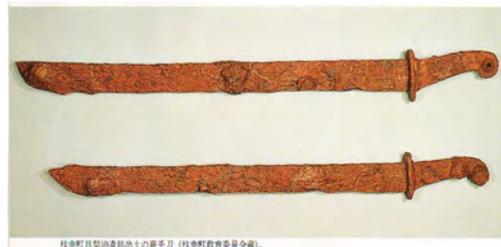


26

10～11世紀の擦文土器(名寄市智東H遺跡出土)

II:道北における古代交流の展開

27



枝幸町目梨泊遺跡出土の蕨手刀(枝幸町教育委員会蔵)

道北における古代遺跡の変遷

7～8世紀

28

- 当時の道北は、基本的にオホーツク文化のテリトリー

- 礼文島香深井1遺跡
- 礼文島浜中2遺跡
- 利尻島マタワツカ遺跡
- 利尻島タネトンナイ遺跡
- 利尻島利尻富士町役場遺跡
- 網走市オンコロマナイ貝塚
- 枝幸町目梨泊遺跡
- 天塩町天塩川口遺跡

⇒いずれも沿岸部に立地するオホーツク文化の集落

⇒日本海沿岸におけるオホーツク文化集落は、道南の奥尻島青苗砂丘遺跡を例外として、天塩川口あたりが南限

※土器の出土例は、それ以南にも点在

⇒道北は、日本海南部やオホーツク海沿岸に対するオホーツク文化進出の拠点

7～8世紀の道北のオホーツク遺跡

- オホーツク海沿岸の枝幸町目梨泊遺跡や、道東の常呂、網走などの遺跡では、鉄製刀剣、青銅製飾り金具などの「威信財」がしばしば出土
- また上記の地域では、頭部に土器を被せる「被甕葬」の文化が広くみられる

→ところが、利尻・礼文などのオホーツク文化の遺跡では、上記のような金属性の威信財が乏しく、被甕葬もみられない(高島孝宗氏)

(右: 榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iより枝幸町目梨泊出土の蕨手刀、墓、帯金具(大陸系か))



道北オホーツク文化のブタ飼育

- サハリンと道北(特に利尻・礼文)のオホーツク文化はブタを飼育(北方系のカラフトブタ。西本豊広氏、内山幸子氏、服部太一氏などの研究)
- 「流鬼」: 「婦人は冬にブタやシカの皮を着て、夏には魚皮の衣を着る」(『通典』)。※流鬼=オホーツク文化説の根拠の一つともされる
- 靺鞨もブタを飼育: 「家畜としてブタがあり、富者は何百頭も所有する」(『旧唐書』靺鞨伝)
 - 一種の富のシンボルにもなっていた?
- 金属製品などの威信財の分布と対照的に、オホーツク文化におけるブタ飼育は、枝幸町や道東の遺跡ではほとんどみられない
- 道北のオホーツク文化の人々は、靺鞨社会でのブタに対する価値観をより積極的に受容し、自らの富や威信の多くをブタの飼育に傾けた?
- なお、擦文・アイヌ文化にはブタ飼育の文化は継承されなかった



左: 礼文島浜中2遺跡でのブタ頭骨の出土状況
右: 『通典』辺防上・流鬼条より抜粋

30

人皆皮服又狗毛雜麻為布而衣之婦人冬衣豕鹿皮夏衣魚皮制与猿同多沮澤有鹽

道北における古代遺跡の変遷

9世紀後半

31

- 擦文文化の集落が道北に形成

- 小平町高砂遺跡
- 苫前町香川三線遺跡
- 幌延町音類遺跡

→など、擦文文化の竪穴住居が出現しはじめる

→一方で、オホーツク文化の遺跡分布は大きく後退・縮小

→9世紀の道北では、オホーツク文化が後退し、道央から擦文文化が進出しはじめる

道北における古代遺跡の変遷

10～11世紀①

32

○多数の竪穴住居を有する擦文文化の大集落が道北の各地に続々と出現(道北擦文文化の最盛期)

- 小平町高砂遺跡 ※竪穴220軒調査
- 苫前町香川三線遺跡 ※竪穴84軒調査
- 苫前町香川6遺跡
- 名寄市智東H遺跡 ※竪穴12軒調査
- 美深町楠遺跡 ※竪穴39軒調査 11～12世紀
- 天塩町天塩川口遺跡 ※総数約200軒の竪穴確認(うち8軒調査)
- 幌延町音類遺跡 ※総数約800軒の竪穴確認(うち3軒調査)
- 礼文島香深井1遺跡
- 枝幸町落切川左岸遺跡
- 枝幸町ホロナイボ遺跡 ※竪穴49軒調査 11～13世紀
- 枝幸町ウエンナイ遺跡

○礼文など一部地域に、擦文文化の影響を受けて変容したオホーツク文化末期(元地式段階)の人々

- 礼文島浜中2遺跡
- 礼文島元地遺跡

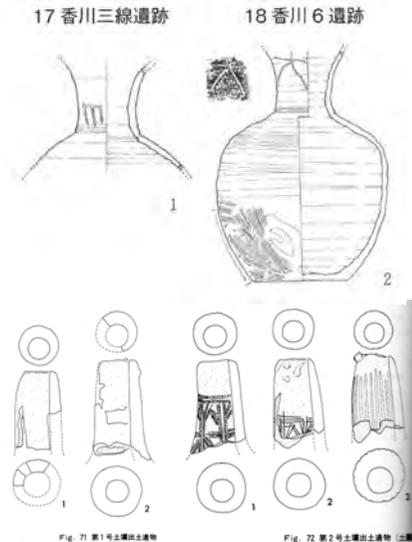
道北における古代遺跡の変遷

10～11世紀②

33

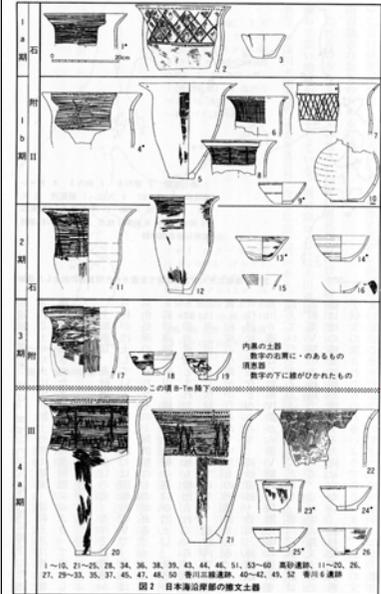
- ソバ(高砂、香川三線、香川6、智東H、楠、天塩川口)・キピ・アウ・オムギ(香川三線、香川6)の炭化種子や花粉
 - フイゴ羽口や鉄滓など小鍛冶の痕跡(高砂、香川三線、天塩川口、ホロナイボ)
 - 青森県五所川原産の須恵器(香川三線・香川6)
 - サハリン系オホーツク文化末期の南貝塚式土器(智東H、ウエンナイ)
- ⇒雑穀栽培、小規模な鉄の加工の広がり
⇒本州系の土器やサハリン系の土器の流入(南北との交流)

右上: 苫前町香川三線遺跡・同香川6遺跡出土刻書須恵器。右下: 枝幸町教委1980『ホロナイボ遺跡』より



道北日本海側の擦文土器の変遷(中田裕香1996より)

145 北海道の古代社会の展開と変遷



34



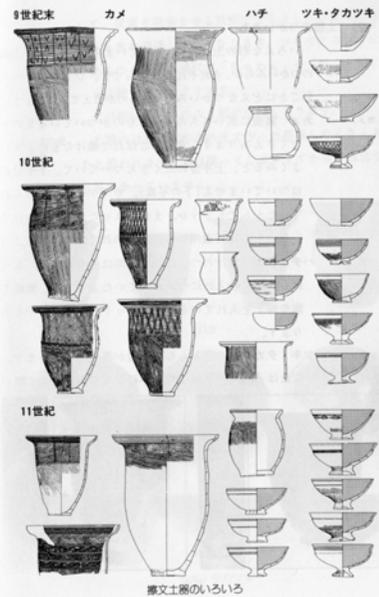
道北有数の擦文集落～小平町高砂遺跡

35

- オピラウシュベツ(オ・ピラ・ウッ・ベツ＝河口に崖のある川)
- 小平薬川の河口から約1キロの河岸段丘上に立地
- 1980年以降の調査で220軒の竪穴住居検出
- 9世紀末～11世紀末にかけての集落(12世紀代の土器はない)



右: 小平町・小平町文化協会『おびらの文化財 オピラウシュベツ遺跡』一九八二年より
左: 小平薬川河口



幌延町音類竪穴群

36

- サロベツ原野の湿原とサロベツ川に囲まれた「陸の孤島」に立地(海からの直線距離1.5キロ、河口から水路で約20キロ)
 - 約800軒の竪穴住居を確認(大半は擦文期)
 - 3軒の住居の発掘調査 9世紀末～10世紀代
 - 近隣の遺跡の状況から、おそらく9世紀末から11世紀代にかけての擦文文化の巨大集落
 - 擦文文化が道東方面へ展開する際の前進拠点、さらにはサハリン方面に対する拠点的港湾基地?
- (瀬川拓郎2011『アイヌの世界』)

一足早い土器の終焉？

37

- 道北日本海沿岸の擦文集落は、基本的に11世紀代に終焉
 - 全道的にみた擦文土器の終焉(12~13世紀頃)に先行
 - 土器と竪穴住居が、他地域の擦文文化より早く終焉？(塚本浩司2002など)
- 日本海沿岸では、土器と竪穴住居を先取的に終わらせるだけの流通経済の進展？(鉄鍋・陶器・木製椀・漆椀などが流入し、土器製作が不要に。また豊富な鉄器により平地住居化(チセの成立))

※なお道北でもオホーツク海側には枝幸町ホロナイポ遺跡など擦文終わり頃(12~13世紀)の集落が存在

道北の古代遺跡の性格は？

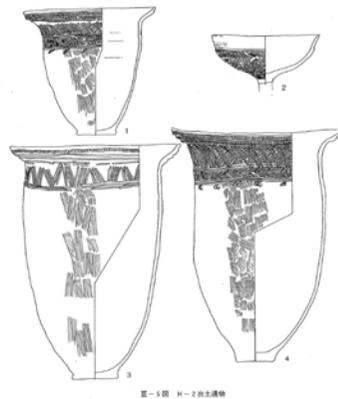
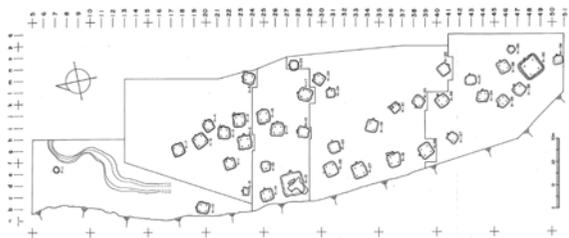
38

- 音類遺跡や、サケのほとんど遡上しない小平薬川の小平高砂遺跡など、「漁村」とは考えがたい立地に大集落が成立。道北の擦文集落は、基本的に他地域との交流や進出をにらんだ「交易・港湾拠点」では？(瀬川拓郎2005・2011)
 - 道北の擦文遺跡では、統計的に、道東と比較して鉄器の普及率が低い(3~5倍違う)
- したがって交易拠点とは考えにくい(笹田朋孝2013)

美深町楠遺跡

39

- 天塩川流域の内陸部、1980~83年にかけての調査
- 39軒の竪穴住居を検出
- 11世紀~12世紀頃の擦文文化集落
- 鉄器の出土量は少ない(H-1竪穴の刀子1点のみ)
- ソバ花粉を検出

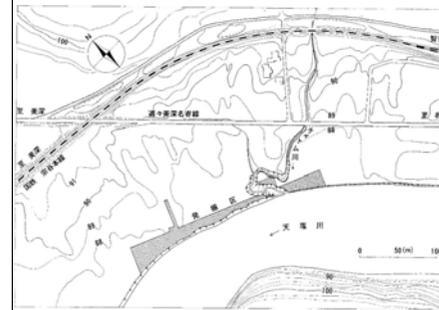


北海道埋蔵文化財センター1983『美深町楠遺跡』より

名寄市智東H遺跡

40

- 1978年の調査
- 天塩川沿いに立地(現在の水面から3~4mの川岸)
- 擦文期の竪穴12軒(11世紀後半~12世紀頃か)検出

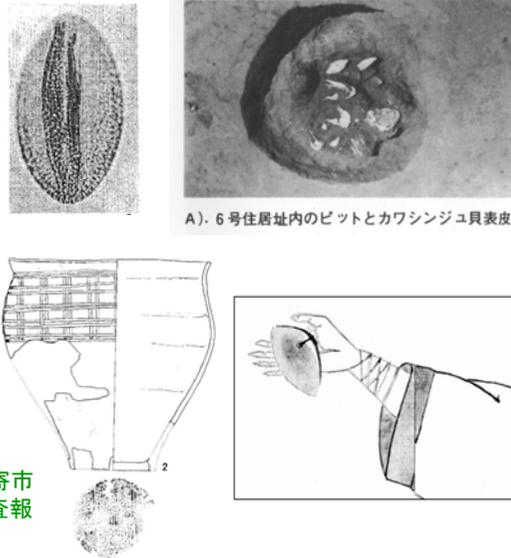


B) 発掘調査状況(手前から5.7.8号の各住居址)

名寄市智東H遺跡②

41

- 鉄器の出土量は少ない(遺構外の刀子1点のみ)
- 1、4、5、7住居址からソバ花粉を検出。ソバ栽培?
- 複数の住居址から、カワシンジガイの表皮が多く出土
⇒アイヌ文化の「ピパ」(天塩方言では「トバ」)
- 貝殻を穂摘み具として利用
⇒かなり盛んに雑穀栽培をおこなっていたことを示唆するか
- 南貝塚式土器(サハリン・オホーツク文化末期の土器)1点:遺構外から出土



A). 6号住居址内のピットとカワシンジ貝表皮

右下:『蝦夷生計図説』より。他3点、名寄市教育委員会編1979『名寄市文化財調査報告書I』より

道新 1952年9月8日の記事

42

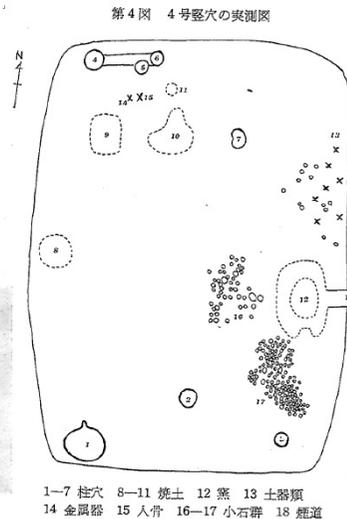
- 豊富町豊里遺跡で、札幌在住の2人の少年が竪穴(A号竪穴)を発掘。
- 擦文期の土器碗11点ほか、毛抜形太刀1点・直刀4点・鉄斧8点・鉄先1点など大量の鉄器、織布・網など繊維製品14種、紡錘車6点、玉類など、擦文文化全体を通して一度の出土例として稀な豊かな出土品



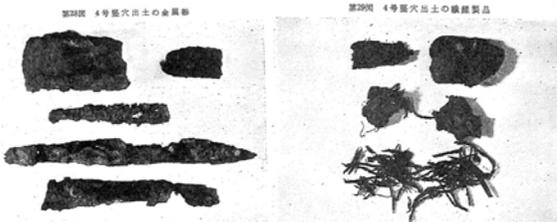
豊富町豊里 1957年の調査 (北大、『北方文化研究報告』14)

43

- 「十数ヶ」の竪穴が地表面から確認、うち6軒の竪穴を調査
- 4号竪穴からは、小児骨、鉄製品や炭化繊維製品が出土(竪穴住居址を墓として利用したか)
- 小刀1、刀子2、鉄斧1、鉄片1



第4図 4号竪穴の実測図



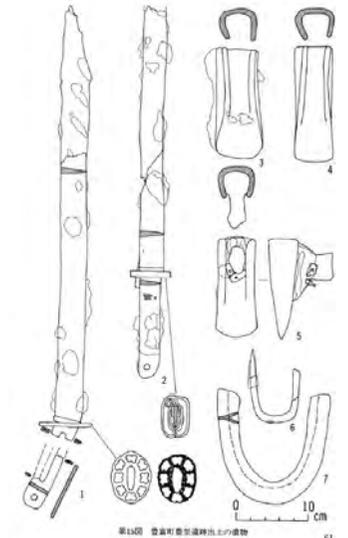
1-7 柱穴 8-11 焼土 12 竈 13 土器類 14 金属器 15 人骨 16-17 小石群 18 煙道

豊富町豊里遺跡の評価をめぐって

44

- 1952年発掘の豊里遺跡「A号竪穴」
- 1957年の発掘調査でも、擦文期の住居址としては豊富な鉄製品が出土
- 「A号竪穴」では、11点の完形の塚が一括出土、うち5点に刻印(すべて異なるモチーフ=複数系統の家系を示す?)
- 多量の遺物とあわせ、1世帯が保有したものと認められない、特殊な事例
- 集落全体による共同祭祀行為?(瀬川2014)

⇒発見時の状況が不確実だが、擦文文化全体を見渡しても稀な、一箇所でのまとまった鉄製品など貴重財の集中状況
⇒道北の古代交流・交易や、生活スタイルの実態の評価は、今後も検討を要する(かなり盛んな雑穀農耕の存在をどう評価するか等も)



右:豊里遺跡出土の鉄斧・鉄鉄先・直刀・毛抜形太刀(宇田川洋1984『河野広道ノート考古篇5』より)

Ⅲ：古代道北の歴史を動かしたもの：7～9世紀 —日本・北東アジア世界との関係

45



文献史料からみた「肅慎」と「渡島蝦夷」の関係

- 『日本書紀』斉明6年(660)条では両者がトラブル、戦闘

⇒両者の関係が「**対立的**」とされる要因の一つ

- だがその後、696年の記録では、
「**渡島蝦夷のイナリムシと、肅慎のシラスとがやってきたので、錦や布、鉄製品を授けた**」(『日本書紀』持統10年(696)3月)

⇒7世紀末には、**両者の共同行為**も存在

⇒王権・国家の介入が両者の関係に安定化をもたらした側面も？(交易の調停など)

47

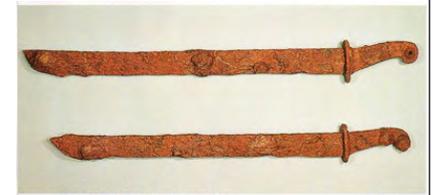
オホーツク文化と擦文文化との関係

- 二つの文化は、かなり明瞭に分布範囲が分かれている(10世紀頃のトビニタイ文化の時代まで、隣接・混住するような状況は見受けられない)
- 考古学的にみて、双方の交流の痕跡が少なかった
→二つの文化は、異質かつ対立しがちで、没交渉的であった？
→道北の日本海沿岸を境として対峙？

46

⇔しかし、枝幸町目梨泊、網走市モヨロ貝塚など、7～8世紀代のオホーツク文化の遺跡では、大陸系の文化だけでなく、**直刀**や**蕨手刀**など、当時の擦文文化と共通する**倭・日本系の製品**も多く発見されている

⇒近年、両者の関係の見直しに
つながる発見が増加



枝幸町目梨泊遺跡出土の直刀(枝幸町教育委員会蔵)

ウサクマイN遺跡(1999年度調査)

- 千歳市蘭越(千歳市街と支笏湖のあいだの千歳川流域)
- ウサクマイA遺跡の**直刀・蕨手刀**
→7～8世紀から本州と活発に交流
- **富寿神宝**(平安初期の818年に製造された貨幣)
- **擦文文化の中心地ではじめてオホーツク文化の土器**(道東のソーマン文土器。8世紀後半頃)が発見
- ※ソーマン文土器の破片は増毛町阿分3遺跡などでも出土

⇒オホーツク文化と擦文文化の関係の再考？



48

擦文文化の中核と、オホーツク文化の中心地の交流



49

知床で発見された「神功開宝」 (2016年の調査)

50



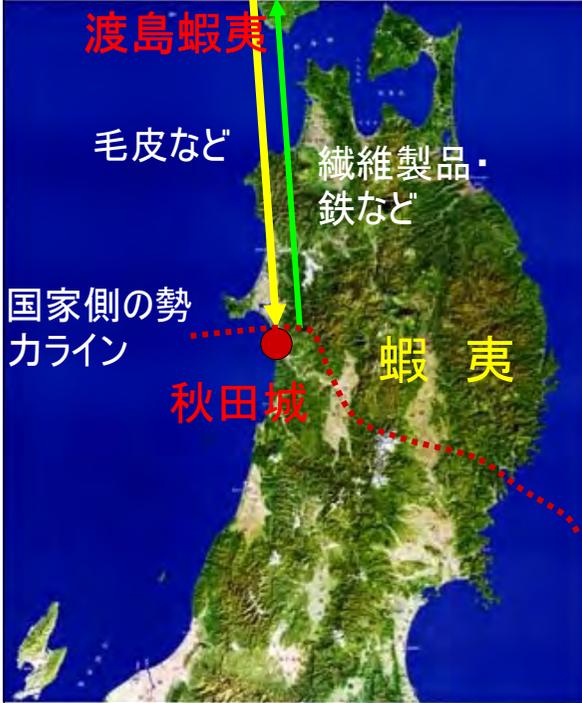
オホーツク文化の集落遺跡 斜里町ウトロチャシコツ岬上遺跡

国内最北 奈良時代の銅銭

北海道最北にある9世紀頃のオホーツク文化の集落遺跡・チャシコツ岬上遺跡で、奈良時代の銅銭「神功開宝」が発見された。発見は、2016年11月16日、発掘調査が行われた。この銅銭は、神功開宝と推定され、国内最北で発見された。この銅銭は、奈良時代の律令国家と交流の証拠と見られる。この銅銭は、斜里町のチャシコツ岬上遺跡から出土した。この銅銭は、奈良時代の律令国家と交流の証拠と見られる。この銅銭は、斜里町のチャシコツ岬上遺跡から出土した。

斜里で出土 律令国家と交流か

開環、隆平太宝などが出土している。北海道アイヌ・先住民研究センター加藤博教授「狩猟を中心とするオホーツク文化の人々は貨幣経済ではなく、(出土した古銭は)社会的なネットワークを示す道具として使われていた。その地域の人が本州に出入りし、直接的にも交流していたことを示している。また、この銅銭の流通が盛んだったことは、交流の重要な証拠となる。今後、チャシコツ岬上遺跡のオホーツク文化における位置づけを考える際に重要な意味がある。



天平5年(733) 51

日本古代国家は、出羽国高清水岡(雄川河口)に、庄内地方から出羽柵を北進 = 秋田城の設置

渡島蝦夷(擦文文化)の本州方面との交易の拠点となる

→多量の本州系物資が定期的に北海道に流入

秋田城における毛皮交易の隆盛

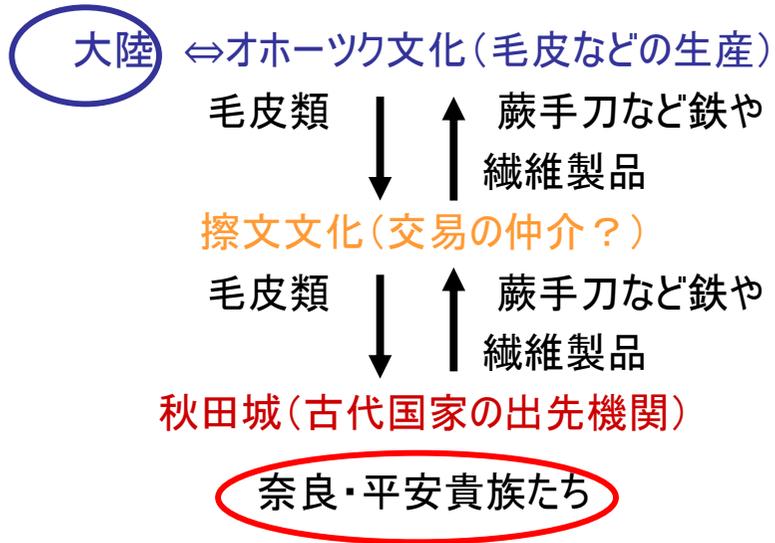
52

・「秋田城には、渡島の蝦夷が、毎年、「雑皮」(さまざまな毛皮)を朝貢(交易)しにやってくる。しかし最近、都の王・貴族層が使者を秋田城に派遣して、良い毛皮を先にかけてしまうので、粗悪なものしか残らない」(『類聚三代格』 802年6月24日条)

- 「雑皮」: 当時の出羽・陸奥の産物として「熊皮・葦鹿皮・独干皮(※けものへん+干)」など(『延喜式』民部下・交易雑物)
- ヒグマ、アシカ、アザラシなどの毛皮類が当時の主たる交易品か
- 9世紀初頭の秋田城では、都の貴族たちによる毛皮類の私的取引が活発に
- その結果、北海道社会と本州との取引は規模を拡大

8～9世紀の物資の流れ？（仮説）

53



擦文文化の拡大とオホーツク文化の変容

54

- 8～9世紀、秋田城を舞台として、擦文文化（渡島蝦夷）と古代国家の交易（毛皮など）が規模を拡大
 - ⇒当時、日本国家の貴族たちの求めていたヒグマ皮や海獣皮などは、基本的にオホーツク文化圏の産物
 - ⇒そのため擦文文化はオホーツク文化との関係を強化
 - ⇒千歳市ウサクマイなどは、北と南の交流の中継地だったか？
- 9世紀後半～10世紀頃、擦文文化の集落が、道北に進出を始める
 - 小平町高砂遺跡、苫前町香川三線遺跡などの成立
 - その後、擦文文化の集落は、道北・道東にさらに全面的に展開
- ほぼ同時期に、オホーツク文化の変質（接触・融合様式）が始まる
 - ⇒擦文文化は、より多くの交易品を獲得するため、みずから日本海北部～オホーツク海域へと進出するようになった？

9世紀後半：オホーツク文化が変容をはじめ

55



元地式土器の登場

56

- 9世紀後半頃、道北の各地で、厚手で擦文土器のフォルムに似た独特のオホーツク式土器が出現
 - ※サハリンの「東多来加式土器」に似る
- 元地式土器＝道北の「接触・融合様式」
- 礼文島元地遺跡（礼文島西岸）
 - ⇒元地式土器と竪穴住居
 - ⇒従来は夏のキャンプだったが、擦文文化の進入によって移転？（小野裕子氏）



礼文島西岸の元地海岸（メノウ浜）

トビニタイ文化

57

- 9世紀後半頃、道東の標津町伊茶仁カリカリウス遺跡などで、擦文文化の影響を受けたオホーツク文化の変質がはじまる
 - 「トビニタイ文化」: 知床・標津・根室などに広がる、オホーツク文化の担い手の変容した姿(「接触・融合様式」)
 - 擦文文化人との近接居住や婚姻などが進展(大西秀之氏)
 - 擦文土器の要素とミックスした土器
 - 住居も擦文文化化(小型で四角くなりカマドが付く)
 - 内陸にも遺跡が出現(生活様式の変化)
 - 大陸系の遺物が激減し、本州系が増える
- ⇒「オホーツク文化」としての特徴の多くがみえなくなる(独自の集団的アイデンティティは水面下に潜在?)

9世紀における大陸情勢の変化

58

- 7～8世紀にみられた道内における大陸系遺物の痕跡は、9世紀には希薄に(山田ほか1995など)
- ⇒9世紀には大陸と北海道の交流が後退した可能性
- ◎9世紀初頭、それまで渤海に抵抗していた黒水靺鞨の唐への朝貢が途絶える(元和年間(806-820)の記録が最後)
- 9世紀初頭の渤海王大仁秀(在位818-830)
- ⇒「北方の諸族を征服し、渤海の領土を大きく拡大する功績があった」(『新唐書』渤海伝)
- ⇒この時期、渤海による北部靺鞨の征服が進展し、黒水靺鞨も渤海に屈服した可能性が高い

9世紀の2つの転機

- ①黒水靺鞨が渤海に屈服(9世紀初)
- ②本州ー北海道ライの交易拡大と、擦文社会の膨張・北上

⇒オホーツク文化の根幹を揺るがす

9世紀後半～擦文文化の拡大とオホーツク文化の変容へ

676 朝鮮半島 大陸からの影の制度・文の勢力低下

黒水靺鞨

渤海

日本海

蝦夷

新羅 676～935

610

日本

40°

59

本州の動向: 9世紀末～10世紀の転換

60

- 「秋田城交易の全盛から、青森が交易・生産拠点となるまで」の時代
- 878年勃発の「元慶の乱」(秋田近辺の蝦夷による反国家戦争)
- ⇒このとき渡島蝦夷たちは、「夷の首」103人に率いられ、3000人という規模で秋田城に集団で「朝貢」(『日本三代実録』元慶3年(879)正月11日条)
- ⇒当時の渡島蝦夷社会は、本州との交易への傾斜を深めていた
- 元慶の乱をきっかけとして、秋田城交易は衰退
- 9世紀末～10世紀にかけて、青森地域の生産・交易拠点が相次いで成立(五所川原市の須恵器窯群、岩木山麓の製鉄遺跡群など)
- 津軽海峡を直結する、より緊密な交易ネットワークが新たに形成 本州との経済交流のさらなる活発化
- ⇒同時期に擦文文化は道北への進出を本格化し、さらに道東へも進出
- ⇒擦文文化による道北～道東、オホーツク海域への進出の目的としては、これまで「海獣皮の増産」を想定する意見が多かった(山浦1983、中田1996など) ※近年の研究で、新たな交易品が脚光を浴びるように

IV: 古代道北の歴史を動かしたもの: 10世紀
—「中世的」な交易の胎動

61



レオナルド・ダ・ヴィンチ「白貂を抱く貴婦人」
(白貂=オゴジョ 中村和之氏による研究あり)

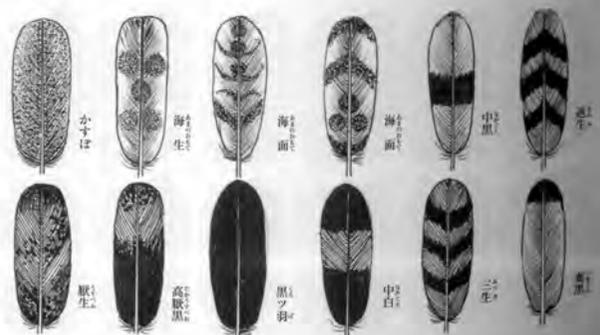
10世紀北方世界の新たな特産品① ワシ羽
オオワシ: 左は幼鳥、右は成鳥。成長すると尾羽根は白くなる。
(※写真左:「日がな一日」ブログより。右: 円山動物園で蓑島が撮影)



62

矢羽根の多彩な紋様

63



上: 榎森進編『アイヌの歴史と文化』Iより

右: 笹間良彦『図録 日本の合戦武具事典』より

『平治物語絵巻』六波羅行幸(東京国立博物館蔵)
東京国立博物館ホームページより

64



近世アイヌのワシ猟(『蝦夷島奇観』より)

65



権僧正公朝

みちのくの

えぞがちしまの鷲の羽に
妙なるのりの文字もありけり

平安時代から矢羽根に用いられた 北海道産のワシ羽

66

- 伊勢神宮の神宝として「鷲羽八百枚」(『延喜式』伊勢太神宮 ※10世紀成立)
 - 『西宮記』(10世紀成立): 宮中行事の賭弓において「左、鷲羽。右、肅慎羽」
 - 12世紀中葉、奥州藤原氏の2代・基衡: 平泉の毛越寺の本尊造営のため、「鷲羽百尻」などの品々を京の仏師に贈る(『吾妻鏡』文治5(1189)9・17条)
 - 文治6年(建久元年・1190)正月、同年11月に頼朝から後白河院へ贈られた「鷲羽一櫃」および「鷲羽二櫃」(『吾妻鏡』)
 - 「鷲羽」は平安時代中期の10世紀頃から日本の文献史料に増加
 - はじめ宮中儀礼における必需品、のち武家によって需要増大。少なくとも12世紀には、奥州藤原氏などの北方勢力の特産品
- ⇒当初から、北海道産のオジロワシ・オオワシなどの尾羽が最高級品として珍重されていた可能性がきわめて高い
- 江戸時代中期 享保2(1717)年の『松前蝦夷記』
 - 鷲羽の産地として釧路、厚岸、霧多布、宗谷、樺太
 - ワシ羽の代表的産地は、北海道東部と北部・サハリン
 - これらの地域にオジロワシ・オオワシがとくに多く飛来
- 10世紀以後、アイヌ民族(あるいはその祖先集団)が、高価なワシ羽の入手のため、道東やサハリン方面などに進出する一因となった可能性(近年、澤井玄氏、瀬川拓郎氏などが提唱)

10世紀北方世界の新たな交易品② クロテン皮 ~「世界史を動かした」毛皮獣

67

- 日本古代の「フルキ」(『和名類聚抄』)= クロテンの毛皮
- 「凡貂裘者、参議已上聴着用之」。(『延喜式』弾正台)
- ⇒ヒグマの毛皮よりさらに高いステータス
- 『江家次第』の重明親王 延喜20(920)年5月の出来事?
「昔、蕃客(渤海使)参入の時、重明親王 鴨毛車に乗り、黒貂の裘八重を着て見物す。此の間蕃客、纔に件の裘一領をもって持ち来りて重物となす。八重を見て大いに慙すと云々」
- 蒸し暑い季節にクロテンの裘8枚を重ね着。クロテンの裘1枚を自慢しようとした渤海使を驚かせる
- 『日本書紀』の罽皮のエピソードに類似する政治・外交的なはたらき
- 『源氏物語』末摘花 (11世紀初頭)
「ふるまのかわぎぬ」(黒貂の皮衣)を着て光源氏と対面



Erzotrotter(冬毛が黄褐色)
http://www.geocities.jp/nature_photo_technique/index.html より転載

現在のロシアン・セーブルの例

左はクロテン襟のミンクコート(US 5600\$)
本クロテンのコート(US 8000\$)

右は
68



AliExpressホームページより



ebayホームページより

『源氏物語』 第6帖 末摘花(抜粋)

69

- 頭(かしら)つき、髪のかかりはしも、うつしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、袿(うちき)の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり余りたらむと見ゆ。
- 着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴(ゆるし)色の、わりなう上白(うはじら)みたる一かさね、なごりなう黒き袿かさねて、表着には黒貂(ふるき)の皮衣(かはぎぬ)、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆるぎきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げに、この皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを心苦しと見たまふ。



⇒平安貴族社会におけるクロテン毛皮の主要な入手先は、大陸、とくに渤海(698-926)だと考えられてきた。

九曜文庫本『源氏物語』末摘花より。末摘花をめぐる頭中将と光源氏

平安日本のクロテン皮は大陸産なのか

71

- 平安貴族の間では、10世紀頃にクロテンの毛皮製品が大ブームに
- 日本でのクロテンの毛皮の主要な入手先は、長い間、大陸(とくに渤海国)だと考えられてきた
- しかし、渤海は926年に滅亡
- しかも、渤海からの確実なテン皮の例は意外なほど少ない(確実には2例のみ)

⇒平安時代の日本にとって、クロテン皮の主要な入手先は、渤海とは別に存在したとみるべき

※サハリンや北海道～東北経由の独自ルートが存在した可能性

日本古代のテン皮史料(抜粋)

70

事例	内容	出典
1 「貂皮300張」	第一次渤海使の贈物	『続日本紀』神龜4(727)9.21
2 渤海使の大使からテン皮製品の私進物	大虫皮7張、豹皮6張、熊皮7張、狼皮5張(方物)。貂裘、裘袴・麝香・暗復靴(大使から)	『日本三代実録』貞觀18(871)12.11 『源氏物語』巻4
3 「貂裘」	是の日、始めて貂裘の着用を禁ず。但し参議以上は制限すること非ず。	『三代実録』仁和元年(885)正月17日
4 「紫金また重裘」	重裘は「貴重な裘」の意で貂裘(ちようきゅう)に掛けたものか	延喜元年(901)「奥州藤原氏君を哭す」『菅家後集』
5 「香+尾(貂)の裘一領」	斎然から太宗への贈物	『宋史』日本伝(988)
6 「貂裘」	凡そ貂裘は、参議以上これの着用を罷せ	『源氏物語』源正台
7 「貂」と「黒貂」の2項目	「貂」は「黒に似て黄色。皮は裘を作すに堪ふる」。「黒貂」は「東北夷出だす」「黒貂、和名布洗木」	『和名類聚抄』
8 「黒貂皮衣」	賀茂臨時祭の舞人たちが辨路に着る	『西宮記』・臨時祭
9 「ふるきのかはぎぬ」	「中官(村上天皇の中官安子)が防衛のため高光少将入道(藤原高光)に遣わす(10世紀中葉)」	『拾遺集』(1008頃)
10 「ふるきのかわぎぬ」	光源氏との対面時に末摘花が着用	『源氏物語』末摘花
11 「奥州詔書参儀(長二領、一領)」	道長から天台山への贈物	『御堂関白記』長和4年(1015)7月15日
12 「黒貂裘」	藤原清時、黒貂裘を兼時に与え、後悔する(10世紀末頃)	『江家次第』5、2月・春日祭途中次第(1111頃)
13 「黒貂裘」	重明親王、渤海使を見物する際に八重の黒貂裘を着る(919頃)	『江家次第』5、2月・春日祭途中次第

藤原道長とクロテンの毛皮

72

- 『御堂関白記』長和4年(1015)7月15日条
関白藤原道長は、宋へ渡る僧・念救に託して、中国の天台山(仏教の聖地)へ、「奥州の貂裘」など数々の贈り物をする
⇒「奥州の貂裘」=奥州の地元で獲れたテン皮ではなく、奥州勢力の北方交易を介して、北方世界から平安京にもたらされたテン皮とみるべき
⇒10世紀前後 オホーツク文化末期(南貝塚期、元地期、トビニタイ期)において、北海道産やサハリン産のクロテン皮は、主として平安日本との重要交易品として比重を増していた可能性
- 本州産のキテン(ホンドテン・ツシマテン)、北海道産のエゾクロテンの冬毛=黄褐色
- 大陸・サハリン産のクロテンの冬毛=黒褐色
※近世の事例。北蝦夷地(サハリン)産のクロテン皮は、東西蝦夷地(北海道)産の4倍の交換レートで取引(松田傳十郎『北夷談』第5)
「貂、地方夷地(北海道)の産する処は、其色黄にして下品也。当島(サハリン)奥地の産は色至て黒し。是を上品とす。満洲にては是を悦ぶ。」(『北夷談』第3)
- ⇒サハリン産クロテン皮は、黄褐色のエゾクロテン皮より高品質
⇒宋へ贈られた「奥州の貂裘」の実態 サハリンが原産地である可能性も

擦文文化とサハリンとの交流

- 現状では、サハリンの7箇所の遺跡から擦文土器が出土(プロコフィエフほか)
 - 擦文中～後期、道内各地や青森に進出した擦文人たちは、本州との交易拡大を背景にサハリンにも進出を開始(10世紀後半～11世紀以後)
 - サハリンアイヌの源流となった可能性を指摘する説も(瀬川拓郎氏)
- ⇒サハリンに残っていたオホーツク文化(南貝塚期)と交流

※一方、サハリンの南貝塚式土器も道内で出土(氏江敏文氏の集成)＝宗谷海峡をこえる相互交流

⇒10世紀頃、平安貴族たちの求めたサハリン産のクロテンは、道北とサハリンとの結び付きを強め、さらには擦文文化のサハリン進出の一因となった可能性がある



左: 千歳市美々8遺跡出土 大陸系青銅製帯飾(10c頃)
右: 道内に南下したサハリン系南貝塚式土器

一枝幸町ウエンナイ遺跡住居址床面で擦文土器と共伴
(※いずれも北海道開拓記念館1997『北の古代史をさぐる 擦文文化』より)

74



10～11世紀の大陸情勢 —女真と五国部(パクロフカ文化)

76



- 渤海滅亡(926)前後、女真は中国などを相手に活発な交易活動を再開
- 10世紀末、女真は契丹(遼)に中国との交易路を遮断され、契丹への従属を強める
- 「女真は東北を五国に隣し、五国は東を大海に接す。名鷹を出す。海東青より来れるは、これを海東青と謂ふ。小にして俊健なり。能く鷓鴣を擒ふ。爪の白きは尤も以て異となす。遼人これを酷愛して、歳歳女真に求む。女真は五国に至りて戦闘し、しかる後に得る。」(『契丹国志』10)
- 当時の契丹は、「海東青」とよばれる優れたタカを、女真から貪欲に求めた
→そのため女真は、北の「五国部」(アムール川流域のパクロフカ文化)と戦ってまで海東青を入手した
→「大海の東から来る」という「海東青」の原産地はサハリンの可能性が高い
⇒10～11世紀にかけて、女真・五国部は東部ユーラシアの交易圏に接続し、その影響をサハリン・北海道・環オホーツク海域にまで及ぼした可能性
⇒10世紀以後、大陸～サハリン～北海道を結ぶ「北周り交流」が再活性化した形跡がある
⇒10世紀以後の擦文文化の北進は、こうした大陸方面に形成された新たな経済圏との接触をはかることを目的の一つとしていた可能性も

結:「北方史」「アイヌ史」のなかの古代道北

77

擦文土器、平泉で初出土 11～12世紀、北海道中心に分布

1 シェア 2 ツイート 3 いいね



2018/03/07 岩手日報HPより

早稲町の平泉文化遺産センター（及川町所長）は6日、北海道を中心に分布する11～12世紀の擦文（さつもん）土器の破片5点が同町内で初めて出土したと発表した。表面に描かれた山のような文様が特徴。これまでの出土の最南端とみられ、奥州藤原氏と北方との交流・交易を裏付ける重要な考古学的資料とみられる。

土器は住宅建築に伴い、同町教委が同町平泉で実施した無量光院跡第37次調査によって、昨年6月に見つかった。

同センターによると、調査区は無量光院跡の南西隅に位置。5点は大きいもので長さ約5センチ、厚さは約1センチで、同一の長方形の一部とみられる。白い粉状の「海綿状骨針」が多く含まれていたが、産地や詳しい年代は特定されていない。文様のない土器の破片3点やかわらけの破片も見つかった。

擦文文化はアイヌ文化より前の7～13世紀前後と考えられている。擦文土器に詳しい北海道博物館の鈴木信也学芸員（考古学）によると、これまで擦文土器は北海道や青森県の陸奥湾周辺、秋田県・大館で確認。平泉は最南端での出土とみられ、北海道で作られたものが持ち運ばれたか、同じ文化の影響を受けた青森のものである可能性が考えられる。

北海道 青森県 岩手県 秋田県 平泉町 岩手



アイヌの外洋船(イタオマチ)と航海

谷元旦「蝦夷紀行附図」寛政11(1799)から「蝦夷船にて渡海の図」(函館市中央図書館デジタル資料館より)

※鈴木信氏の推計

→92石積み=積載量 約13.8トン

異文化交流のクロスロードとしての古代道北

・「古代の北海道は、その全体がいわば東アジア文明の十字路であった」(鈴木靖民1996『古代蝦夷の世界と交流』名著出版)

・7世紀頃までの道北は、大陸とつながりを有するオホーツク文化の南下の前進拠点

→オホーツク文化と続縄文文化・擦文文化との接触エリア。対立だけでなく、交流や相互影響も

・9世紀後半～11世紀頃の道北には、擦文文化が北上し、大集落が相次いで出現

・北日本海・オホーツク海を行き交う舟の停泊する港湾的拠点か

→擦文文化が道東やサハリン方面に進出していく際の前進拠点であった可能性

・その一方で、かなり農耕の痕跡が濃いことにも注目すべきか

⇒「縁辺」ではなく、異文化が接しあい、ダイナミックに交流しあう「境界」領域。外部に向かって開かれていた古代道北

78

アイヌの精神文化に埋め込まれた「交易」

・従来、アイヌ民族については、「自然と共生」する人々という、いわば「環境保護者」的イメージが広く流布

・一方で近年では、世界システムの流通経済に密接不可分にに関わり、交易のために自然界からの収奪もいとわぬ「交易民的」、あるいは「国際商人」的イメージが強調されるようになっている

⇒二つのイメージのへだたりは一見すると大きく、架橋不可能のようにもみえる

・「アイヌの伝統的世界観における動物と人間の関係には、アイヌが大陸や和人と繰り広げた交易の関係が投影されている」(中川裕2010『語り合うことばの力 カムイたちと生きる世界』)

・「アイヌ口承文芸の構造には、交易を媒介とするカムイ-アイヌ-シサム相互依存の関係が存在する」(坂田美奈子2011『アイヌ口承文芸の認識論 歴史の方法としてのアイヌ散文説話』)

79

・「動物を擬人的にとらえ、その恩恵を受けて人間が食糧を得るといった思想は北米などにも見られるが、ここに交易のイメージを重ねたことがアイヌとニヴフの独自性を生んだ」(北原次郎太2014『アイヌの祭具 イナウの研究』)

⇒アイヌ民族の伝統的な自然観やカムイ観は、対外交易の論理と矛盾せず調和(交易品生産にとまらぬ畏敬や感謝、丁寧な儀礼行為)

アイヌ史をつらぬく、交易経済と精神性の両立(現時点の私の仮説)

80

・アイヌの精神文化≠縄文人の精神文化

⇒自然界や神々との関係において、しばしば両者を「同一視」する言説がみられるが、両者には大きな断絶もある

・アイヌの伝統的な精神文化・カムイ観は、縄文的な精神文化を基層に有しつつも、「商品経済」「対外交易」の論理を組み込み、縄文的な精神文化をアップデートするなかで形成されてきたのではないかと

⇒縄文的論理からアイヌ的論理への跳躍はいつ生じたか

・続縄文後半期(3～7世紀頃)に鉄器の流入が本格化して以後、「商品経済」という新たな原理にもとづく対外交易への参入が不可避に

⇒「アイヌ史における古代(アイヌ史的古代)」の開幕(藁島2014, 2015)

・それ以後、およそ千年以上もの期間、アイヌは「商品経済」に直面・関与しつつも、人間と自然との「対称性」「循環性」を根本原理とする世界の岸辺に踏みとどまり続けた

⇒「畏敬」や「感謝」をキーワードとする精神性のもとに、増大する「商品経済」とのバランスを保ち、自己の文化と社会を「持続可能」な方向で洗練させてきた前近代アイヌ史

(3) 第2講演 天塩川に生かされたアイヌ

—近世文献を中心に—

鈴木 邦輝 (名寄市北国博物館 嘱託学芸員)

1. はじめに

皆さんこんにちは。ただいま紹介いただきました、名寄市北国博物館で嘱託学芸員しております、鈴木邦輝と申します。現役は4年前に退職をしまして、今は嘱託として博物館に勤めております。今回の話の中で、道北地域のアイヌの人たちの姿、特に今、蓑島先生がお話しになった時代よりも、時間的には何百年か後の話になります。天塩川流域におけるアイヌの人たちの姿を、演題としては「天塩川に生かされたアイヌ」という形でお話をさせていただきます。

道北という地域には内陸に天塩川が流れております。天塩川は道北地域の真ん中を貫流する川ですので、ある意味で道北地域の内陸の根幹をなす地理的な条件を備えている所と思っております。今日は大きく三つに分けて話をします。一つは、江戸時代前後の近世の中で和人が残した文献から見る天塩川流域のアイヌの人たちの姿。二つ目は明治以降の近代です。この地域の開拓は明治の30年代に始まりますが、明治に入ってから約30年間、開拓に向けていろいろな事前調査があります。その事前調査の中でアイヌの人たちが色々と協力した経過があります。そのところの話が二つ目。そして三つ目は開拓以降、明治32年(1899年)に北海道旧土人保護法という法律が施行されて、それに伴って天塩川流域の現在の名寄に給与地というアイヌの人たちが強制的に集められて、農業をする事になります。それらを通じて天塩川流域のアイヌの人たちの一面を文献という側面だけからですが、話をさせていただきたいと思えます。

2. 天塩川とテセウアイヌ

(1) 天塩川の地理的条件

まず、天塩川の地理的な条件について述べたいと思えます。天塩川は現在の流路が256kmあり、元は300km近くありました。下流部がショートカットされたので、道内では石狩川に次いで2番目、日本で4番目の流路をなす川です。川自体は道北地域の地図を頭に浮かべてもらおうと分かりますが、東に北見山地、西に天塩山地という南北に連なる山地がありまして、その山地に沿って流れています。約700万年前まではそのまま北流し、現在の浜頓別の所でオホーツク海に注いでいたと考えられています。その後、中頓別のあたりの火山活動が活発になり、北上する流路が閉ざされて、約400万年前に天塩山地の地質の弱い所を開析し西に流れて、現在は日本海に注いでいる川です。川の水系、川の流路の形ですが、川は支流を含めて様々な形状があるのですが、天塩川はいわゆる羽状河川といい、皆さんが赤い羽根募金をした時の羽根ありますね。真ん中に羽軸が1本通っていて、その両側に羽が生えています。この形の本流路が真ん中を通じ、両側から支流が入るといって、細長い流域面積を持つ川が天塩川です。同じ北海道の中でも、石狩川はまさに大木のような、中央に太い幹があって枝が分かれるような、いわゆる樹枝状河川とされています。これが一般的な川の形です。もう一つ、大きな川で十勝川は扇状河川です。夏に

使う扇の骨のように、河口に扇状に支流が集まってきます。

天塩川は細長い河川のために川と山地が非常に近いという特色があります。下流部には蛇行部がありますが、中上流では河岸段丘という、川のそばまで比較的丘陵地が迫っています。また、上流には湧水に富む河原が広がっているというのが特色です。これは、アイヌの人たちが川の流域に住んで、川を上下する交通路、そして支流の川沿いの各川に分け入って、植物とか動物を求めるのに有効です。そういう食料獲得の場に近いという意味では、アイヌが生活しやすい川だったといえます。

(2) テセウアイヌ～17世紀からの記録

文字の史料として、天塩川のアイヌの様子が記録されるのは、それほど古い時代ではありません。18世紀の初めの津軽藩の史書で『津軽一統志』(1731年)に天塩川については、大きな川があってアイヌが住んでいること、20軒の家があって、この天塩の大將はトミカヘワインという名前だという記載があるのが、初出ともいえる史料です。天塩川のアイヌの文献に記載された歴史は断片的です。これ以前の時代は、不明なところがたくさんあります。

先ほどの蓑島先生のお話にあったように、大陸の文献とか、これから氏江さんのお話にありますような考古学的な手法、もしくは民族学的な手法で、更に古い時代についてはこれから少しずつ解明はされてくると思いますが、今のところは史料的な限界があります。私の話は、その文字史料のある部分についての話をさせていただきます。

北海道のアイヌ文化に大変詳しい更科源蔵によると、もともとの天塩川のアイヌの人たちは、夏は河口付近で漁獵等に携わり、秋になるとサケを獲るため内陸のコタンに越冬して、夏と冬で移動的な生活をしたのが基本ではないかといわれています。これは他の大きな河川のアイヌと同じような生活ぶりです。また交流という意味では、古くは、オホーツク海の幌内川、幌別川という、現在の雄武や枝幸の方との交流が比較的強かったと想定しております。

3. 近世史料にみえるテシオアイヌ

(1) 天塩川探検のはじまり

それでは具体的に、近世史料にみえるアイヌの記述について順を追ってお話をさせていただきます。今のところ、比較的まとまった史料での記載では、先ほどの『津軽一統志』以外には、1797年(寛政10)に蝦夷地の調査で当時の松前藩士4人が記録を残しています。『蝦夷巡覧筆記』の中に、天塩川筋には14カ所ほどの地名、川筋の地名とどんな支流があるかを記載しておりますが、どうやら河口のアイヌの人たちからの聞き書きと考えられています。この時代、松前藩が蝦夷地を統治していましたが、ロシアの南下政策の対応から2回ほど幕府の直轄領になる時期があります。その最初の時代が1800年前後です。この時期以降、沿岸以外にも内陸部に幕府による調査が入ります。1797年(寛政9)、武藤勘助が『蝦夷日記』を残します。これは三橋藤右衛門の従者として仕えた記録です。天塩川の上流を越えて、石狩川に抜ける道があることが書かれています。この従者3人が天塩から石狩川への川上に行く道を検分のために天塩の川口から出発したと記録にあります。これが、和人が天塩川に足を踏み入れて調査をした最初と考えられています。その

後は、近藤重蔵や間宮林蔵などの有能な探検家の調査まで待つこととなります。特に文化4年（1807年）には近藤重蔵と一緒に調査をした田草川伝次郎が『西蝦夷日記』を書き、そこに天塩場所の支配人が栖原屋ということと天塩にも支配人とか通詞等がいて、番人が35人いたと。それから川沿いにアイヌの人たちをまとめるための惣乙名、脇乙名とか、小使と名付けたアイヌが和人から任命されていたとあります。

（2）近藤重蔵と間宮林蔵

北方探検史の中でよく知られた近藤重蔵と間宮林蔵の話です。近藤重蔵は文化4年（1807年）に幕府の命を受けて天塩川の川筋を探検しています。その記録はしばらく史料化されなかったのですが、30年ほど前に『天塩川川筋図』という形で活字化されました。川筋の略図に流路の方向とか、地名とか、山の様子が簡単に記載されています。資料のAページを見てください。左上に、真ん中に川があって支流があり方位とか、屋根型のマークなどが描いてあります。これが近藤の『天塩川川筋図』の名寄の所で、下に二股に分かれていて、片方のほうには士別の方、右側には名寄川に行くという分岐がある所です。簡単な図ですけど、この流域の川筋の最低限の情報が得られる地図を用いて、どこにアイヌの人たちがいたかはある程度復元できます。これは後に話します松浦武四郎が来る50年前の話ですので、天塩川流域で松浦武四郎の50年前には近藤重蔵によってある程度、多少詳しい第一歩の調査がなされました。

その後、文化11年（1814年）頃と考えられています。今度は間宮海峡を発見した間宮林蔵が内陸部の調査に来たといわれています。ご存じのように、間宮は伊能忠敬の地図測量の協力者でありまして、内陸部についても精力的に調査しましたが、残念ながら間宮の記録そのものは現在知られておりません。ただ、間宮は今のところ、文化14年（1817年）に『北海道河川図』という詳しい河川図を描いておりまして、それが現在、地名の研究者の中で使われております。この二人の調査によって、川筋の様子が多少明らかになったというのがこの時期です。

この時代、天塩場所が慶長年間ですから大体1600年前後に開設をされております。この請負人の栖原屋の記録の中では場所請負の場所の拠点は天塩の河口であったけれども、海鼠を採ったり、昆布を採ったりする時期には天売・焼尻島にも派遣されたとしています。間宮と一緒にサハリン等を探検した松田伝十郎の『北夷談』には、天塩川のアイヌの話が記載されております。この川沿いにもアイヌが多く、十日間ぐらいをかけて川上のアイヌの人たちを河口に集めて、春のニシンの時には苫前ですから少し天塩より南の海岸の方、それから焼尻島、天売等の小さな島へも出稼ぎをしていること。また、天塩川の産物としてはサケ漁が中心でしたが、ニシン漁の時には違う場所行って出稼ぎをするという記載があるのが、天塩場所の記載と合致すると考えております。

その後、安政年間以降は2回目の幕府の直轄時代です。その時には秋田藩が安政2年（1855年）に天塩地方を警備するため武士を派遣しています。この時に西蝦夷地の場所絵図というのを作っています。この絵図は近藤重蔵よりはもう少し詳しい地図で、Aページの右上の方の図です。詳しい地名とか、海岸川口や川岸の様子、それからここに三角形にケバが三つ出たような表記、これは多分アイヌのコタンを指していると思います。これも天塩川沿いの地図資料として有力なも

のになっております。このようにして、少しずつ明らかにはなってはきてはいますが、まだ十分な状況にはなってきてはなりません。

明治に入って、明治政府が財政難から、蝦夷地の経営を東北の諸藩等に預けます。その時に真っ先に手を上げたのは、明治維新の思想的な裏付けとなった水戸藩です。水戸藩は早くから蝦夷地の経営を準備しており、早速、利尻と天塩と中川、上川、苫前で、この天塩地方の支配をして開拓をすることに手を挙げています。準備のため天塩川の河口の流木を除去し、領地から出稼ぎ人を配置してアイヌと直取引で色々成果を上げています。この時に書かれたのが『当藩支配地調査』という文献です。この他にも天塩川沿いのアイヌの人たちは上川、中川郡にいて、山猟を主にしているということ、獲物としてはクマの皮とか肝とかを持参するとあります。それから5月の中旬頃、越冬して暖かくなってから内陸の川沿いから5、6人ぐらいつつ天塩のほうに下って来る。そして、夏ならサケが来る前のマス漁、秋になるとサケ漁等に従事しているということ。流域の役士人の人たちは正月頃には、なにがしかの贈り物を持って挨拶に来るとするような記載があります。このようにして、松浦武四郎入る前の天塩川の状況については、断片的ではありますが、すけれども、若干の史料が分かってきました。

4. 近世の天塩アイヌ

(1) 松浦武四郎の北域調査

前段の部分の大きなポイントとなるのが、松浦武四郎の記録を中心としたものです。本年度は北海道命名150年、それから松浦武四郎が生誕して200年事業の年であります。また、去年は松浦武四郎が天塩川を分け入って160年目にあたります。昨年、士別の博物館と共催で、天塩川に分け入った松浦武四郎の足跡の展示会を相方で開催しました。そういう意義のある年ですが、近世の天塩川流域だけにかかわらず、北海道の近世のアイヌの研究をするには、松浦武四郎の記録が正確さ、分量、それから絵、文字、地図、地名等を含めて、まさに圧巻の史料を残しております。

天塩川にも1857年(安政4)に入りました。資料3ページ掲載のものは、この時の松浦武四郎の記録です。一番上の左が松浦武四郎の五航と記してありますが、都合6回の北方地域を蝦夷地を含めてサハリン、千島を踏査していますが、その5回目ということです。この時には主に西蝦夷地、しかも日本海側を中心に歩いて、天塩川と石狩川をさかのぼって調査をしています。武四郎は、天塩は何回か通過しますが、川に分け入ったのはこの時だけです。特に天塩川の踏査は、前年サハリンの調査をして、自分の上司を病気で亡くし、自分も死を覚悟するほどの病気になりましたので、体力的にもそろそろ終わりかなと考えて、覚悟をきめて内陸部の調査に入ったということが、残された記録類から分かります私は思っております。ご存じのように武四郎はアイヌ語ができましたので、その地域のアイヌの人たちを道案内に川に分け入って調査をし、文字記録、絵図、それから地図、地名等を採録しております。天塩川に分け入った時の記録は二つの史料がありまして、一つは後に江戸で発刊される『天塩日誌』と言われる紀行文です。当時の江戸の人たちに、天塩川がどんな様子なのか、またそこに住んでいるアイヌの人たちがどんな風俗や生活

をしているのかを、絵図等を使って分かりやすく紹介したものです。図のアイヌがシラカバの皮を織り込んだ籠木にぶら下げて赤ん坊をあやすとか、天塩川流域で見かけたトンコリ（五弦琴）と言われるアイヌの人の楽器、クマを獲るための仕掛け弓、それから熊送りをする時の祭壇の様子であるとかを非常に分かりやすく、由来等も書きながら描いています。特に天塩川流域で意識して書いてあるのは、非常にカラフトの風俗がこの辺にもたくさんあるということです。これは前年にカラフトを踏査したということもあり、先ほど蓑島先生のお話にもありました、山丹交易の中で、内陸のアイヌの人たちの中にもアムール川流域から手に入れた用具類があるということ。もう一つは本州から渡ってきた鉄器類や漆塗りの道具等があるということで、テシオアイヌは北と南からの交易による生活用具がたくさんあるということを書いております。

更に、縄文以来の日本の基層文化についてです。縄文時代は日本列島全部に及んだわけですから、その古い基盤となる文化、本州ではすでに昔はあったけど忘れられているような文化もこのアイヌの中の生活の中に存在するというのも書いてあります。これらを、普及版である江戸で発刊した木版本『天塩日誌』と、もう一つの報告書としての日誌の『天之穂日誌』に書いてあります。これも「てしおにっし」と読みます。これは手書きで、普及版の『天塩日誌』よりは5倍から6倍分量が多いものです。これについては木版本としては出版していませんが、今から30年ほど前に活字化されており、これを見ると実情に近いアイヌの人の暮らしぶりが分かってきます。

（2）天塩川アイヌの歴史的平面

私は今まで、アイヌ文化の要素を天塩川の地図に投影して、そこからどんな歴史的、地理的な関連があるのかの作業を試みてきました。資料の中のB、C、Dの図面を見てください。流域のアイヌが居住するには大きく三つの要素があります。一つはコタン、集落です。交易の中心であったり、越冬の中心であったりします。もう一つは、集落では越冬のために秋サケを獲るのですが、その場所はイチャンとか、メムと言われている、サケが産卵しやすい場所があります。イチャンはアイヌ語でサケの産卵場という意味ですし、メムは湧水という意味です。更には移動のための交通です。交通路はルペシュペと言われており、特に天塩川は内陸を貫流するため、日本海側、オホーツク海側、それから水源を接している石狩川の三方向に面した交通路があります。それらを、武四郎の『天之穂日誌』の記載を中心に、先ほど紹介した絵図であるとか、近藤重蔵の記録などから地図上に図化したのがBとCの地図です。これはいずれもコタンがどのような立地したかを分布図にしたものです。当然一番詳しいのは、Cの右側の松浦武四郎の記載ですが、Bの右側の近藤重蔵の記載も詳しいものです。これらを重複させると、コタンのまとまりが河口に一つ、それからサロベツ川から中川町、そして現在の音威子府にかけて、美深町の所に一つのまとまり。そして天塩川と名寄川の合流点から下川町にわたる所に、また剣淵川の合流の士別から本流の上士別の方にも一つのまとまりが見えてきます。これとDページのイチャンとメムの地名と比較してみます。イチャン、メムというのはサケの産卵場ですから、下流にはないですが、中流の中川町から音威子府にかけて出てきて、ペンケニウプ川が注ぐ、美深町のあたりに多くあります。それからもう一つが名寄から下川にかけて多数。もう一つが剣淵川の合流点から本流の上士別にかけての部分があります。これは集落の分布とちょうどオーバーラップするような形で産卵

場があるので、集落と産卵場は密接な関係があったと思われます。更にもう一つがDの交通路です。交通路は自然の沢を利用して、沢をたどり詰めた沢の鞍部を山越えて対面する河川に抜けるものです。地形の最短距離を利用したアイヌの人たちの交通路です。本流を中心にしてAからそれぞれアルファベットを振ってあります。一番多くあるのが、オホーツク海に行く6ルート、南側の石狩川に行くのが6ルートで、それから日本海側に行くのが2ルートです。このように、天塩川は東西の海岸線に行くのに便利な位置に川があったことが分かります。

これら、コタンの集中している箇所、サケの産卵場の集中している箇所、それから交通路をまとめたものがEの図面です。図面ではそれらを集成して集落の立地帯というのを破線で結びました。それからサケの産卵場の分布帯は点線で、あと交通路は鎖線で結んであります。また、この後氏江さんからお話しがありますチャシの立地、私の考えているチャシの立地個所を三角形で、それから縦長の三角形は神居尻とかチノミシリとか言われている、アイヌの人たちが信仰をした山です。これらをセットにして、このような範囲に天塩川流域にアイヌの人たちが住んだ拠点が想定される範囲をくくったものがEの図の右側の図です。大きくはAの所は天塩、先ほど蓑島先生のお話があったように、夏の漁労と交易拠点に天塩があったといえます。Bは現在で言えば中川町から音威子府にかけての部分です。この地帯は越冬よりは、ここまではチョウザメがたくさん上がりますので、その漁であるとか、夏の終わりのベカンベといわれているヒシの実を採取したり、マス漁をする、そういう中下流域の食料を確保する所として想定されると思っています。Cはペンケニウブ川に注ぐ美深町の範囲で、ここは秋のサケ漁、冬の毛皮猟、そして越冬拠点としての内陸のコタンがあったと考えられます。同じようにDとEも冬を中心とした内陸のコタンが立地しています。そこに伝承、信仰の山である神居尻とかチノミシリが配され、それから集落の領域を示す一つの象徴であるチャシが集落立地帯の中に1カ所、もしくは2カ所あるということです。これらが文献資料から見た天塩川流域のアイヌの人たちの歴史的な平面です。

その横に、Eの下のほうに19世紀の天塩の川筋の役アイヌの一覧を載せました。各文献に載る役アイヌの名前を時系列で並べました。この中で、天塩の部分、地名である天塩の部分Aに該当しますし、中川町のオニサツペとかの部分大体Bに該当します。それから名寄のあたりがCとDに該当して、Eの部分が士別の所となります。大体この領域にアイヌの人たちの一つのまとまりがあった。そこに役割を持つアイヌたちを配置したと考えられ、この歴史的な平面と役アイヌの人たちの配置がある程度合致すると考えております。このようにして、文献からたどる部分での、近世・江戸時代のアイヌの人たちの暮らしぶりについて、その傾向が読み取れるだろうと思います。

5. 近代史料にみえる天塩アイヌ

(1) 開拓前の天塩川調査

これからは近代、明治以降の文献にみえるテシオアイヌということです。先ほども言いましたように明治の30年代に天塩川流域には本州各地から開拓の人たちが入植します。入植前には当然ながら様々な調査をして、区画の測量や川筋の土地調査が行われます。現在知られている中では

10 回ほどの調査がされましたけれども、全部の調査に記録が残っているわけではありません。調査はされたけれども記録が不明、あるいは残されていないものもあります。主なものを取り上げていきたいと思います。

明治 5 年（1872 年）に当時の苫前の開拓使の役人である佐藤正克が天塩川流域では和人としては最初に越冬してアイヌの人たちと一緒に川筋の調査をしたという記録があります。記録の名前は『關幽（へきゆう）日記』です。事前に名寄市の中名寄という名寄川岸に仮小屋を作ってもらい、食料も事前に送付をして越年しようと計画をしたのですが、事前に送った食料の保存方法が悪く腐敗をして、食料は当てになりませんでした。周囲に住んでいるアイヌの人たちに助けられて越年調査をしています。アイヌと同じく魚を取り、保存食を食べた事が良かったということです。この時期、本州各地から渡ってきた和人の武士が、ビタミン不足で病気になって命を落とすということがありましたが、佐藤はそうならず、アイヌの人に助けられて無事越年しました。彼のもう一つの大きな目的は、現在の国道 40 号線の塩狩峠の道となる剣淵川から石狩川に抜ける交通路を見つけることでした。当地のアイヌの古老に案内を頼みました。しかし、古老もこの当時、あまり石狩川との交流がなかったみたいです。かつては通ったこともあるが、うろ覚えであったことと、折悪く悪天候にも阻まれて、残念ながら果たせずに終わりました。そのため越年をして、今度は名寄川からサンル川を経て幌内川に越えて帰っております。

もう一つは明治 21 年（1888 年）の殖民地選定調査・測量です。これについては当時の道庁から『北海道殖民地選定報文』という、各入植予定地域の樹木の種類、地形、土地の状態、平地面積などの調査がなされます。これは当時の道庁が総力を挙げて行いました。その中でも有名なのが内田潔の活躍です。内田潔はクラーク博士の直接の教え子の北海道農学校の第 1 期生です。この方が測量官として入り、その従者である山本信がその調査の日記を残しています。この日記中にこの流域で雇い上げた人夫としてのアイヌの人たち 18 名の名前が記載され、その人たちの活躍ぶりが書かれています。また内田は、調査が終わった後、8 月から 9 月にかけて自ら佐藤正克がなしえなかった比布越えの道を探るために、何人かでアイヌの人の案内なしに剣淵川をさかのぼっています。これは『天塩紀行』という記録にありますが、何人かで行動し途中で二手に分かれながらも、なんとか山越えしますが、途中で会えなくなり、夕闇が迫る中でお互いに鉄砲を撃ち合って合流できました。なんとか遭難寸前で石狩川上流の比布まで達しています。ここで旭川の街で休んで、帰りは比布のまだ乳飲み子のあるアイヌ女性の助けを借りて、来た道をたどり、天塩川に戻って来られたという記録です。

明治 22 年（1889 年）には地質調査が行われています。北海道の開拓の中でも平地・山地以外に地下資源を有効に生かすために調査がなされましたが、この調査は全道を分担して、この天塩川流域を探検した横山壮次郎が『天塩川紀行概略』という史料を残しています。横山は主に名寄川を分担したのですが、現地で作った 6 隻の丸木舟を使い、地元アイヌを 1 日 35 銭で十数人雇っています。特に記載で面白いのは中流域の音威子府でマレップという、本来は浅瀬のサケを獲るための長い槍の先に可動式の鉤が付いた鉤鉞があります。それを用以チョウザメを捕獲する様子を記録しています。チョウザメはサケよりも大きな魚ですし、背びれのある背面は比較的硬い皮

で覆われているので、二撃で命中して、なんとか獲ったとあります。これはアイヌの人のチョウザメを獲った記録としては他になく、大変貴重な記録となっています。

その後、明治27年(1894年)には当時の増毛郡、このあたりを管轄した増毛郡の役場の興津寅亮が『天塩川沿岸状況調査復命書』を書いております。明治27年は開拓直前ですし、明治に入り今まで述べてきたような調査がなされていますので、これらの調査を集成する形で、各項目の総合的な調査です。その中の「土人生計の対応」の項で、土人救済の目的のための方策が書いてあります。注目すべき記載は中川町のポンピラ、アベシナイ、美深のペケルル、それから名寄のナイブツの4カ所に集落を定めて、土地の貸し付けをおこない、また種や農機具を貸して開墾したらよいと提案しています。

明治32年(1899年)には剣淵と士別に屯田兵が入ります。この時には近藤虎五郎という技師が写真機を持ち込んで天塩川の主な所の写真を撮っています。この時に「天塩川沿岸のアイヌ」という紀行文を書いていますので、これも写真と共に貴重な史料となっています。

明治33年5月30日、名寄に開拓者第一陣の山形団体が入った年です。この時には、現在のピヤシリ山、当時は飛ぶ鏝の山と書いて「ひやじりさん」とされていましたが、ここに一等三角点が設定されました。地図を作るためには三角点測量をして、見通しの良い高い山にたくさんの測量基点を設置して、それを確認しながら地図を作ることを陸軍の陸地測量部が行ないました。この時に測量に入ったのは舘潔彦という、北海道で多くの三角点を選定した人物です。国土地理院に残されている三角点の「点の記」の中に、名寄では地元の北風辰三郎というアイヌと、深川と神楽のアイヌの3人で現在のピヤリスキー場のある沢から尾根に出て、ピヤシリの山頂に向かったとあります。

このようにして、近代に入ってから各種調査は、アイヌの人たちの助けを借りてようやくなしえたというのが分かると思います。

6. 名寄・内淵給与地のアイヌ

(1) アイヌ給与地の下付申請

名寄の内淵給与地のアイヌの様子について話します。国は明治32年(1899年)に北海道旧土人保護法が制定され、狩猟民族であるアイヌの人たちを農地を与えて農耕民族として、和人に同化をしようとした政策を進めます。天塩川流域では、先ほど何カ所かの地名を挙げましたが、最終的にアイヌ給与地として選定されたのは名寄市の内淵、具体的に言えば現在の陸上自衛隊の駐屯地の東側の川沿いです。川筋のアイヌの人たちは書類を整えて申請し許可を得ています。その書類は長らく分からなかったのですが、名寄市史を作る過程で、当時の上名寄村の戸長役場の史料の中に給与地を申請するアイヌの人たちの書類が見つかりました。後にお話しする北風磯吉の家族も申請して、明治34年(1901年)ぐらいから9家族の申請があり、現在の5線から8線にかけ、その後明治の末ぐらいまでに80町歩ほどが開墾されて、大正の初めには48戸分の給与地が下付されています。これについては地図のFを見ていただきたいと思います。Fの右側のほうに、大正時代の地図に当時の内淵給与地の様子が分かります。川がまだ蛇行したままで堤防もない所

です。その中に太い破線で囲った天塩川の左岸の所が内淵の給与地です。後に保安隊敷地ということ、一部西側の方に実線で区切った用地が食い込んでいますけども、当時はこの地区に申請をして、5町歩の土地を開墾したら、自作となるということです。真ん中あたりの内淵の集落と書いた所に学校と神社があって、若干の家屋も、四角く記されていますので、ここに内淵の小集落があったのが分かります。土地自体は肥えていたらしいのですが、川岸で堤防もないので、春の増水の時、秋の台風の時期には水に浸るような、農地としては良い場所ではなかったですが、ここでなんとか農業をしておりました。

(2) 旧土人給与地の成立

Fの下にその当時の、明治30年(1897年)から昭和17年(1942年)までのアイヌの人たちの戸数と、それから男女別の人数が資料で残っておりました。当初は8軒、30人だったのが、徐々に増え始めて、大正の初めぐらいになると150ぐらいになっております。そして開墾が一番進んだといわれている115町歩ぐらいの土地を開墾したのが昭和の8年(1933年)とか9年です。この時代には約200人、そして昭和11年(1936年)には234人という最大の人口を数えます。この人数全部がアイヌの人たちとは考えられないですが、給与地が設定をされて、明治、大正、それから昭和の初め、戦前まで150から200人前後のアイヌの人たちがこの名寄の給与地に農業を営んでいたということが分かります。

(3) アイヌ保護策と互助組合

6ページと7ページを見てください。その後、給与地は危機が訪れます。それは全道の給与地も似た状況だったのですが、土地を開墾し認可されるまで時間がかかり、その土地の所有や貸し借りなどに和人が取り入り、小作人として入れてくれと言って、その後に土地を取られてしまうような事例がたくさん発生しました。これではせっかく与えられたアイヌの土地を取られてしまうなどで、各地で問題となりました。そこで明治44年(1911年)、上名寄村ではアイヌの保護のため上名寄村旧土人保護規定というのが発議されて、そして名寄給与地で土地の互助組合、お互いに土地の管理をしっかりと、アイヌの人たちが土地をアイヌの人たちで守ろうという動きがありました。名寄はかなり早い時期に行われ、全道に互助組合ができるのですが、そのさきがけとなったと言われています。この当時、大正13年(1924年)に互助組合の設立総会にアイヌの戸主は30戸、うち男性22人、女性8名が戸主として農業を営んでいることが分かります。この後、大正時代に先ほどの表で見たように、アイヌの人が順調に増えています。

(4) 集落での暮らしぶり

十勝地方でアイヌ教育や研究大きな役割を果たした吉田巖さんという人が名寄を訪れて、その当時のアイヌ集落の様子とコタンの住居のスケッチを残しております。Gの図を見てください。吉田巖さんが残したアイヌの人の集落のコタンです。大正10年(1921年)にはまだ屋根を笹でふいて、壁はヨシやアシの茎を束ねた伝統的なアイヌのチセがありました。付属してへペレセツといわれている子熊を飼う檻です。それからプーと言われている高床式の貯蔵庫とトイレ。次に写真をご覧ください。最初のHの写真ですが、真ん中の右の図と一番下の左の図は、まさに時期的にも同じ、吉田巖さんが描いたスケッチがそのまま写真として残されているのが分かるかと思

います。上の二つは明治31年(1898年)の「天塩川沿岸のアイヌ」で写真機を持ち込んだ横山壮次郎の写真です。左のアイヌの人がいて、同じようにへペレセツが3棟あり、現在の中川町の安平志内川口のアイヌの人の当時住んでいた方の様子です。右の方は丸木舟にアイヌが乗って操舵しています。これは現在の名寄市の智東地区で川が滝のように流れていた所の川岸に寄って来たアイヌの人の写真です。もう一つは大正2年(1913年)の写真です。これは士別の博物館に所蔵されていた、アイヌの人の写真をボランティアの方が整理中に見つけ、誰が写っているのかを調査しました。役アイヌの表には載っていますが、ニシパコロという士別の村長だった人の息子と判明しました。内淵には給与地として川沿いのアイヌの人が集められていたのですが、大正2年頃にはまだ全部が集まらないで、元のコタンに住んでいた事を示す写真です。ここもへペレセツ(子熊小屋)があり、脇にはたぶんヌサと言われている野外の祭壇が見えます。

(5) 内淵集落の変ぼう

内淵のアイヌの人たちは農業を中心に暮らしていました。戦後になっても、一定の安定した集落の営みがありましたが、昭和27年(1952年)に名寄町が当時の保安隊、現在の自衛隊の駐屯地を誘致するという事を決定しました。その場所が先ほど地図で示したように、内淵のアイヌ給与地の西側の一角も入るような範囲です。町の大きな方針ですし、その地域の振興を図るという意味では、アイヌの人たちも一応協力をして、実際、平地部で7軒、それから丘陵の演習地で5軒ほどの農家が立ち退きをしましたので、アイヌの集落は若干小さくなりました。昭和40年代には北海道による開拓パイロット事業が導入されました。これは内淵地区にはこの頃は堤防もできていましたけども、土地が低くて、土壤改良をして農地として高い生産性を目指そうということで、市と協力して事業が進められました。アイヌ給与地は和人への転売などに一定の歯止めがあったのですが、このパイロット事業の中では、まだ詳しいことは分かりませんが、農家のそれぞれの事情によっては第三者に売り渡してもいいというような規定がありました。それにより農家経営の厳しい方も含めて、給与地の第三者への譲渡・転売されたみたいです。これにより事実上、約65年間続いたアイヌ給与地の面影はなくなったといえます。

7. 給与地を生きた二人のアイヌ

(1) イアンパヌ

それでは最後に、この給与地に生きた二人のアイヌの人のことをお話して、私の話の最後にしたいと思います。旭川のアイヌの人で荒井源次郎という、裁判所に勤め旭川地域のアイヌの人たちのいろいろな活動を支えてきた方がいらっしゃいました。この方が自費出版で『アイヌ人物伝』という本を書きました。その中で、二人の名寄に関わるアイヌの人の話があります。一人がイアンパヌというアイヌ女性です。生まれたのは1853年ですから、武四郎がこのあたりを調査していた時期です。日高地方で生まれ、その後、千歳で知り合った和人の秋田出身の鈴木亀蔵の商売を手伝いました。旭川に出向き、開拓者が入る前に鈴木は各種の生活用具を仕入れてきて、アイヌ相手の商売を始めました。当然ながらアイヌ語が分かるイアンパヌを伴い夫婦として商い、12年間ほどで多くの蓄財をしたと言われていています。鈴木活動は旭川市史にも記載がありますし、

現在も石狩川と忠別川の合流地点に亀吉という町名があります。忠和川の合流点ですが、これは鈴木亀蔵の名前が由来となったもので、亀蔵ではなくて亀吉なのは、アイヌの人は「かめぞう」の発音がしづらくて、通称で「かめきち」と言ったそうです。ところが、残念ながら夫の商売がうまくいって、ある程度の蓄財をなした段階で、子供もいましたけれども、離縁されることになります。荒井源次郎の本では夫と別れて、名寄に行って亡くなったという記載があるのですが、その後のことは詳しく書かれていません。後に、その前後の新聞記事等を見ている中で、イアンパヌが大貫アイという和風の名前にして、明治 23 年（1890 年）のまだ給与地も設定されていない名寄の内淵に移り住み一人で暮らしていました。その後に、自分自身は独り身だったのですが、親のない子の養育をして、明治 40 年（1907 年）の北海タイムスに「美談奇篤のアイヌ」というような記事が載ったりします。また先ほど話しました、アイヌの互助組合の中で給与地を守る運動等を行っています。このように、地域の女性のリーダー的存在として活躍をしていたのですが、残念ながら北海タイムスの大正 13 年（1924 年）の 8 月 30 日の記事に天塩川にサケを取りに行き、事故により亡くなったという記載が載ります。

イアンパヌの場合は、これは私の見方ですが、生き方としてアイヌであり、またその後和人の夫に連れ添い、別れた後は名寄で農業と養育の日々を送ったという、清貧の人です。

（2）北風磯吉

もう一人、ほぼ同じ時代を生きて、年から言えば 17 歳は離れますが、北風磯吉という人物を紹介します。北風については、名寄ではよく知られたアイヌで多くの資料が残されている方です。まず、日露戦争に出征して金鵄勲章をもらったアイヌというのがよく知られた事績です。北風は現在の名寄川沿いに生まれて、幼い頃から和人の行商人に言葉や読み書きを習ったと言われています。後に、給与地が設定された明治 33 年（1900 年）前後には名寄の内淵に転居して、給与地を申請して、農民として生きる決断をしています。その後、日露戦争に従軍して、軍功により金鵄勲章を授かりました。日露戦争ではアイヌの人の従軍が 63 名といわれ、そのうち金鵄勲章は 3 名とされています。アイヌコタンのカムイに顔向けができないと後ろ向きで後退をしたとか、上等兵として斥候とか伝令で大変活躍したという、当時の北海タイムスにも大きな記事として載りました。その後故郷に帰り、今度は農民として作物品評会に入賞するなど、また学校用地を寄付するなど、様々な地域貢献をしています。また、最もテシオアイヌの伝承を有するという事で知られ、昭和 36 年以降、多くの研究者が来訪して、当地の数少ない伝承者としても活躍しました。残念ながら昭和 44 年（1969 年）に名寄で身内がいなかったために、旭川の老人ホームの静和園で亡くなり、89 歳の生涯を閉じています。

北風はアイヌの農民として、その後は軍人として、もう一つは集落の功労者、リーダーとして、で、晩年はアイヌの伝承者として、常にアイヌであるということ意識して生き抜いた方と思います。

（3）二人のアイヌの生き方から

二人とも、同じ集落に暮らし、歳の差はあるとしても交流があったはずですが、直接的な交流を示す資料は残念ながら今のところありません。明治の 30 年代から 29 年間はこの内淵の給与地

で過ごしています。その間、集落の取りまとめ役や、アイヌ給与地の農地を守る活動をおこなったという意味で、明治・大正を生き抜いたアイヌです。イアンパヌは自分の境遇を受け入れて懸命に生き抜いて、最後は事故死という形になりました。北風磯吉はいろいろな部分で自分がアイヌであることを常に意識しながら、最後はアイヌ文化の伝承者として亡くなり、自分の価値観の中でアイヌとして生きたと思っています。

二人といろいろな人生経験の中で、その時の価値観を持ち、境遇を受け入れた中でしっかりと生き抜いたという意味では、アイヌの人たちが一番尊敬を持って言う、「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」、より人間的である人間として生きた男女の代表例として、このお二人の話を最後に紹介させていただきます。

7. おわりに

今日は近世の文献の記録から流域の歴史的な事象を浮かび上がらせることが一つ。二つ目は、近代の開拓に向けた各種調査の中で、結果として自分たちの生活を圧迫する事になるのですが、アイヌが和人に協力をして、その記録の中には当時のアイヌ像とか生活ぶりを伺う資料が残されていたというのが二つ目。三つ目は約 65 年間の名寄のアイヌ給与地の変遷と、イアンパヌと北風磯吉という、個人史の中から近代を生きたアイヌの生きざまの一端を紹介しました。給与地も含めて、天塩川流域のアイヌの人たちの全体像を知るには、まだまだ史料的な限界がありますけれども、先ほどの土別の博物館の写真のように、まだ新しい資料が出てくる可能性もありますし、そういった資料をつなぎ合わせて点から線へ、そして面として、文献史料の中から天塩川流域のアイヌの人たちの時空を重ねた歴史像を浮かび上がらせることができると考えております。

大変分かりにくい雑ばくなお話を清聴していただいたことを感謝申し上げて、私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

第22回 道北の地域振興を考える講演会

2018年3月19日 名寄市立大学 図書館大講義室

第2講演「天塩川に生かされたアイヌ～近世の文献を中心に」

鈴木 邦輝（名寄市北国博物館 嘱託学芸員）

1. 天塩川とテセウアイヌ

(1) 天塩川の地理的条件

流路延長 256 km、東の北見山地、西の天塩山地に挟まれた羽状河川
道北地域内陸を貫流し支流が山地に分け入る、河川・山地近接地形
下流は蛇行、中上流に河岸段丘が発達、支流は湧水に富む礫川原

(2) テセウアイヌ～17世紀からの記録

- ・「山丹交易」のルート上～ヨイチアイヌ、ソウヤアイヌとの中継移送を担う
- ・「津軽一統志」享保16年（1731）
大川有 狄あり 家二十軒 手塩の大将トミカヘワイン
- ・更科源蔵によると、夏の河口付近の漁労、内陸コタンで越冬する季節的移動生活と内陸に居住領域をもち、古くから天塩川河口とオホーツク幌内系統から移住・交流が想定。

2. 近世史料にみえるテシオアイヌ

(1) 天塩川探検のはじまり

①寛政9年（1797） 蝦夷地調査

松前藩士 高橋壯四郎、下国才蔵、南条郡平、牧田唐九郎

「蝦夷巡覧筆記（松前地並東西蝦夷地明細記）」

天塩川筋 14カ所の地名、川幅、里程、枝川～河口での聞き書きの可能性

②寛政10年（1798） 蝦夷地巡察

江戸幕府勘定吟味役 三橋藤右衛門ら3名

武藤勘助（三橋用人）「蝦夷日記」

当所よりテシヲ越とて山道あり 支配向三人テシヲ並イシカリ川の川上を見分のため
今日此山口より出立す

③文化4年（1807） 西蝦夷地巡見・内陸交通路調査

江戸幕府小目付付 田草川伝次郎「西蝦夷日記」

天塩場所 栖原半助請負い 支配人、支配人代、通詞各一名、番人三十五人
惣乙名、脇乙名、小使のアイヌ三役

(2) 近藤重蔵と間宮林蔵

①文化4年（1807） 西蝦夷地巡見・内陸交通路調査

江戸幕府目付 近藤重蔵 「文化4年丁卯 天塩川川筋図」

川筋図に流路方向、地名、支流名、山、川の様子、夷家の簡単な記述

シボロ カムイコタン 乱石ノ上湍流激奔湧濤ノ如シ、ナヨロ筋 左右皆平地 柳樹

②文化11年(1814) 川筋測量

蝦夷地御用雇 間宮林蔵

天塩川中・上流部に雨竜川からの山越えで達する、川筋アイヌに伝聞あり

間宮林蔵 「北海道河川図(仮称)」 文化14年(1814)

③「天塩場所」とアイヌ

商場知行制として慶長年間(1596~1615)

場所請負制として天明6年(1786) 知行主 松前貢、請負人 栖原角兵衛

天塩を拠点に天売、焼尻では海鼠引

文化4年(1807) 松田伝十郎「北夷談」

此川縁に住居の夷人多し。十日路も登りて夷人を集め、春鮭漁中はトママイ持ヤンケシリ、テオレシリと云ふ小島二島あり、此しまへ出稼す。(略) 此所産業とするは鮭漁にて、鮭漁中は隣場所へ出漁をなす。

④幕府再直轄時代

- ・秋田藩警備 安政2年(1855) 天塩に勤番所、調役下役、同心、足軽 川筋は番人の采配。

江差沖ノ口備付「西蝦夷地場所絵図」 河口にテシホ運上屋、烽火台、支流、里程、山越え道、アイヌの家

- ・庄内藩支配 文久3年(1863) 庄内藩蝦夷地代官 原半右衛門 「日誌」(在勤記録)

脇本陣 代官(1)、足軽(2)、諸向役人(2)、従者・郷夫(7)

川筋之場所 コエカンヘツ、ヲニサツヘ、ニコフ、ナヨロ、シヘツフレタヘ、シヘツノカナン(原 龍介 「庄内藩蝦夷地代官の日誌」 昭和63年)

- ・「ルルモツペ・トママイ・テシホ三場所経界絵図」 万延元年(1860)

名寄の所に「ナイブツ番人越年所」の小屋の絵

⑤明治2年(1869)~4年 水戸藩の利尻、天塩、中川、上川、苫前の所領支配願書

河口堆積流木除去、出稼ぎ人による開墾、アイヌと直接取引経営で成果

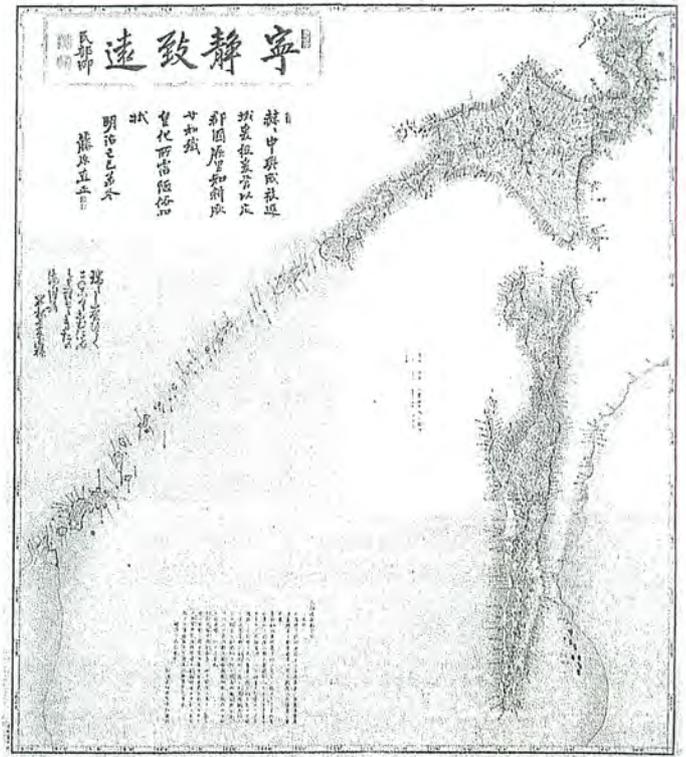
「当藩支配地調書」~上川郡中川郡土人之義ハ常ニ山獵を業ニ致居取獲候熊皮胆等持参 五月中旬此土人始五六人位ツツ天塩へ下り候ニ付鱒漁より鮭漁迄召仕候 役土人之義ハ正月年頭為祝儀毎年臘月被下正月中旬比帰郷致候

3. 近世天塩アイヌ~松浦武四郎の記録を中心に

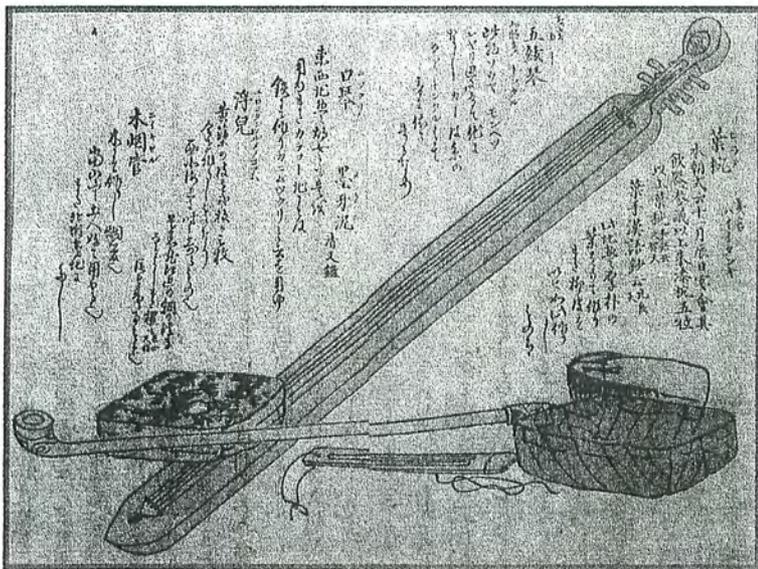
①松浦武四郎の北域踏査~「山入川上り」山川地理取調べ

- ・蝦夷地、樺太、千島をアイヌからの聞き取りを中心に個人で踏査。
- ・見聞記録をまとめ、文字、写図、地図として記録化、刊行。
- ・蝦夷地を外国の領土化から排する「志士」とアイヌに寄り添う「理解者」。

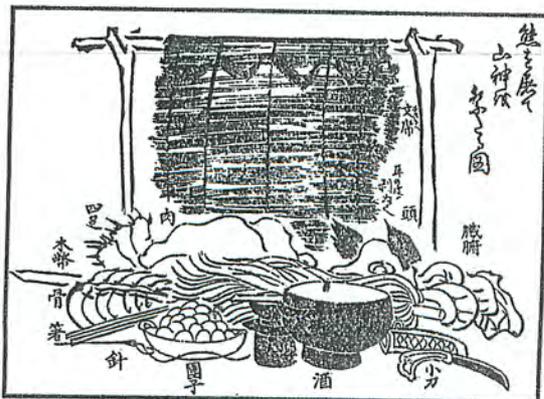
②天塩川に分け入った武四郎



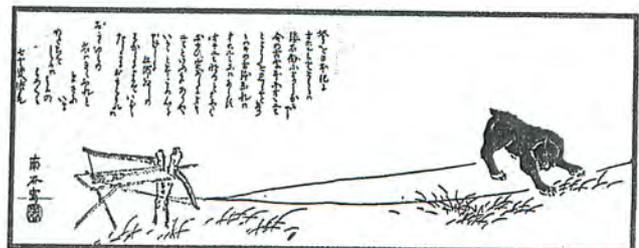
「北海道国郡図」(明治2年)



ゆりかごの絵(『紀行』)



熊送りの時の神への飾りつけ(『紀行』)



仕掛け弓による熊狩(『紀行』)

安政4年(1857) 東西蝦夷山川地理取調(天塩川内陸探査の命)箱館奉行所御用雇、踏査の集大成、北方由来、基層文化関連の発見
日誌(報告書)「天之穂日誌」(手書き)と紀行(普及書)の「天塩日誌」(木版本)
「天塩日誌」に古老から「加伊」の聞き取り。「北海道」の命名発想へ。

③コタン(集落)

下流(問寒別川)～中流(オグルマナイ川) 点在～夏季集落も
上流 美深、名寄川筋、士別上士別周辺に稠密分布～越冬集落

④鮭産卵場

美深(ペンケニウツ川河口)、名寄川筋、士別市上士別に稠密

⑤交通路

内陸を貫く河川のため下流から最上流まで交通路の川(ルペシュペ)が存在。
オホーツク海へ6ルート、石狩川へ6ルート、日本海へ2ルート。
名寄川・サンル川から幌内川越え、剣淵川から石狩川越えは最後まで主要ルート。

⑥天塩川アイヌの歴史地理的平面(推定)

- A～天塩(主に夏季漁労と交易拠点)
- B～下・中流域食料獲得帯(夏の鱒、チョウザメ、秋の菱の実)
- C～美深居住地帯(鮭漁、越冬、毛皮)
- D～名寄川居住地帯(鮭漁、越冬、毛皮)
- E～士別居住地帯(鮭漁、越冬、毛皮)

4. 近代史料にみえる天塩アイヌ

①明治5年 天塩国水源、北見、石狩国境見聞

開拓使大主典 佐藤正克 「關幽(へきゆう)日記」

和人官吏による初の越年調査。仮小屋と食料を事前手配したが、食料が腐敗したため食料獲得や生活全般を名寄川筋のアイヌの人たちに助けられ越年。剣淵川から石狩川に通じる交通路確定の調査に出かけるも、案内アイヌの地理不案内と悪天で果たせず。名寄川～サンル川～幌内川越え、宗谷岬経由で帰還。

②明治16年 天塩川沿岸アイヌ戸籍調査

札幌県役人 大村耕次郎 (詳細不明)

③明治21年 殖民地選定調査・測量

北海道庁殖民課 「北海道殖民地選定報文」明治24年

→ 明治21年4月27日～8月16日 内田資料(北海道博物館所蔵)

道庁地理課 殖民地選定員 山本 信「日誌」

日誌中に雇上げ人夫・アイヌの18名を記載。明治20年代の開拓入植に伴う各種事前調査に従事した川筋アイヌの動向が伺える。

→ 明治21年8月24日～9月13日 北海道毎日新聞

道庁地理課主任 殖民地選定官 内田 潔 「天塩紀行」

調査終了後、石狩越えの踏査を行い、途中一行が二つに分かれたため遭難寸前で合流し、石狩川上流の比布に達する。帰途は比布の幼児を背負ったアイヌ女性の案内で天塩川筋まで戻る。

→ 明治 21 年 8 月～9 月 道庁地理課 5 等技手 柳本通義 「柳本通義 自叙伝」
神埜 努「柳本通義の生涯」 自伝日誌の一部に選定調査の経過を記述。

④明治 22 年 地質・鉱物調査

北海道庁 石川貞治、横山壮次郎 「北海道庁地質調査鉱物調査報文」明治 27 年

→ 明治 23 年 「巳丑会通信録」 第二号 横山壮次郎 「天塩川紀行概略」

名寄川等を分担した横山の記録。十余名のアイヌを一人 1 日 3 5 銭で雇い、6 隻の丸木舟で調査。「天塩土人の景況」として漁労、狩猟、食べ物について取り上げている。また、中流で丸木舟から「マレップ（鉤鉈）」でチョウザメを捕獲する様子を記す。

⑤明治 26 年 屯田兵用地調査

北海道庁（詳細不明）

⑥明治 27 年 9 月 27 日～10 月 22 日 天塩川沿岸、天塩、中川、上川三郡実況調査

郡役所書記 興津寅亮ほか 3 名 「天塩川沿岸状況調査復命書」 明治 28 年 4 月初の総合的調査といえるもので、1 3 項目からなる。4、土人生計ノ大要、5、土人救済ノ目的では、土人ヲ集合シテ将来一部落ト為スニ適當ノ位置ハ、「ポンピラ」「アベシナイ」「ペケルル」「ナイブツ」ノ四ヶ所ニ部落ヲ定メ、土地ノ貸付ヲ許シ、開墾セシメ、農具種子ヲ給与シテ農事ニ奨励シ、且ツ家屋ノ構造ヲ改良シテ衛生ニ資セシムルヲ最モ緊要ノ事ニシテ とある。興津による出張日誌では、出会ったアイヌの人や和人密漁者の動向などを記す。

⑦明治 30 年～32 年 殖民地地区画設定測量

（詳細不明）

⑧明治 31 年 内務省 北海道河川視察

内務省土木技師 近藤虎五郎、同技手 前沢初治、道庁技師 岡崎文吉

→ 明治 31 年 11 月 雑誌「太陽」4 卷 11 号、明治 32 年「日本名勝地誌」第九卷

近藤虎五郎「天塩川沿岸のアイヌ」

近藤による紀行文。初の写真機携行の調査で 8 枚の写真中 6 枚にアイヌが写る。表題のとおり近藤が初めて接したアイヌ風俗を読者に伝えている。アイヌ民族、アイヌ語、アイヌ語地名、丸木舟、狩猟、漁労、住居や貯蔵庫などについて記し、名寄では和人夫の留守宅を守るアイヌ女性に出会っている。

⑨明治 31 年 9 月 29 日～11 月 16 日 宮内省御料地・水害地視察

宮内省 片岡利和侍従、佐々木陽太郎御料局札幌支庁長、佐藤昌介札幌農学校長、田町技師

→ 明治 31 年 10 月 29・30 日 北海道毎日新聞

佐々木陽太郎御料局札幌支庁長の実見談 「片岡侍従一行の天塩川探検」

6泊7日で天塩川を天幕泊で下り、川筋アイヌの生活ぶりや交流、原生林の様子も紹介。

⑩明治33年5月30日 ピヤシリ山（飛鏃山・ひやじりさん）一等三角点選定調査

陸軍陸地測量部 陸地測量師 館 潔彦

→ 「一等三角点 点ノ記」国土地理院

案内人に北風辰三郎（名寄）深川、神楽のアイヌ3名。アイヌの狩猟ルートと思われる沢筋から尾根に出て頂上に案内している。

5. 名寄・内淵給与地のアイヌ

(1) アイヌ給与地の下付申請

北海道の開拓を進めるにあたり、明治政府はアイヌ民族を農民にすることで経済的に救済し、学校教育により同化を図った。具体的には明治32年公布の「北海道旧土人保護法」により各分野にわたる施策がなされた。

天塩川では明治36年に現・中川町大富の御料地区画測量時に川近くにアイヌ向けの特別の区画をしている。保護法によるものでは明治32年に智恵文19線（ニウプ川口）に給与地が存置されたが、中川も含めてその後に給与地として入地された経過はない。

図面などの資料はないが、川筋では唯一、名寄の内淵地区で上名寄村戸長役場の「庶務書類」により給与地の下付申請を知ることができる。明治34年の2月から4月にかけて9家族から申請があり、場所は5線から8線までの天塩川沿いの左岸である。この地は東から名寄川、西から有里利川が流入し、天塩川の河跡湖も残る低湿地で洪水も多く農地としては適地とはいえないが、明治末までに80町歩が開墾され、大正初めには48戸分の給与地の存置の記録がある。

(2) 旧土人給与地の成立

大正5年の「名寄町勢一斑」には旧土人部落は6線から10線間の天塩川左岸一帯となっている。給与地の申請は大正に入り順次下付されたが、名寄地方のアイヌのほか天塩川上・下流のアイヌの人も順次入地したと思われる。給与地の戸口は明治30年の8戸30人から少しずつ増加している。また、大正2年と同4年には約30人ずつの増加が見られ、「名寄町勢一斑」や昭和8年の「郷土誌」や、更科源蔵によると旭川の近文や日高地方（鶴川、厚真、穂別、沙流、浦川）からのまとまった移住の記載があることから、これらを反映しているかもしれない。また、小作を含めた和人の入植者も加わり始めている。

(3) アイヌ保護策と互助組合

上名寄村では明治44年に「上名寄村旧土人保護規定」が発議され、その後アイヌ給与地を村が一括して貸付を受けるか、売り払いを受け保護しようとする動きが予算書の中に見える。申請して貸付けを受けても、開墾に成功して下付まで時間がかかる間に下付地が詐

欺的な方法で和人の手に渡るなどの事例が全道的に持ち上がった。

内淵給与地ではいち早く有志が道庁に請願を行うなどとしたため、給与地の負債解消や適正な管理を行う互助組合の設立にこぎつけた。大正13年の5月の設立総会ではアイヌの戸主30名（うち男性22名、女性8名）が出席した。名寄の動きは道庁の訓令につながり、昭和5年までに全道で30もの同様な互助組合が作られている。

（4）集落での暮らしぶり

戸口からは大正以降戦前（昭和20年）まで安定した集落の存続が伺えるが、その暮らしぶりを知る資料は限られている。大正6年7月には東照寺の授戒の際に僧侶一行と家屋前での記念写真があり正装したアイヌと儀式用の用具類も写っている。同10年8月には帯広地方でアイヌ教育に功績を残した吉田巖が訪れている。「この部落は元来土人地であるが、土人は五戸しか現存しない。和人の多くは土人の小作であるそうな」と記している。また、家屋、食糧庫の写生は貴重である。昭和9年の「名寄町勢一斑」には、「アイヌ人は内淵『ナイブチ』に一部落を形づくって農業に従事してゐるが、特色が失はれて、今はほとんど内地人と変わらない生活をしてゐる。」とある。

昭和3年に「名寄町区設置規程」により、有里利川以北の天塩川左岸は第12部から内淵区となった。集落のある所も内淵アイヌ集落（部落）とよばれ、同8年頃の給与地面積に対する開墾率は7割を超え115町ほどであった。

戸口は、大正2年に38戸、106人となり、同前半は50戸、150人前後で以降は30戸台を前後する。昭和6年以降は統計のある同17年まで200人前後である。大正以降には小作が増え、自作は横ばいの営農状況の記録があり集落の人口増は和人小作人の増加が関係するかもしれない。

（5）内淵集落の変ぼう

内淵地区は戦前、戦後を通じて洪水に悩まされつつも農業地であった。昭和23年の調査は給与地面積166町、うち自作農地93町、貸付地24町、農地改革により買収された土地43町とある。昭和27年名寄町に保安隊（後の自衛隊）駐屯地が誘致され、演習地も含め内淵区の天塩川左岸と智恵文丘陵一帯が駐屯地の敷地となった。平地部の駐屯地敷地で7軒、丘陵部の演習地で5軒ほどの農家の立ち退きが必要とされた。関係住民と町との懇談会では駐屯地誘致について、住民は要望を示しつつも協力を申し合わせている。

昭和39年頃からは、同地区に北海道による開拓パイロット事業が導入された。これは土地改良事業による生産性高い農地を目指すもので、給与地による農地も一定の条件の中で譲渡が認められた。全容は不明だが駐屯地敷地の買収による農地減や家庭内の諸事情で給与地の第三者への譲渡がなされている。これにより、内淵給与地は事実上消滅となる。

6、給与地を生きた二人のアイヌ～荒井源次郎「アイヌ人物伝」平成4年（1992）

(1) イアンパヌ (1853年～1924年) 71歳

1853年 日高地方で出生

1877年頃 旭川でアイヌへ物品販売していた和人の夫(鈴木亀藏)の商売を手伝う

和人の妻としてアイヌ相手の商売の通訳、12・3年間に数千円の蓄財

1896年頃 夫と別れ名寄に転居、農業に従事

親のない子を養育する 「美談奇篤のアイヌ」 M40.3. 18 北海タイムス

1916～1924年 アイヌ給与地の農地を守る活動

1924年 天塩川で事故により死去 「名寄老婆溺死」 T13.8.30 北海タイムス

<イアンパヌの生き方> アイヌ→和人の夫に連れ添う→農業と養育に清貧の日々

(2) 北風磯吉 (1880年頃～1969年) 89歳

1880年頃 名寄川沿い(下川町)で出生～アイヌとしての日々、測量案内人

1890年頃 和人行商人に習字、算術を習う

1900年頃 名寄の内淵に転居、農業に従事～給与地申請、農民として生きる決断

1904～5年 日露戦争に従軍、軍功により金鵄勲章(アイヌ従軍63名中3名)

アイヌコタンのカムイに顔向けができないと奮闘、上等兵 M38.4.8 北海タイムス

1906年～53年 名寄の内淵で農業(品評会入賞)、学校用地など寄付、晩年は炭焼き、

昭和26年以降 アイヌ研究者の来訪(テシオアイヌの伝承者として)

1969年 旭川・静和園で死去(16年間聞き取りに応じる)

<北風磯吉の生き方> アイヌ農民→アイヌ軍人→集落の功労者→アイヌ伝承者

(3) 二人のアイヌの生き方から

名寄の内淵にアイヌ給与地に生きた二人の男女のアイヌも、それぞれの人生の大部分を内淵で過ごしている。世代は違う二人だが、明治30年代以降25年ほどにわたり名寄の内淵で農業に従事し、この間、集落の取りまとめやアイヌ給与地の農地を守る活動を共に行ったと思われる。二人とも人生の節目を受け入れ、近代を生き抜いた。

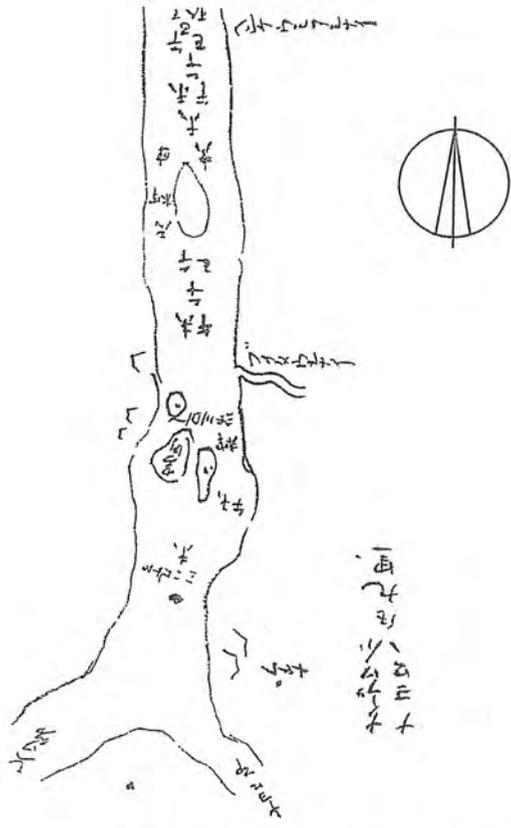
イアンパヌは、旭川で和人の夫の商売を支え、夫の成功後は身を引く形で名寄に移住した。女手ひとつで農業のかたわら、親のない子を養育するなど、その時の境遇を受け入れて懸命に生き抜いた。

北風は、成人前に読み書きを習得し、軍隊では勲章をもらうほどの活躍をした。その後、地区のリーダーとして農業のかたわら、アイヌ文化の伝承者として多くの学者との交流をもった。生涯を通じて、自分の価値観の中でアイヌとして生きた。

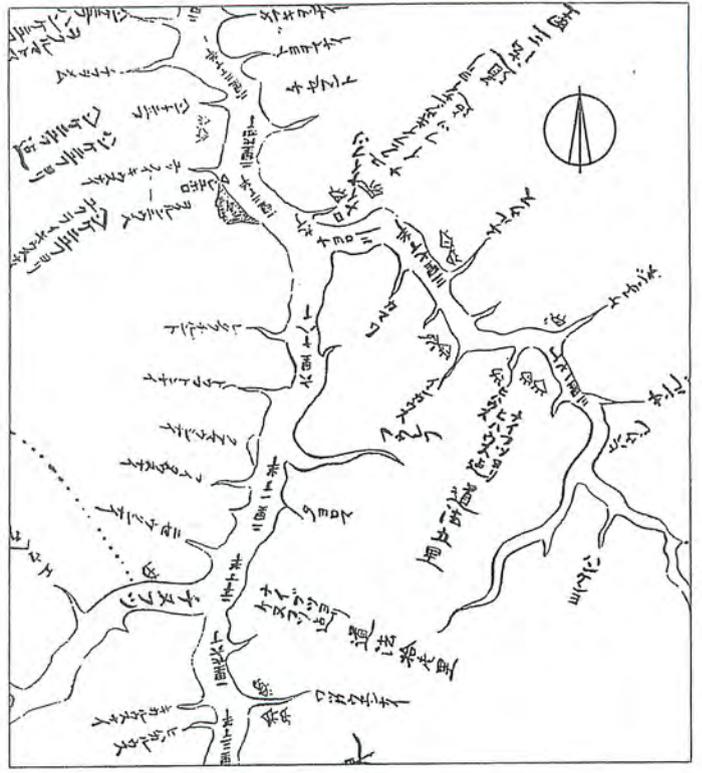
一生懸命生きた姿は、武勇伝や美談として伝えられるが、本人は、その時の価値観と境遇の中で、「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」(より人間的である人間)として、生き抜いたといえる。

19世紀・天塩川筋のコタン戸口一覽

No.	年号	地図名・史料名	コタン位置数	コタン戸数	流域人口
1	文化4年 (1807)	近藤重蔵「天塩川筋図」	35		
2	"	田草川伝次郎「西蝦夷地日記」			229
3	文化・文政期 (1803~29)	「蝦夷雑記」(または「雑記」)	40		214
4	文化14年 (1817)	間宮林蔵「北海道河川図」		12	
5	文政5年 (1822)	松浦武四郎「西蝦夷日誌」<10>		78	418
6	天保年間 (1830~47)	今井八九郎「天塩川筋図」	8		
7	天保15年 (1844)	東西蝦夷地御場所運上金揚り高並夷人人別掟<11>		66	356
8	安政2年 (1855)	松浦武四郎「西蝦夷地日誌」		44	203
9	安政3年 (1856)	窪田子蔵「協和私役」<12>		27	212
10	安政4年 (1857)	松浦武四郎「天之穂日誌」	19	46	230
11	"	玉蟲左太夫「入北記」<13>		62	268
12	安政年間 (1854~59)	江差沖の口役所備付「西蝦夷地場所絵図」	16	35	
13	慶応2年 (1866)	阿部正巳「荘内藩の蝦夷地屯田警備と北蝦夷地警備」<14>			207
14	慶応3年 (1867)	阿部正巳「荘内藩の蝦夷地屯田警備と北蝦夷地警備」			197



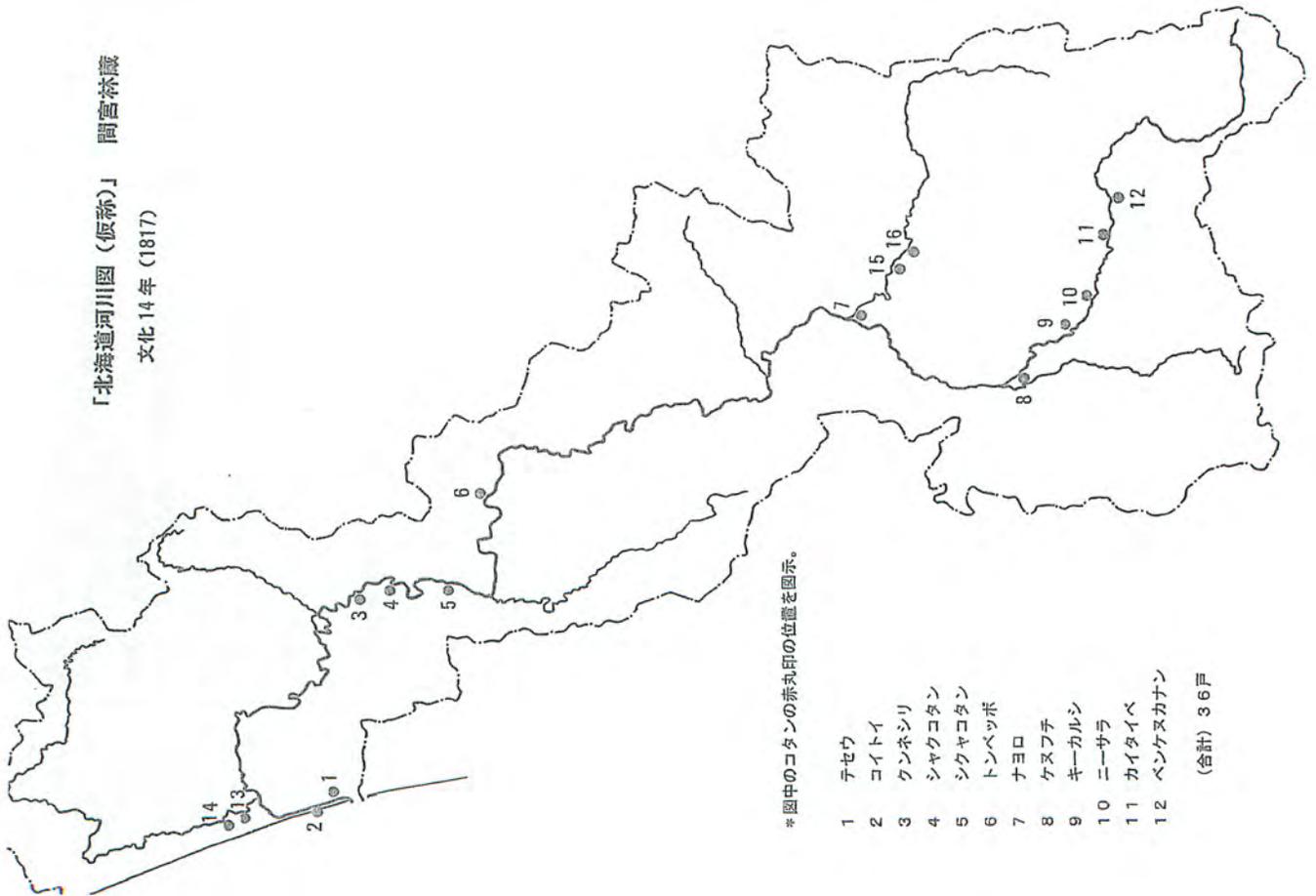
近藤重蔵の「天塩川筋図」(一部)
出典：『近藤重蔵蝦夷地関係史料 三』(1990)



安政頃の名寄付近の絵図
出典：『西蝦夷地場所絵図』の一部、『江差町史 第一巻資料編』

「北海道河川図（仮称）」 間宮林蔵

文化14年(1817)



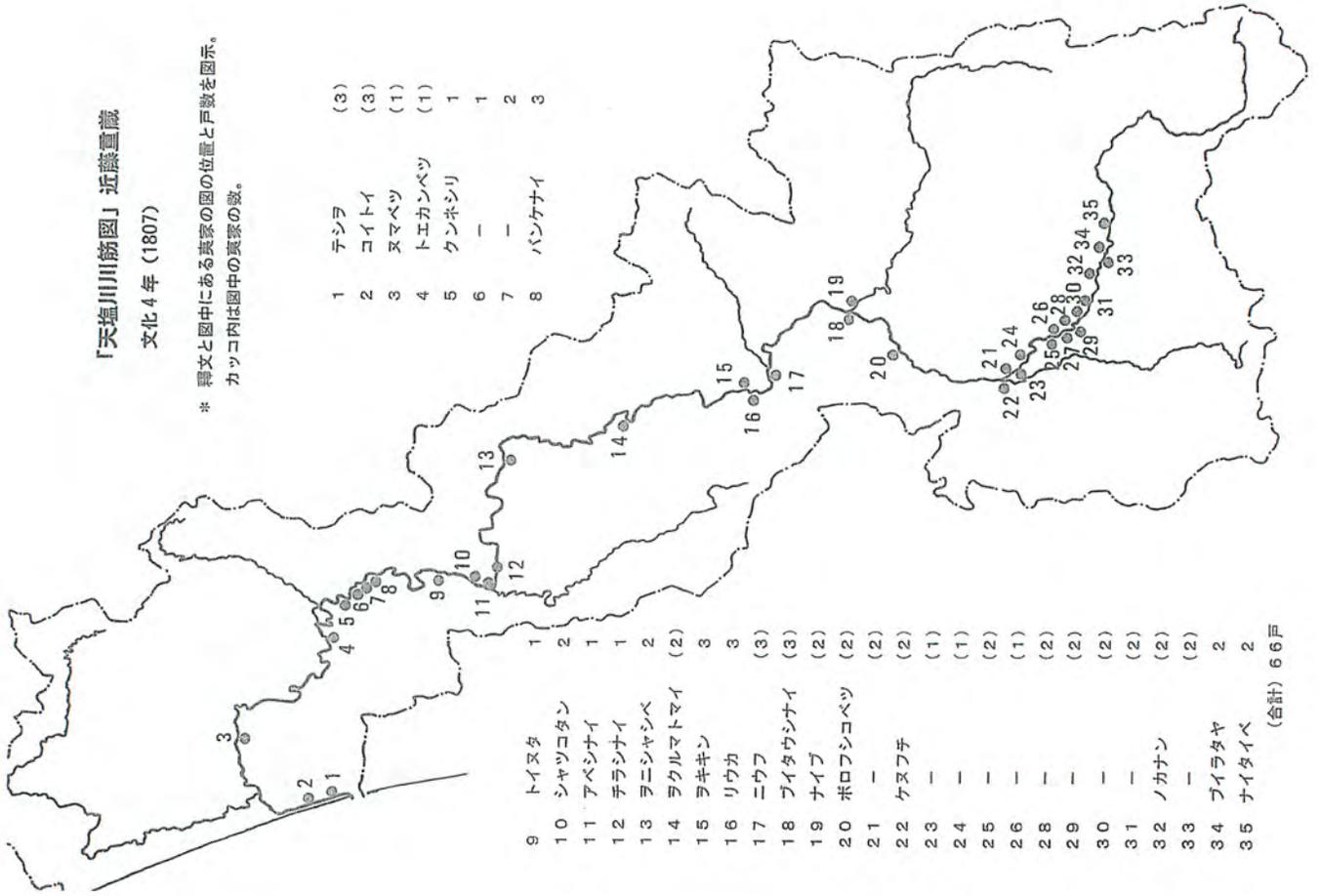
* 図中のコタンの赤丸印の位置を図示。

- 1 テセウ
- 2 コイトイ
- 3 クンホシリ
- 4 シヤクコタン
- 5 シヤクコタン
- 6 トンベツボ
- 7 ナヨロ
- 8 ケヌフチ
- 9 キーカルシ
- 10 ニーサラ
- 11 カイタイベ
- 12 ベンケヌカナン

(合計) 36戸

「天塩川筋図」 近藤重蔵

文化4年(1807)



* 罫文と図中にある黄家の図の位置と戸数を図示。
カッコ内は図中の黄家の数。

- 1 デシラ (3)
- 2 コイトイ (3)
- 3 スマベツ (1)
- 4 トエカンベツ (1)
- 5 クンホシリ 1
- 6 - 1
- 7 - 2
- 8 バンケナイ 3

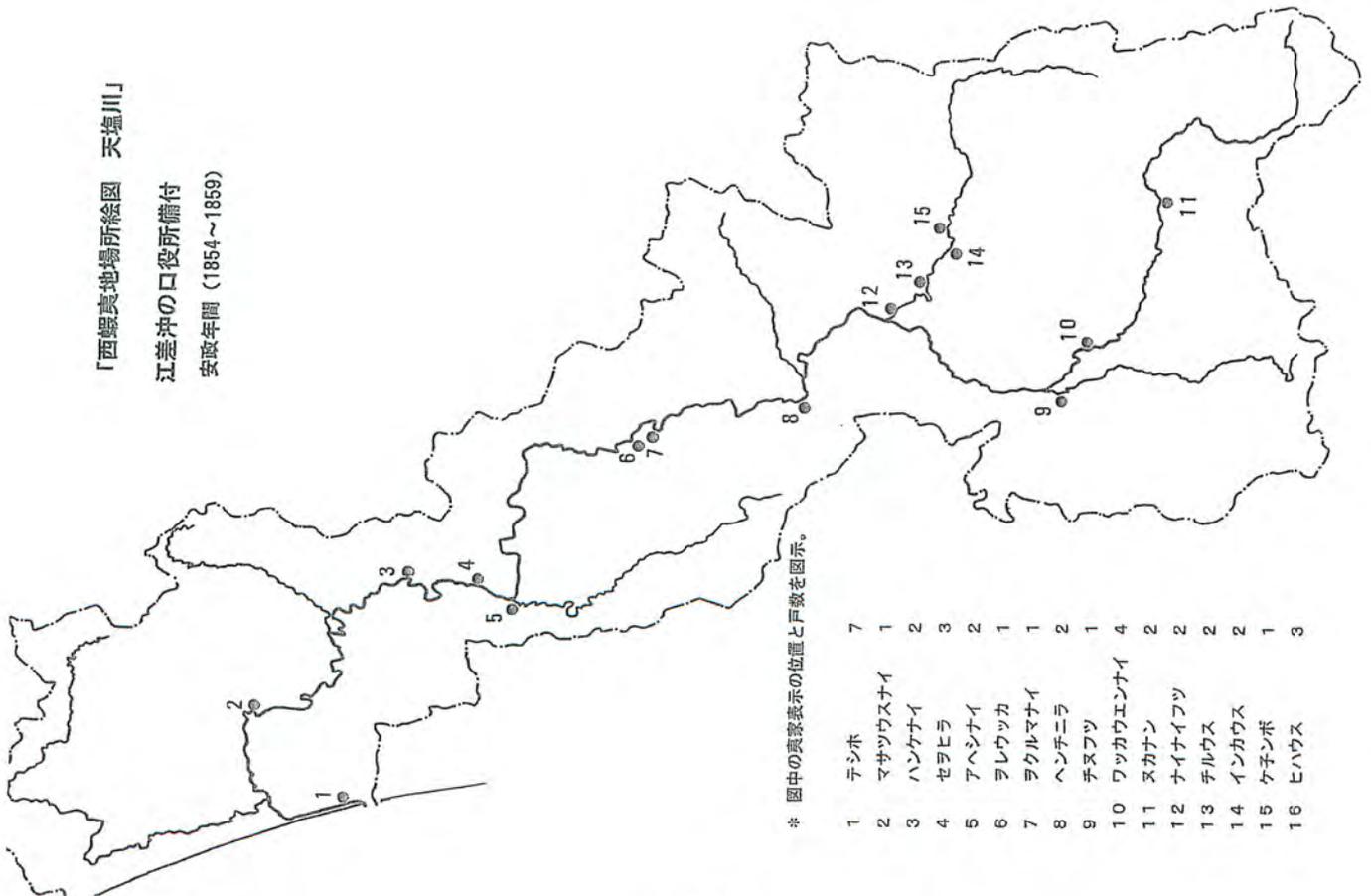
- 9 トイヌタ
- 10 シヤツコタン
- 11 アベシナイ
- 12 テラシナイ
- 13 マニヤシベ
- 14 マクルマトマイ (2)
- 15 マキキ
- 16 リウカ
- 17 ニウフ (3)
- 18 ブイタウシナイ (3)
- 19 ナイブ (2)
- 20 マロフシコベツ (2)
- 21 - (2)
- 22 ケヌフチ (2)
- 23 - (1)
- 24 - (1)
- 25 - (2)
- 26 - (1)
- 28 - (2)
- 29 - (2)
- 30 - (2)
- 31 - (2)
- 32 ノカナン (2)
- 33 - (2)
- 34 ブイラタヤ 2
- 35 ナイタイベ 2

(合計) 66戸

「西線農地場所絵図 天塩川」

江差沖の口役所備付

安政年間 (1854~1859)

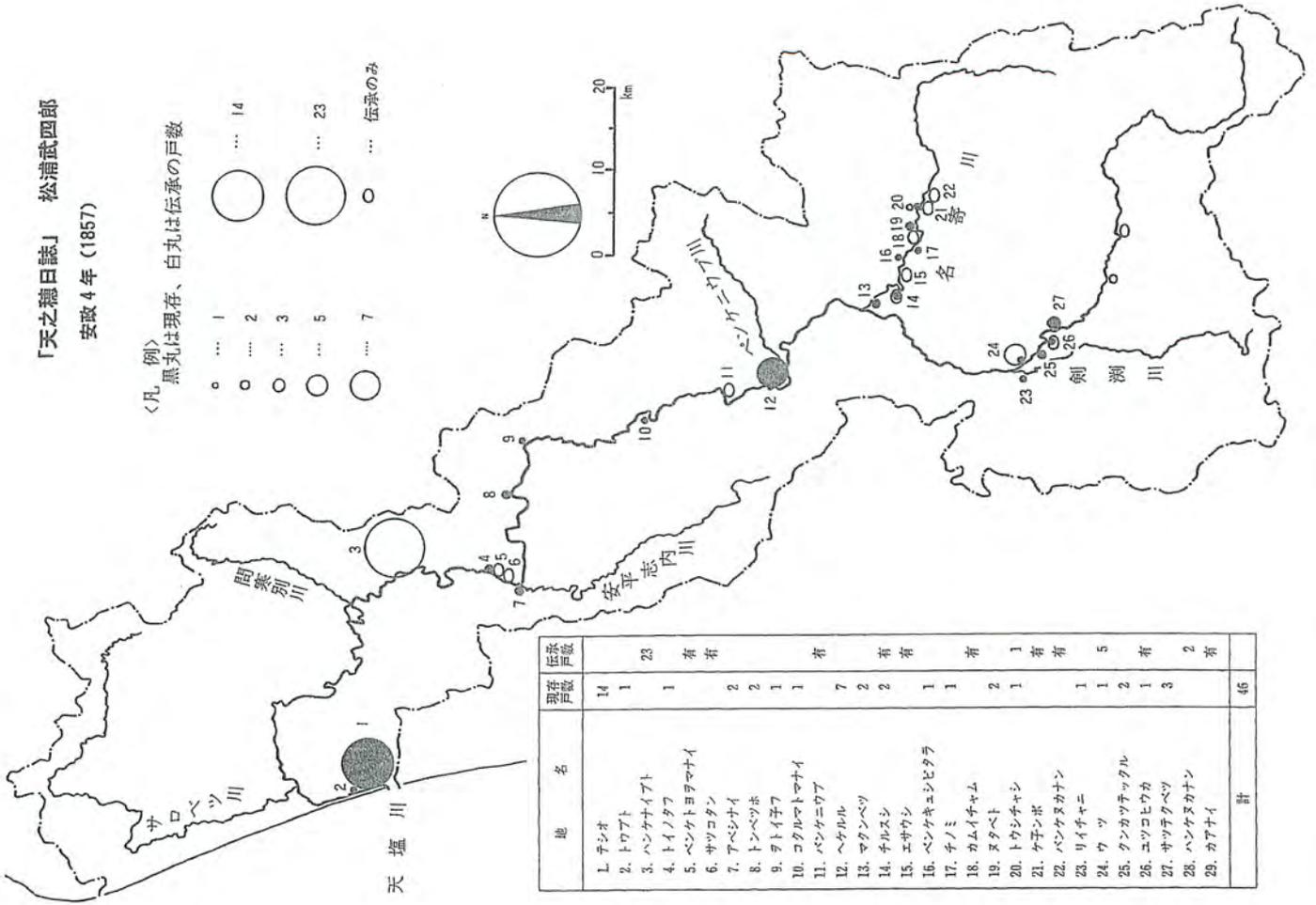
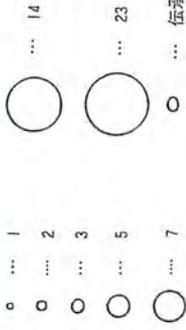


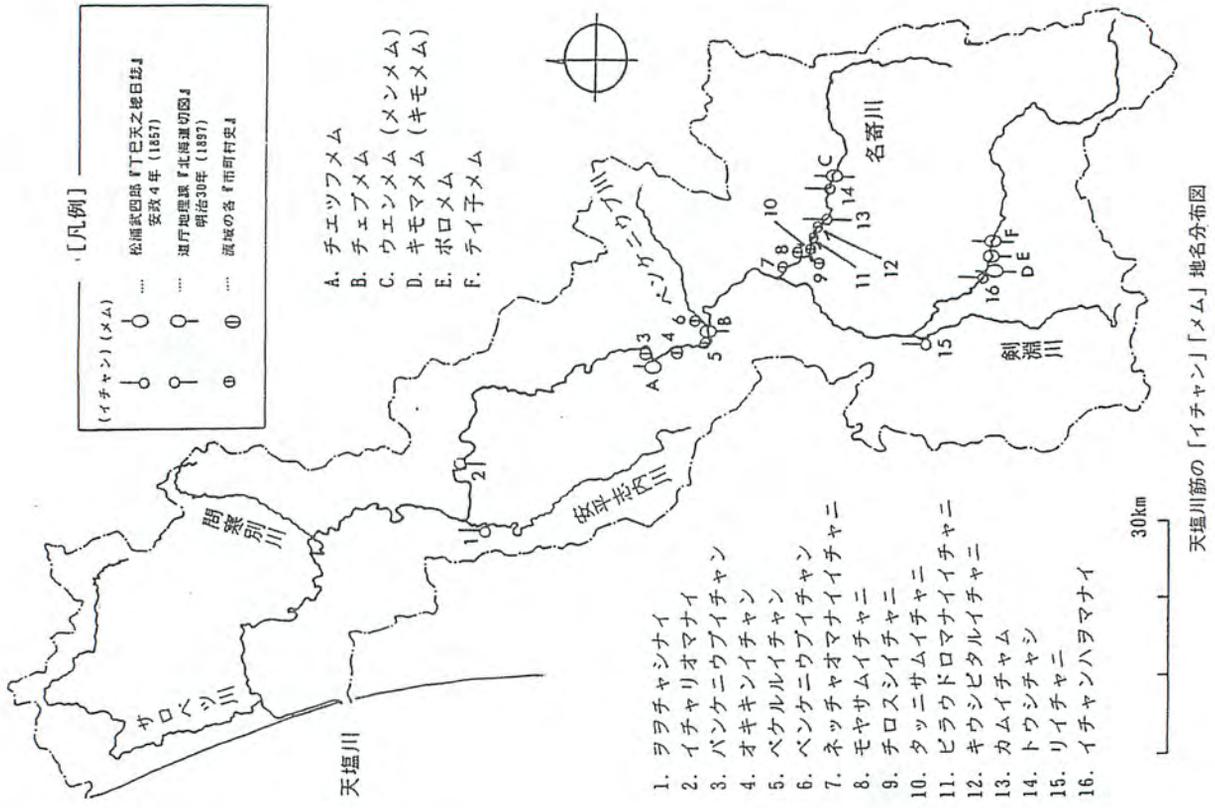
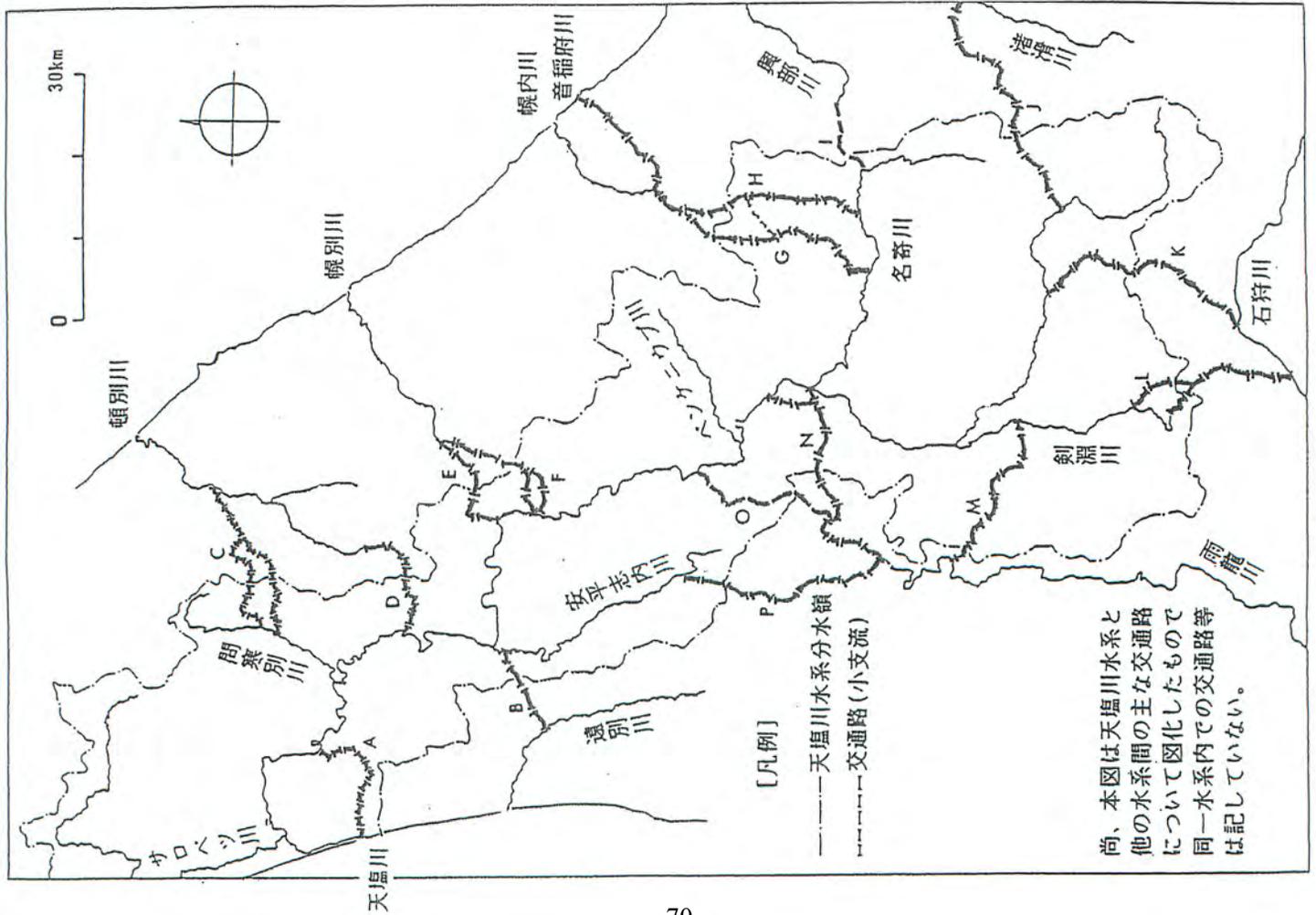
「天之穂日誌」 松浦武四郎

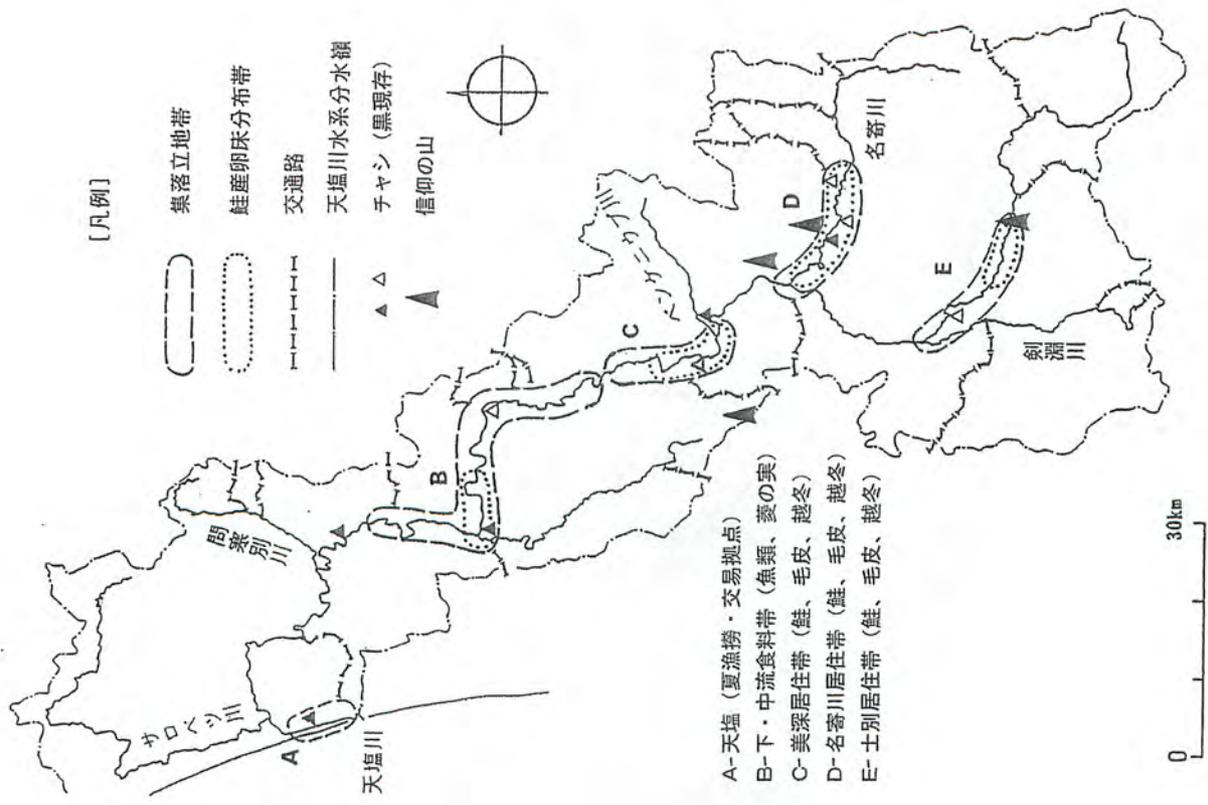
安政4年 (1857)

〈凡 例〉

黒丸は現在、白丸は伝承の戸数

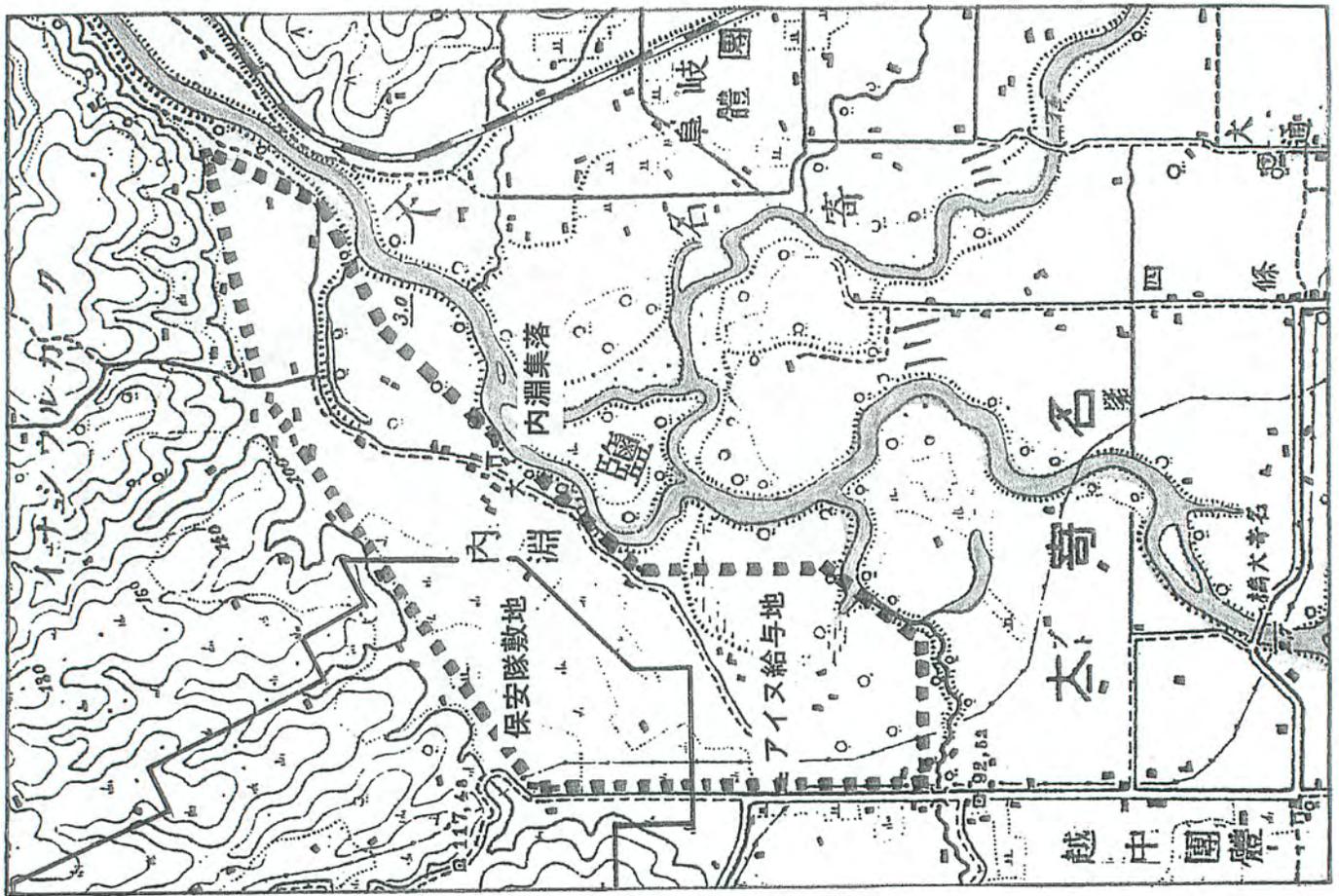






19世紀・天塩川筋の役アイヌ一覧

<年号>	文化4年(1807)	安政4年(1857)	安政4年(1857)	安政6年(1859)	万延元年(1861)	元治元年(1864)
<出典>	西蝦夷地日記	入北記	天之穂日誌	東西蝦夷山川地理取調図	庄内藩鶴ヶ岡ヨリ唐太道明細絵図道中記	
<著者>	田草川伝次郎	玉蟲左太夫	松浦武四郎	松浦武四郎		阿部正巳
<地名> テシヲ	惣乙名 アイカニ 脇乙名 カウランケ 小使 イタクブニ	惣乙名 シカケタ 惣小使 エカシュレ 脇小使 エヌクトイ 御産取 トクメ	惣乙名 アカシコレ 惣小使 エタクトエ		惣乙名 エカシュン 惣小使 トトノフ (ヲニサツベ領) 乙名トセツ (ナヨロ領) 小使 アエリテンカ (シベツ領) 土産取 シクト	惣乙名 エカシュン 上川ナヨロ乙名トセツ 上川シベツ小使 アエリテンカ
中川 (ヲニサツベ)	乙名 イモノクテ 土産取 カンラン		惣乙名 シカケタ			
ナヨロ		乙名 エレンカクシ 小使 エヘヤムシ	乙名 エレンカクシ 小使 エヘカウシ	小使 アベルイカ トキコサン ラフニ イシヨリシテ		
シベツ		乙名 ニシハコロ 小使 アエリテンカ	乙名 ニシハコロ 小使 トセツ 小使 アエリテンカ	酋長 アエリテンガ 小使 トセツ		
ケ子ブチ				酋長 ニジバコロ イシヨラン トカセチユ		



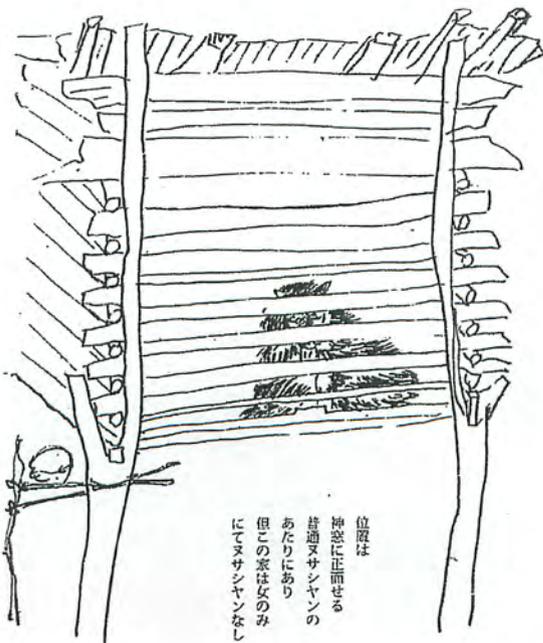
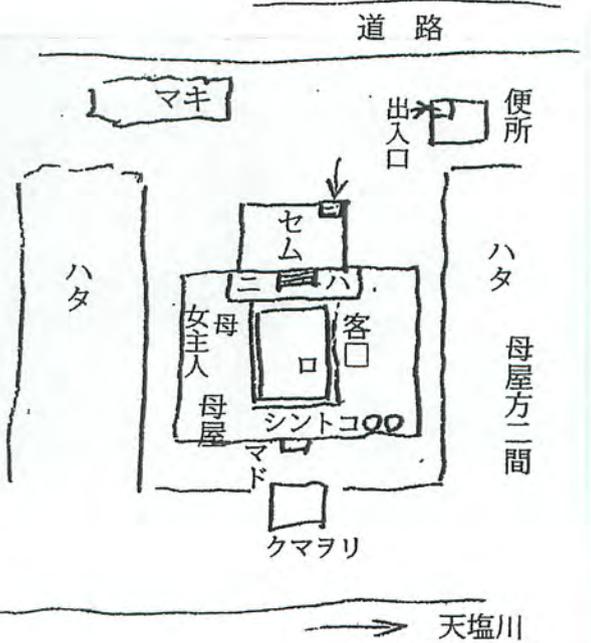
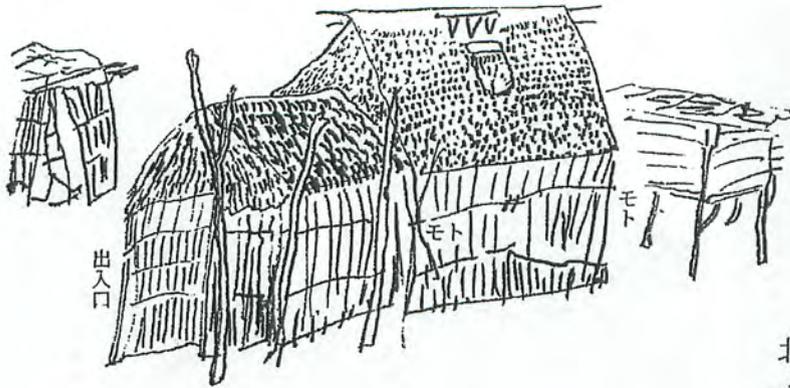
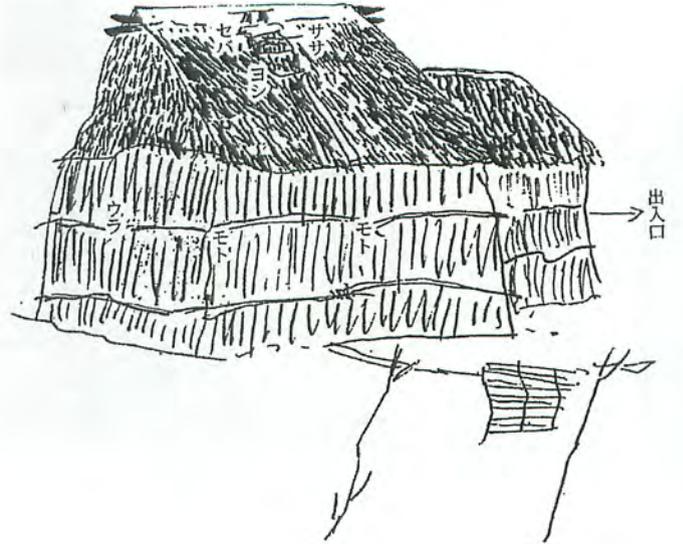
内淵給与地周辺図（大正期の地図を改変）

天塩上川郡・名寄町のアイヌ戸口変遷

(単位：名)

年	戸数	人口			年	戸数	人口		
		男	女	計			男	女	計
明治30年	8	19	11	30	大正10年	48	76	83	159
31年	8	17	17	34	11	40	87	96	183
34年	8	13	16	29	12	40	76	78	154
35年	9	13	16	29	13	32	70	65	135
36年	9	15	13	28	14	33	73	67	140
37年	10	19	14	33	昭和元	31	71	74	145
38年	14	22	18	40	2	32	77	77	154
39年	12	20	19	39	3	30	74	75	149
40年	12	19	23	42	4	31	81	78	159
41年	20	29	23	52	5	31	82	76	158
42年	19	30	24	54	6	32	88	82	170
43年	23	26	33	59	7	33	87	86	173
44年	22	27	32	59	8	35	90	87	177
大正元年	27	44	29	73	9	38	92	107	199
2年	38	53	53	106	10	39	94	109	203
3年	38	55	55	110	11	40	101	133	234
4年	55	69	79	148	12	38	93	113	206
5年	49	73	78	151	13	37	100	121	221
6年	49	74	75	149	14	37	102	123	225
7年	49	67	78	145	15	37	90	111	201
8年	49	88	79	167	16	37	90	111	201
9年	51	81	89	170	17	38	98	131	229

出典：明治、大正期間は『北海道庁統計書』より、昭和年間は『町勢要覧』『北海道旧土人概況』『北海道統計』道庁社会課資料より作成。明治36年以前は中川村より上流の合計、同37年以降大正年間までは名寄と土別の合計。

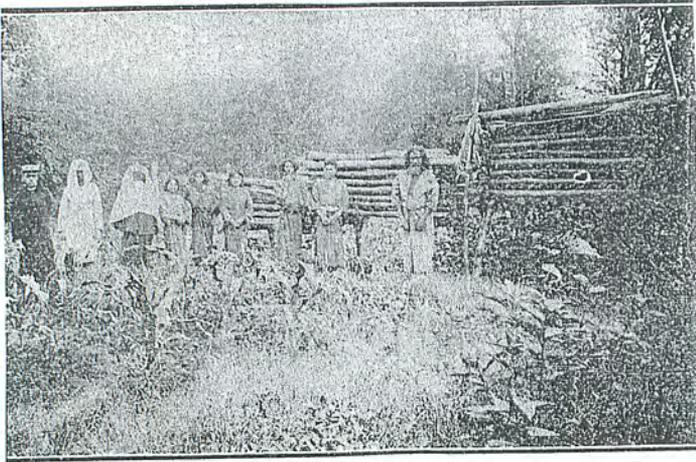


位置は
神窓に正而せる
普通ササシヤンの
あたりにあり
但この家は女のみ
にてヌサシヤンなし

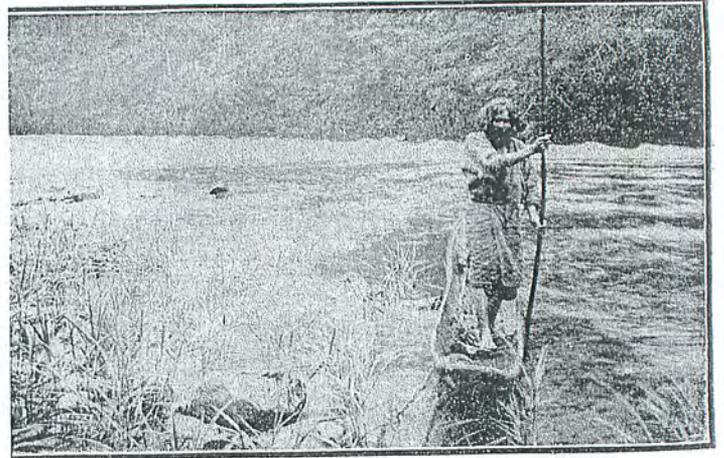


内淵給与地の建物スケッチ

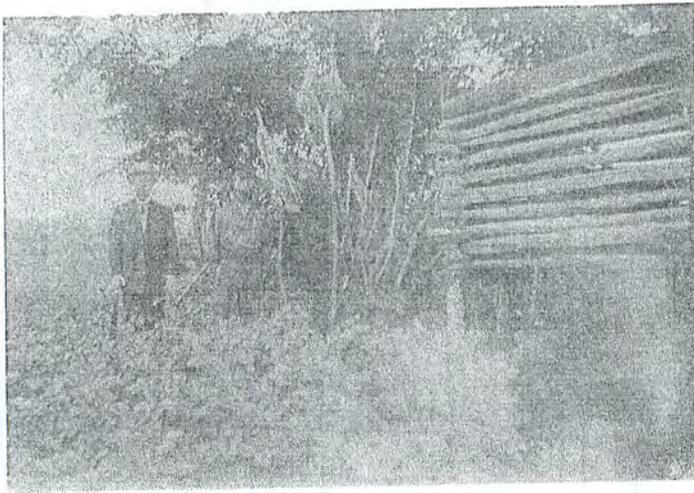
(吉田 巖「大正十年研究旅行日誌」帯広叢書刊行会 2016)



アベシナイのアイヌと熊小屋 (明治 31 年)



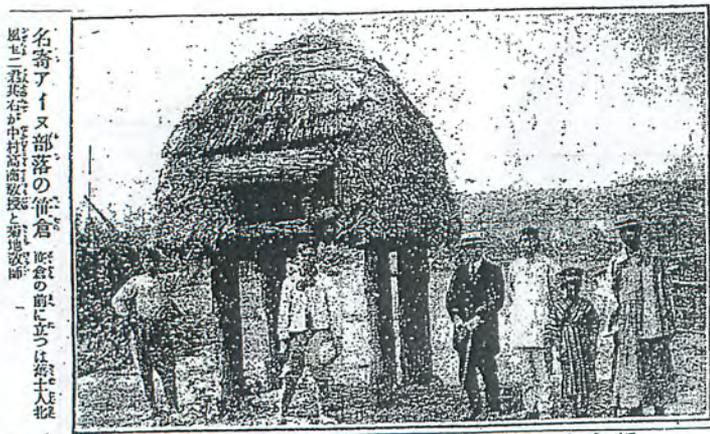
スーポロのアイヌと丸木舟 (明治 31 年)



シベツのアイヌのヌサ場と熊小屋 (大正 2 年)



内淵給与地のチセとアイヌ (大正 7 年)



内淵給与地の食料庫 (大正 10 年)



北風磯吉とヌサ場 (昭和 20 年代)

(4) 調査報告 チャシから見えてくる道北アイヌの生活

—中川町でのチャシ発掘調査より—

氏江 敏文（日本考古学協会員）

1. はじめに

皆さまこんにちは。氏江でございます。私に与えられました時間は30分ということでございますので、かなり駆け足でご紹介をさせていただきます。今日、本当は中川の疋田さんと合同で皆さまにご紹介をするべきと思ったのでありますが、平成23年度と26年度の2カ年にわたりまして「チャシ跡」の測量と試掘のお手伝いをさせていただいたという経過があり、その結果に基づきまして、既に中川町さんから刊行された報告書の中から写真を中心にご紹介してまいります。

私事ではありますが、去年の12月の末まで浜頓別町の「ブタウス」という遺跡を4年間かけて発掘をしていました。その後引き続き、2カ年かけて報告書の作成をしていました。年明けの1月に1200ページの報告書を刊行して先般お配りをしたところです。即ち6年間発掘調査に関係しておりました。私の立場は、札幌に本社がある（株）シン技術コンサルの文化財調査部に所属いたしまして、そこからの派遣ということでした。今日もこの会場には本社の次長がみえております。

ブタウス遺跡の発掘調査を行いながら、その間で中川町のお手伝いをさせていただいた訳であります。今月の1日でちょうど70歳になりました。よって定年退職後は、ずっと遺跡に関わっているという生活でございます。間もなく私自身が遺跡になるだろうと思っておりますが、まだしばらくは元気であるつもりです。我が（株）シン技術コンサルは、遺跡発掘、航空写真、測量その他もろもろ幅広くお手伝いができるノウハウを持ってございますので、何かありましたら、いつでもご用命をいただきたいと思っております。初めから少々コマースのようなことで申し訳ございません。

本日、私に与えられましたテーマは「チャシから見えてくる道北アイヌの生活」ということでありますが、これはもう大変大きな課題でございます。学界の大テーマでもあります。北海道はもちろん東北アジア史といえますか、北方史の中でも大きな命題でございます。そのような大きなテーマを私が、しかも養島先生の前で言及するのは、大変おこがましいことでもあります。したがって先ほど申し上げましたように、中川町での「チャシ跡」の発掘調査に限ってご紹介をさせていただくということでお許しをいただきたいと思っております。

2. アイヌの「チャシ」

(1) 「チャシ」の名称

それではパワーポイントでスライドを中心にご覧いただきますが、これまでの中川町さんの「チャシ跡」をはじめとする一連の調査は、先ほど申し上げましたように、この大テーマに対しまして真っ向から取り組んでいくという姿勢でございます。

測量、試掘、さまざまな分析を含めまして、天塩川流域では初めての取り組みでありました。そして大きな成果を得られたものであります。まずは中川町さんの取り組みに深く敬意を表したいと思っておりますし、事業の中心となったエコミュージアムセンターの疋田 Dr. の熱意にも深く敬意

を表したいと思います。

試掘で実際に掘った面積は少ないのですが、ピンスポットのいろいろな物に当たりまして、往時の道北のアイヌの人達の様々な文化を考える上では今後の指標になるものと思います。極めて大きな成果だったと評価できます。疋田さんには重ねて敬意を表します。

「チャシ跡」については先ほどお話しされた鈴木さんの専門分野でございまして、私がまた鈴木さんの前で「チャシ跡」を語るのは非常におこがましいことでもあります。

「チャシ」というものについては、一般のある人から「海にいるあの大きなヤツですよ」と言われたことがありました。「それはシャチのことですよ」と説明しましたが、このようにごく一般の方々の中では「チャシ」については馴染みの薄い事例だと思います。

それでは「チャシ」とはいったい何かということでございます（資料1ページ）。「チャシ」とか「チャシコッ」というアイヌ語であります。「コッ」というのは「跡」という意味があります。ですから「チャシコッ」とは「チャシの跡」となります。

これらはアイヌの人たちが作った「構築物」でありますから、今は「遺跡」なのであります。いうまでもなく今は既に機能していないものです。当時は機能していた訳ですから「チャシ」でよかったのですが、そのような意味で今は「チャシ跡」と呼称すべきですし、そうした視点が大切です。ところが先述のように「チャシコッ」という地名もあります。これはアイヌの人達の中でも既に「チャシの跡」、即ち「機能していないチャシの跡」という認識がされていたものも存在していたと考えることができます。このことは当時の「チャシ」が機能していた年代にも時間的な幅があったことを物語っております。

（2）「チャシ」の意味と機能・性格

それでは実際にその「チャシ跡」とはどのようなものか、ということについてであります。所謂蝦夷地、北海道を中心に展開したアイヌが、コタンや経済圏の中で、丘陵の先端や崖や独立丘などの自然地形を利用して、大きな壕（溝）を掘ったり整地をしたり土盛りなど、即ち土木工事をして構築した施設なのであります。しかしこれでは抽象的で曖昧です。

そこで次には、その「チャシ」の意味というものをアイヌ語の中ではどのように捉えられていたか、をみてみますと「柵で囲った所」とか「われわれが建てたもの」という意味があります。しかしこれでもまだ抽象的です。そこで今度はその機能、即ちどのような機能を持っていたか、という観点から見てみます。実はいろいろな機能があったようです。時には「城」、あるいは「砦」、「英雄（神）の居住地」、「交通の要衝」、「漁場などの見張り場」、「会議をするところ」「神聖な場所」等々があったようです。この内「英雄（神）の居住地」や「神聖な場所」などは精神性の高い機能があったと思われます。総体的にはコタンや経済圏の中で、その集団の「コミュニティーセンター」的な役割を持っていたとも言えます。

しかしまた一方では、アイヌ文化期のものといえども「チャシ」の出自や存続年代についてはいろいろな議論もあります。その期間の中での何時の時期か、また地域・場所などによる性質の差異という問題もあります。包括的に申しますと蝦夷地を取り巻く時代背景、または集団を取り巻く社会的背景によって機能や形状は違っていたのではないかと、というのが最近の議論でも

あります。道北地方においても海岸部や内陸部、そして時期、場所、時代背景によって異なる、という視点です。即ち「多目的」な施設であり、全部をまとめて「これだけ」という特定の機能を持った構築物ではなさそうだ、というのが最近の議論でもあります。

(3)「チャシ跡」の年代

これらの「チャシ」は、おおむね 16 世紀から 18 世紀末に多く構築されていると言われております。ではこの期間の蝦夷地はどんな時代背景があったのか、という大きな疑問が出てまいります。また近年、その初源は 15 世紀以前、考古学的には 12 世紀にまで遡るのでは、という議論も出ております。先ほどの養島先生のお話の中にもそういったことがありましたが、まだ今日の段階では決定されておられません。チャシ研究の分野では、今後積極的な発掘調査や出土遺物からの検証が必要になってくると思います。

(4)「チャシ跡」の数

これら「チャシ跡」の数、遺跡数は現在北海道では 563 ヶ所とされています。北海道教育委員会に登録されている数は 506 ヶ所になっておりますが、既に破壊されて無くなっていたり、未発見のものもあるはずなので、研究者によっては 1000 ヶ所くらいは存在するのではなかろうか、という説もあります。実際に昨年、浜頓別町域では全く新しく立派な「チャシ跡」が発見されております。

これらの内、天塩川流域では現在 14 カ所、しかし、そのうち士別市、下川町のものは既に現存しておりません。測量調査が行われたものは 6 カ所であります。「智恵文チャシ跡」、「オフイチャシ跡」、「アベシナイ共和チャシ跡」、「音類 1 号」、同「2 号」、「ワッカサクナイチャシ跡」です。この内、試掘が行われたのは中川町の「オフイチャシ跡」と下川町の「上名寄チャシ跡」です。下川町の「上名寄チャシ跡」の試掘、測量のお手伝いもさせていただきましたが、どうやらあそこはもうすでに破壊されており、現存しておりません。

(5)「チャシ跡」の立地

それでは具体的にこれらの「チャシ跡」とはどんなものかをスライドでご覧いただきます。

これは中川町にある「オフイチャシ跡」です（資料：写真 1）。ドローンで撮っておりますのでレンズの関係で少しゆがんでおります。黄色い線で示してあります。国道の路肩からの全長が約 100m です。高さが約 40m。幅は約 50m という規模でございます。積雪で白く見える所、ここが「チャシ跡」でございます。急斜面を上って、少し平らな所に一段目、また急激に上って、この突端の頂上が「チャシ跡」の本体部であります。この赤い丸の所に車が停まっているところの人影と比較して見てください。これが「オフイチャシ跡」です。安平志内川が画面の左から右に流れていまして、この辺りに天塩川との合流点があります。この辺りが佐久市街で、右の方が中川町の街区方向です。左のこちらのほうが音威子府、美深、名寄方面で天塩川の上流方向です。この合流点に突き出た自然丘陵の上に「チャシ」が構築をされたものです。

他の例では、これは雄武町にあります「リーチャシ跡」（資料：写真 2）で、アイヌ語で「高いチャシ」という意識があります。幌内川がこう流れ、少し下流で U ターンしてこの急崖の向こう側を流れております。この高さが約 30m で、V 字状に切れ上がった崖の向こう側に、弧状の壕が

掘られております。この丘陵全体は約 250mあります。画像では傾斜のきつい急斜面に見えますが、場所によっては殆ど垂直な崖になっています。足を滑らせると転がらずに真下に落下してしまう程の崖になっています。この辺りは多少崩壊している可能性もあるのですが、このような自然地形を利用したのが「チャシ跡」であります。この雄武町の「リーチャシ跡」は丘陵全体が岩盤になっております。この岩盤を掘って2本の壕が向かい合うように掘られております。深さは1.5mから2.0m、幅は最大で3.0mほどあります。何故ここまでして固い岩盤を掘る必要があったのかと思ってしまう。この姿こそが「チャシ」というものに対する執拗な構築意欲とその必要性が背景にあったからでありましょうが、その「精神」は考古学的には分かりません。しかし大きな「目的と意思」があったからこそ、とまでは言えます。

それでは再び中川町の「オフイチャシ跡」に戻ります。報告書からのコピーなので少し分かりづらいたと思いますが、中川町の佐久地区の天塩川と安平志内川の合流点、この丘陵の突端に「オフイチャシ跡」が存在しています（資料：第1図）。

この写真は、反対のほうからの航空写真ですが（資料：写真3）、赤く丸をしてあるところが「オフイチャシ跡」でございます。皆さんも一度はお通りになったと思いますが、国道40号線がこの「オフイチャシ跡」の裾ギリギリを通過しており、安平志内川を渡ってカーブして佐久市街、足田さんの博物館はこの辺りでしょうか。これが位置関係です。

3. 「オフイチャシ跡」の調査

（1）調査の目的と経過

さて、この「オフイチャシ跡」の調査目的でございますが、資料2ページの①と②に書いてございます。「オフイチャシ跡」調査の1番目の大きな目的は、「オフイチャシ跡」の保存を目的といたしまして基礎調査、測量、試掘を行い、その学術的情報に基づいて中川町、北海道、それからアイヌ民族の歴史を学ぶための教育的文化資源として活用を図るというものです。2番目は「オフイチャシ跡」周辺でのアイヌ民族の展開と、「オフイチャシ跡」構築の背景にある「アベシナイコタン」の存在場所の確認。これらを目的として「チャシ跡」周辺の詳細な地形測量と試掘を行い、天塩川流域でのアイヌ社会とその具体的な姿を追求する、というものです。先ほど申し上げましたように、「チャシ」究明という大テーマへの真っ向からの取り組みということでございます。調査期間と経過、内容と方法につきましては3番目にございます。これは平成23年度の部、それから平成26年度の部の二つがあります。

まず、「オフイチャシ跡」の測量、試掘調査です。平成23年度は、「チャシ跡」全体の笹刈り、それから測量、写真、壕および平坦面にトレンチを設定し、テストピットも含めまして試掘調査を行いました。並行いたしまして「安平志内川右岸遺跡」の試掘調査も行われました。

「安平志内川右岸遺跡」といいますのは、この「オフイチャシ跡」の裾に三角形に広がっている河岸に位置しています（写真3）。平成23年度の調査の時、ちょうど天塩川の河川改修に伴う事前調査が行われました。三角形の河岸のところ。ここからはアイヌ期の「もの送り場遺構」と言われているものが検出されました。これについては後ほどご覧いただきます。

この写真は1年目、平成23年度の時の「オフイチャシ跡」先端部分の下の方から頂上の方を見たところです(資料:写真4・上)。この右側の方が安平志内川方向。左側の方が天塩川方向になります。「チャシ跡」全体は私の親指ほどの太さの笹が密生しており、5mほど離れたらそちらにいる人は見えません。調査は先ずこの笹を全部刈り取る作業から始まりました。尾根筋は大変狭く一番狭いところでは4mぐらいの幅しかありません。両側は急斜面になっています。これらの笹を2回に分けて刈るのでありますが、1回目は茎が斜めに切れてしまうので竹槍状態のものが全面に出てしまいます。それを再度地面すれすれのところまで刈ります。これを“地刈り”と言います。このように刈り取りますと微地形もはっきりと出てまいります。この段階から漸く測量に取りかかります。

次は2年目の平成26年度ですが、便宜的にⅠ区とⅡ区とに分けて調査をしました。国道を挟んで天塩川側がⅠ区、安平志内川側がⅡ区ということでございます。この写真はⅠ区の試掘状況であります(資料:写真5)。ここに見えるのは旧国道40号線の古い路側です。今の国道はこの「オフイチャシ跡」の先端の河岸を通過しております。旧国道はここをカーブした所を通過していました。この矢印の深さは約1.5mあるのですが、これは全部旧国道の盛り土なのです。しかも全部砂利です。全体が固く締まっております。こういう所にあるので作業用の階段をつけて調査をしております。

これはⅡ区の状況です(資料:写真6)。結果的にⅡ区の方からは何も出ませんでした。開拓期以降の“おはじき”、壊れたガラス類の破片が少し出土しただけです。したがって2カ年度にわたる調査では、Ⅰ区の各トレンチからと「オフイチャシ跡」の裾野あった「もの送り場遺構」が、この周辺でのアイヌの人々の展開の姿を物語っているというものです。

(2)「オフイチャシ跡」の構造

資料3ページには「オフイチャシ跡」の構造を解説してございます(資料:第2図)。赤で囲った部分が「チャシ跡」であります。その一番高い所に、こういうふうに壕を回してあります。そこからこちらの方に1本あって、この辺りが一番高く、下の方に向かって掘り上げた土は土盛りの状態になっています。こちらの方にも土盛りが見えます。ここが現在の国道40号線であります。北がこちらです。ここから急斜面を上がって1段目、こちらが2段目で一端地形の区切りとなっています。そして3段目、4段目へと連なります。

ここが一番高いところなのですが、ここにメイントレンチを入れました。これは“橋状遺構”と言われているものです。3ページに少し小さいですが“橋状遺構”の図があります(資料:写真7)。アイヌ語では「レイカ」と呼ばれており、それらを“レイカ構造”とも言っております。この“橋状”の“レイカ構造”の構築は、壕を掘った後で土盛りしたり、壕を掘るときその部分だけ掘り残したり、色々あるようです。「オフイチャシ跡」ではここを発掘していませんので詳しくは分かりません。機能としては“一朝有事”の時は、ここを渡って待避したり、または周りに柵などを巡らして防御機能を持たせるなど、色々あるようです。

報告書にも書きましたが、この“橋状遺構”とつながっている、この平坦面では色々な儀式が執り行われたと思います。もちろん“一朝有事”の時にはここを通ると思います。しかしその

山側は45度ぐらいの急斜面なので、もしこの「チャシ跡」が戦闘機能を有して戦いの場面が発生した場合、こういう所を通ろうとすると壁のような斜面にブチ当たる状態なのです。これではあまり機能的とは思えません。

北海道の「チャシ跡」遺跡には、こうした“橋状遺構”、即ち“レイカ構造”を持つものが沢山あります。それらにはもちろん戦闘機能を有するものもあったのですが、私はむしろ精神性の高いものであった可能性が大きいのではないかと考えています。それは、アイヌの世界観には数々の神々があって、儀式に際してそうした神様が通る道としての機能を考えています。

先ほどの雄武町の「リーチャシ跡」もそうなのですが、ああいう所に柵を巡らせて立て籠もると、逆に“袋のネズミ”になってしまうのです。「オフイチャシ跡」では、その裏付けとなる痕跡は見つかりませんでした。そういう可能性も考えておく必要があることを報告書にも書いておきました。また雄武町のあの「リーチャシ跡」の急斜面には黒曜石の破片が沢山落ちていました。遠軽町のガン望岩の「チャシ跡」にも途中の斜面に黒曜石が落ちており、それらも何かの儀式に関係した同じような性質ではなからうか、と考えられます。

再び「オフイチャシ跡」の構造です。今、調査をしている最中のものです。一番高い所からトレンチを入れて掘っているところです。ここが壕の位置です。このように弧状に回っております。中央が高場になっており、後で写真をご覧くださいますが、ここに1本、小さな溝を回している可能性があります。掘ったのはこれしかないで何とも言えませんが。

これは角度を変えて見たトレンチの調査状況です(写真8)。このように少し曲がっております。それから、これは上の方から見たところです。ここに見える白い所は天塩川ですね。壕2から見ております。斜面に向かって土堤のように造ってあります。下の方に、ちょっとした段差があります。これが壕の2です。

ここに土塁があって手前の、この辺りから壕1、壕2。ここで曲がって一周しております。規模などはここに書いてありますが、壕1で35m、幅3mぐらいですね。壕2が15m、壕3が10m程度です。丘陵全体では大きなものと言えますが、主体部としては一般的な規模と言えます。

これは壕1の断面です(写真9)。「オフイチャシ跡」は自然の土砂崩れで出来た地滑りの溝を利用して、さらにそこを掘って壕を造っている、という特殊な構造であります。

それでは次に「オフイチャシ跡」の構築年代について見てみます。

この黄色い丸の真ん中に白い矢印がたくさん見えますが、この辺はかすかに土質が違います(写真9)。これは「チャシ」が放棄された後に、掘られた壕の窪みに堆積した土層なのですね。この白くなっている部分は、上の斜面が崩れてきた土砂崩れの堆積層ですが、この境目を点線で結んだのが下の写真です。このように掘られたものです。

ここに矢印が見えますが、これは樽前山が1739年に噴火した時に噴出した火山灰です。点々とブロック状に堆積しております。これを分析した結果、“樽前a火山灰”である、ということが分かりました。ということは、1739年の樽前a火山灰が降灰する前にこの壕が掘られているということです。噴火の影響はここまで及んでいたことが分かります。そして「チャシ」の年代の一つの決め手になるわけです。ではその1739年以前の何年に掘られたのかということですが、これは

まだ分かりません。一つの目安として大きな年代特定のカギになるということです。即ち「オフイチャシ跡」は18世紀初頭以前のものであることが明らかになったわけです。

天塩川流域では、また道北ではしっかりと一定の構築年代に迫れるデータは、この「オフイチャシ跡」と枝幸の「ウバトマナイチャシ跡」だけです。これは非常に大きな成果だったと言えます。

次に、この横の方の写真（写真10）は先ほど少し触れましたが、所謂主体部の中にもう一本、浅い溝が回っている可能性があります。その幅約35cmで深さが訳15cmです。「チャシ」に伴う付帯設備の可能性があります。上の写真で言いますと、ここがほんのり黒くなっています。どうでしょうか、お分かりになれるでしょうか。これは地山の自然礫です。少し黒いこの部分をアイヌの人達が掘ったものと思われます。この人工的な溝の中に違う土層が堆積をしているのでそこが黒く変色しています。ですから黒い所を掘っていくと、地山、即ちアイヌの人達によって掘られた溝の底が出てきます。断面はU字型になっていますね。ここに違う土層が入っているという状況から、これは人工的な付帯設備と考えてよいということでもあります。

次は「もの送り場遺構」です。資料4ページでございますが、平成23年度の試掘調査の時の結果です。たくさんの方が掘っています。5m×5mぐらいですね。この範囲から出土したものです。右が天塩川方向で、壁のように見えるのが国道40号線の法面であります（写真11）。蒼々たる考古学研究者がここに来て調査を行いました。こちらの方にも旭川の大御所も何人かいらっしゃいます。出土物といたしましては、ガラスの青玉、それから赤漆の膜片、コイル状鉄製品、鉄釘、カワシンジュガイ殻皮などです。板状礫、硅化岩、それから小さな礫、炭化材もあります。放射性炭素による年代測定では、概ね18世紀の後半ぐらいの値が出ております。

これは「貧乏徳利」ですが、大体江戸末期から明治初期ぐらいのもので、誰がここに持ってきたのかは分かりません。カワシンジュガイの殻皮、これも道具であった可能性があります。

ガラス青玉、これは「タマサイ」という女性の首飾りの一部のもので、「送り場」とは、こういうものも神の国へ送った場所なのです。これらは和人と交易でアイヌ社会へ持ちこまれたもので、その当時の物流の仕組みがここにもあったということです。

（3）「安平志内川右岸遺跡」

①平成26年度の調査

ここからは「安平志内川右岸遺跡」の試掘調査の紹介でございますが、ちょっと時間が押ししてしまいましたので、写真を中心にご覧をいただきたいと思います。

これは第3トレンチなのですが、クマの骨です。それから尺骨、脛骨です。そしてここに頭蓋骨、その他が出てきております（写真14、15、）。

これは縄文時代の晩期か続縄文時代と思われるのですが、土器片と石器も出てきています。ここに黒く見える地層が遺物包含層でありまして、その時代の「文化層」です（写真13）。この赤い線がその「文化層」との境であります。この縄文時代か続縄文時代の「文化層」ギリギリの上の位置から出土しておりますので、層位的にみてそれらの直後にクマの骨類がここに置かれたもので、時間的新旧関係の裏付けとなります。

これは第4トレンチからのクマの指の骨です。それからこれは頭蓋骨の一部です。穿孔されていますが、頭蓋骨の穿孔は、オスは左側から、メスは右側からという厳格な決まりがあります。これは大体4歳ぐらいのクマという同定がなされています。これはその裏表であります。ここに頭蓋骨を削って穴をあけた刃物の痕が見えます。多分マキリで削ったものでしょう。左側なのでオスということです。これは尺骨ですが、ここにもはっきりと刃物の痕が見えます。解体の時に削られているのでしょうね。ヒグマの尺骨です。

②松浦武四郎の記録から

次にクマに関して、松浦武四郎の『天之穂日誌』からひとつご紹介します。この写真はその中で、中川町域での出来事を武四郎自身が絵図にしたものです。

天塩川上流の調査の帰路に、今の箴島の「ヲニサッへ」に住んでいた“トキノチ”さんという人の家に着いた時、「川の対岸にクマが出た」、ということで、犬を連れてみんなで捕り行って一頭捕って帰ってきたのですが、その熊をきちんとした儀式に則って神の国に送るということになりました。“トキノチ”さんが「我々が今から行うので、そこでゆっくり見ていなさい」と言ったので、見物をしながらその状況を記述し、併せて絵にしたものです。

これがその「クマの肉を祭る図」です。「臓腑」「耳の皮を剥がざる」「四足」「柁桶」「キナむしろ」などという説明書きが見えます。解体してばらばらになっているように見えますが、アイヌの人々の伝統に則った、きちんとした儀式の祭壇の形が描かれており大変貴重な絵であります。

③「アプ」とカワシンジュガイの殻皮

これは第2、第3トレンチから出土したものです(写真16)。敲打痕のある自然石なのですが、ニワトリの卵ぐらいの大きさがあり、石器の可能性がります。これは「アプ」と言われているものです。これはピットから出てきたカワシンジュガイの殻皮です。自然石に遺っている敲打痕は、アイヌの人達がカワシンジュガイの殻を敲いて割った時にできた痕跡の可能性がります。

その下からは炭化した植物繊維が出てきました。これはどうも植物を組んだ状態で炭化したものと思われま。そのピットの中には、このカワシンジュガイの殻皮がぎっしり詰まっております。とても1点1点を計測して取り上げることができる状態ではありませんでした。移植ゴテで掘ると“ジャリジャリ”と音がするほどでした。これらは殻をまとめてそこに入れてあったのでこのような状態になったものです。周囲には全くそれがありません。ここだけに集中しているという状態でした。これらはアイヌの人達が食料としたカワシンジュガイの殻を神の国に送った場所、即ち“送り場”と考えられます。

赤く囲ってあるのは第3トレンチからの遺物であります(写真13・下)。これは続縄文時代の土器の破片です。これしか出ておりません。風化が激しいのですが、あの場所でアイヌの人達が展開する以前に既に人間が住んでいた証しであります。

先ほどの「アプ」について若干説明します。これは所謂アイヌのサケ漁の写真です。昭和初期の白老でのものですが、『アイヌの歴史と文化』からの転載であります。漁法は鉤のついた「マレックウ」と言われるものを使い、サケを突いて捕獲しています。突いた後は手前に引いて引っかけます。対して「アプ」は始めから引いて引っかけるという歴然とした技術的な違いがります。

この「アプ」が出土した時は錆でガチガチだったのですが、よく見ると、この縁には鍛える時に付けた細い溝がありました。先端は欠損しており、使えなくなった道具もまた神の国へ送ったものと見るすることができます。

このようなものは厚真町の遺跡などではたくさん出土しています。天塩川流域では初めて出土しました。

4. 北方史と天塩川アイヌ

ここからは「オフイチャシ跡」の調査から少し外れますが、私が以前から可能性と期待を込めて注目している点を少しだけお話しします。それは北方史の中で、天塩川流域全体に住んでいたアイヌが果たしていた役割についてであります。

(1) アンジェリスの蝦夷地図

これはイタリアのイエズス会の宣教師のジェロニモ・デ・アンジェリスが1618年と1621年に蝦夷地を探検して、それをイタリア本国に報告書として送った第1次報告と第2次報告に描かれた蝦夷地の地図です（資料6ページ：第3図）。この中に非常に面白いことが記録されています。

この絵図はアンジェリスが実際に測量したものではなく、松前でアイヌの人達から聞いたことを基にして描いた“想像図”です。これを拡大してみますとイタリア語で「イェゾ」、ここには「テッショイ」とあります。こっちは「メナシ」と書いてある。ここには「シェタナイ」、ここには「オクシロ」、そして「マトゥマイ」とあります。形は随分違いますが方角も記入されており「蝦夷島」「天塩」「目梨」「瀬棚」「奥尻」「松前」という位置関係は合っています。近藤重蔵が蝦夷地を探検する179年前、伊能忠敬の182年前、間宮林蔵の189年前、松浦武四郎の239年前、今から397年前のものです。アンジェリスはこの蝦夷地が大陸の一部なのか或いは島なのかを調べにきたものです。

その後間宮林蔵は実際に歩いて確かめ、「間宮海峡」として広く知られているとおりですが、アンジェリスはアイヌの人達からの聞き取りで「蝦夷地は島である」ことを本国に対して「報告書」として文章と絵図に遺したものです。ということはアイヌの人達は既に蝦夷地が島であることを認識していた、ということでもあります。

この報告書の中に「東のメナシの方のアイヌはラッコの毛皮を持って交易に来る」「西のテッショイの方からは様々な品物を持って来る。その中に“ドンス”即ち中国の着物（絹織物＝錦織り）のようなものがある」という記述があります。蓑島先生のお話にもありましたけれども「西のテッショイ」の方のアイヌは北方交易において大きな役割を果たしていたことをここに見ることが出来ます。

(2) 「新しい村」と「古い村」

この「テッショイ」「テシオ」「テシホ」に関して、後の松浦武四郎の「天之穂日誌」の記述を少しご紹介します（資料7ページ）。

「今此運上屋の有る処をテシホとするなれども 是は夷人等にてはアシリコタンと云よし アシリは新き コタンは村也 近年此処え運上屋を建て また村居せしが故に 新村の名を冠らし

むるも宜なる哉」と書いてあります。

この記述からは、では「アシリコタン」に対して「フシココタン」があったのではないか、即ち古い（「フシコ」）コタンがあったことを物語っているものでもあります。ではそれはどこにあったのか、という疑問が出てきます。しかし現在のところは不明です。

私は一つの可能性として、その「アシリコタン」の人達の古里は、天塩川河口から北に広がるサロベツ原野に広がっている「音類遺跡」、9世紀から12、13世紀ごろの擦文文化の大遺跡付近にあったのではないか？「アシリコタン」のアイヌの人達はその末裔の可能性はないか。その末裔こそが天塩地方のネイティブな人々ではなかったのか、と考えております。近世に展開されたアイヌによる“三丹交易”を、天塩地方のアイヌがその一翼を担った可能性はないのか。このように、瀬川拓郎さんは踏み込んだ発言をなされたことがありましたが、しかし、しっかりした発掘調査は行われておりませんので、現段階では可能性の範囲ということです。

これはそのサロベツ原野の竪穴の状態です(写真17)。私はこれまで何度も歩いてみましたが、これは6年前のものです。この砂丘列に対して直角に出ている細い砂丘を「砂嘴」(サシ)と言いますが、ここに竪穴住居跡が累々とあります。以前、北海道埋蔵文化財センターが測量をいたしました。GPSを使って一軒一軒の竪穴住居跡のXYZ値のデータが得られております。私はそれに基づいて確認に行きましたが、なんとまだまだ測量されていない竪穴が累々と遺っているのを見つけてあります。

これがその竪穴の一つです(写真18)。正方形の窪みは擦文文化の住居跡の典型的な形です。これはかなり大きなものです。一辺が10mほどあります。近接して5mぐらいのものが4～5軒分布しております。擦文文化集落の典型的な構成と言っていいでしょう。

5. おわりに ～北からの列島史を考える～

課題として7番目に書いておきましたが、今後、より詳しい実態の追求作業が求められてくると思います。

最後に一言だけですが、私はこういった中で、天塩地方のアイヌの人達は北方史とダイナミックに連動していたであろうと感じております。アンジェリスの記述にもあるように、今回の試掘調査で出土した“ガラス青玉”などは北から渡来したものであったら大変面白いと思います。

天塩地方のアイヌは、日常的な日々の生活や地域社会で「アイヌ」としての伝統的なアイデンティティーの維持、その他に東北アジア史をも担う非常に重要な役割を果たしていたのではないか、という期待を持っております。その正否、実態の把握に向かつては、今後さまざまな作業が必要となってまいります。

余計なことにまで及び時間をはるかにオーバーしてしまい、申し訳ございませんでした。ご静聴ありがとうございました。

チャシから見えてくる道北アイヌの生活

—中川町でのチャシ発掘調査より—

(2018/3/19.名寄大学図書館. 配布資料)

日本考古学協会員 氏江敏文 (名寄市在住)

はじめに (「チャシ」とは)

「チャシ」「チャシコツ」＝アイヌ語 現代において厳密には「チャシ跡」

「チャシ跡」＝蝦夷地 (北海道) を中心に展開したアイヌがコタンや経済圏の中で自然地形 (丘陵の先端、崖、独立丘など) を利用して、壕を掘ったり整地、土盛りなどをして構築した施設。

「チャシ」の意味＝アイヌ語では「柵囲い」「我々 立てる」などの意。

「チャシ」の機能＝城、砦、英雄の居住地 (精神性)、交通の要衝、会議場所、漁場などの見張り場所 (イチャシ地名)、信仰の象徴、など時期と場所、時代背景などによって異なる。多目的な性質で限定的構築物ではなさそう。

「チャシ」の年代 = 16～18世紀末に多く構築。近年は14世紀以前との報告もあるが明確ではない。

「チャシ跡」の数 = 563ヶ所。天塩川流域では14ヶ所 (内、士別、下川のもの現存していない。測量は6ヶ所 (智恵文 オフィチャシ跡 アベシナイ共和チャシ跡 音類1号・2号 稚咲内チャシ跡)。 試掘は2ヶ所 (オフィチャシ跡 上名寄チャシ跡)。



写真1. 中川町「オフィチャシ跡」



写真2. 雄武町「リーチャシ跡」

1. 中川町「オフィチャシ跡」の位置

中川町佐久地区の天塩川と安平志内川の合流点に南から突出している自然丘陵の先端に存在。



第1図. 「オフィチャシ跡」の位置図



1. 調査地周辺航空写真 提供：旭川開発建設部名寄河川事務所

写真3. 「オフィチャシ跡」周辺の航空写真

(写真は旭川開発建設部提供)

2. 中川町「オフイチャシ跡」の調査目的

- ①「オフイチャシ跡」の保存を目的として基礎調査（測量・試掘）を行い、その学術的情報に基づいて中川町、北海道、アイヌ民族の歴史を学ぶための教育的文化資源として活用を図る。
- ②「オフイチャシ跡」周辺でのアイヌ民族の展開と「オフイチャシ」構築の背景にある「アベシナイコタン」の存在場所の確認を目的として、「チャシ」周辺の詳細な地形測量と試掘を行い、天塩川流域でのアイヌ社会とその具体的な姿を追求する。

3. 調査期間・経過・内容と方法

①「オフイチャシ跡」測量・試掘調査 平成23年(2011)10月22日～11月10日

- ・上面全体の笹刈り（地刈り）と測量及び写真、壕及び平坦面のトレンチ及びテストピット設定
- ※併行して「安平志内川右岸遺跡」（「もの送り場」）平成23年(2011)10月31日～11月2日
- ・6月に確認済みの位置に5m×5mのグリッド設定。グリッド外への広がりには未発掘。

②「安平志内川右岸遺跡」測量・試掘調査 平成26年(2014)9月23日～10月17日

- ・Ⅰ区＝試掘は8本のトレンチ設定。地形詳細測量（トータルステーション）、遺物出土状況微細図及び土層セクション図は手測量。写真。旧国道の盛り土部分は重機で排土、他は人力。
- ・Ⅱ区＝試掘は20m間隔で原則3m×3mのテストピット。微地形に則してトレンチによる調査。土層セクション図、写真。開拓期以降の陶器、玩具、釘、以外に特別な遺構・遺物は出土なし。



1. 平坦面1から平坦面2を見上げる。手前はテストピット4。（撮影：佐藤雅彦）



2. 平坦面2から平坦面3および壕を見上げる。（撮影：佐藤雅彦）

写真4. 「オフイチャシ跡」測量・試掘状況



写真5. 安平志内川右岸遺跡Ⅰ区試掘状況



写真6. 安平志内川右岸遺跡Ⅱ区試掘状況

4. 調査結果と「安平志内アイヌ」

●チャシ跡の規模と構造

立地＝天塩川と安平志内川の合流地点。安平志内川右岸の南側から突出する自然丘陵の先端から丘頂

部にかけて存在。「地すべり地形」の滑落崖下の陥没地形を利用。

規模＝天塩川水面からの比高 49.25 ≒ 約 50m、丘陵先端～最頂部まで約 100m、最大幅約 47m、最小幅約 4.0m。

壕＝壕 1：延長 35m、最大幅 3.0m、深さ 1.5m（中央に「土橋状遺構」。樽前 a 火山灰(1739 年に降灰) 堆積。
壕 2：延長 15m、最大幅 3.5m、深さ 1.5m（壕に沿って「掘り上土」が土塁状に存在）。
壕 3：延長 10m、最大幅 3.5m、深さ 1.5m（壕に沿って、高まりのある「平坦面」が存在）。

平坦面＝丘陵先端に平坦面 1、丘頂部までの中間に平坦面 2、丘頂部の壕の周辺に平坦面 3～6 が存在。

土塁＝壕 1 と壕 2 の斜面側に「整地」？、「掘り上げ」によるとみられるものが 2ヶ所存在。

溝状遺構＝壕 1 に囲まれた範囲の高まり地形の壕側に幅 35cm、深さ 15cm の「溝」が存在。付帯設備遺構か？

出土遺物＝チャシ跡本体の各トレンチからの出土遺物はない。

年代＝壕 1 内に堆積の火山灰分析で、「樽前 a」の降灰（1739 年）以前に構築されていることが判明。

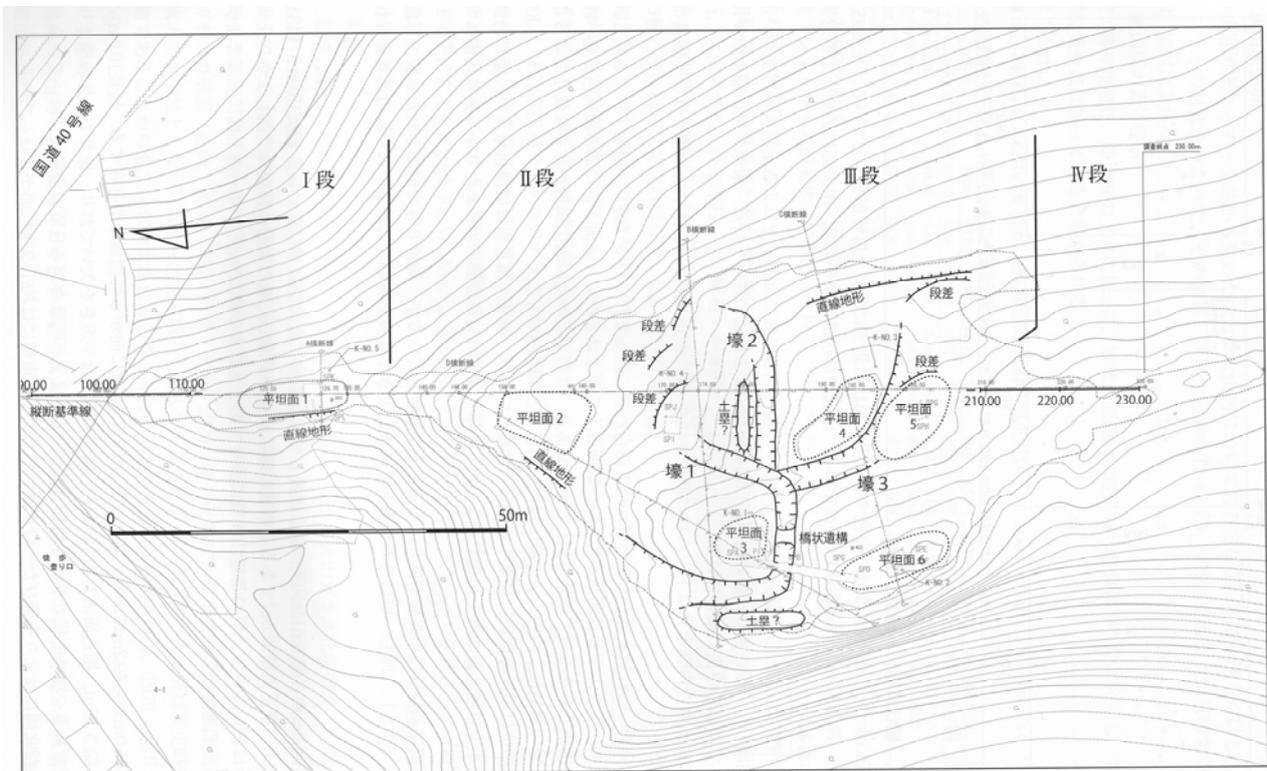


図9：壕・平坦面・土塁(?)・段差・直線的地形の分布

第2図. 「オフイチャシ跡」測量平面図



写真7. 壕1のトレンチ

写真8. チャシ跡地刈

写真9. 壕1の土層

写真10. 溝状遺構

●「もの送り場遺構」（「安平志内川右岸遺跡」の2011年度の試掘調査結果）

位置＝「オフイチャシ跡」の麓、長軸の直線上の平坦地。

遺構＝3.2m × 3.1m の焼土・炭化物が入った厚さ2～3cmの層。

出土遺物＝ガラス玉、赤漆膜片、コイル状鉄製品、鉄釘、カワシンジュガイ殻皮、板状礫、硅化岩、小礫、炭化材などがある。（周辺、チャシ跡側のテストピットからは貧乏徳利の底部の出土がある。）

年代＝放射性炭素の測定などから **18世紀後半**の可能性がある。



写真11. 「もの送り場遺構」調査状況

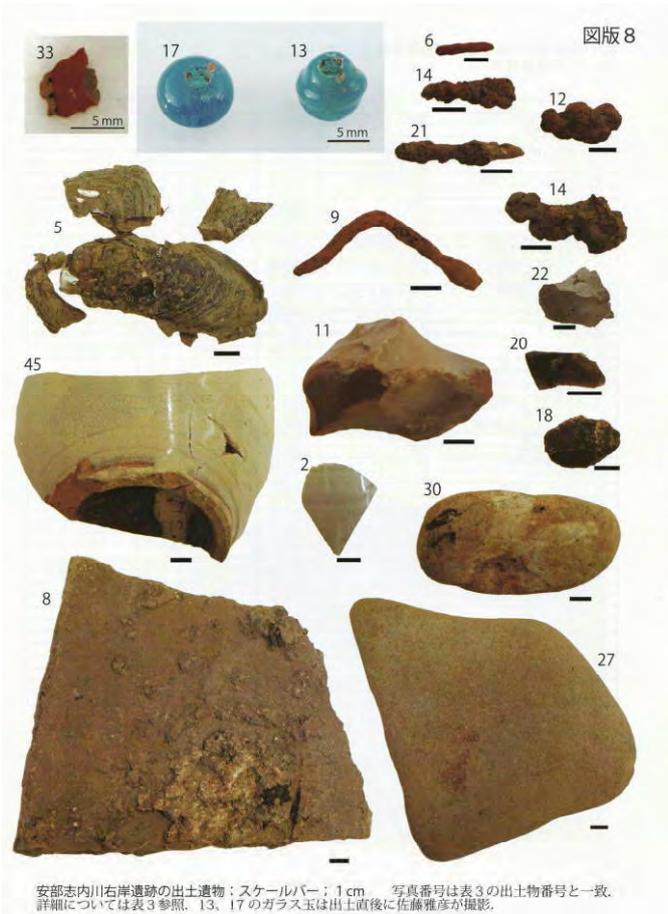


写真12. 「もの送り場遺構」出土遺物

●「安平志内川右岸遺跡試掘調査」（2014年度の試掘調査結果）

位置＝オフイチャシ跡の麓に接した、天塩川と安平志内川に挟まれた平坦地。国道40号線の天塩川側をI区、安平志内川側をII区として試掘。

I区＝オフイチャシ跡の丘陵の裾を通っている国道40号線より、天塩川河岸に続く斜面。8本のトレンチ（第I～第VIII）を設定して調査。

第Iトレンチ：特別な遺構・遺物の出土なし

第IIトレンチ：斜面の肩部に**楕円形のピット**検出。**カワシンジュガイ殻皮**が集積密集、敲打痕のある自然石、硅岩製の「石器」、**鉤状の鉄製品（アブ？）**、最下部から**炭化した植物繊維**（葡萄蔓の可能性）が出土（一部はサンプリングして他は保護して埋め戻してある）。

第IIIトレンチ：第IIトレンチから12m上流側。縄文文化晩期～続縄文文化期の風化の激しい土器の小破片、黒曜石製の石鏃、剥片の他、「送り儀礼」に伴った見られる**ヒグマの穿孔痕のある頭蓋骨（4歳未満 オスの可能性）**、**脛骨**、**尺骨**が出土。脛骨、尺骨には刃物の切断痕があり、骨髓食の可能性もある。遺構は検出されなかったが、遺物周辺からは**焼土粒と炭化物**が疎らに検出されている。

第IVトレンチ：第IIIトレンチから12m上流側。遺構の検出は無し。ヒグマの**中手又は中足骨**が出土。

第Vトレンチ：河川側への原地形を状況把握を目的とするも、急傾斜で落ち込んでおり遺物包含層まで到達していない。旧国道工事の土砂が厚く堆積。

第VI～VIIIトレンチ：国道工事による土砂が厚く堆積。工事車両の轍痕が残存。遺物等無し。

年代＝第Ⅲトレンチの炭化材とヒグマ脛骨の放射性炭素の測定などから **19世紀～20世紀初頭**の可能性がある。

Ⅱ区＝開拓期以降の陶器、玩具、釘、以外に特別な遺構・遺物は出土していない。地質学的調査では、2回の氾濫による洪水堆積があり、不安定な環境であったことが確認された。また青灰色シルトからは水性節足動物らしき管状生痕が確認されている。



1. 第Ⅲトレンチ全景



2. 第Ⅲトレンチ遺物出土状況および土層（東壁）

写真13. Ⅰ区第Ⅲトレンチ遺物出土状況

図版 11



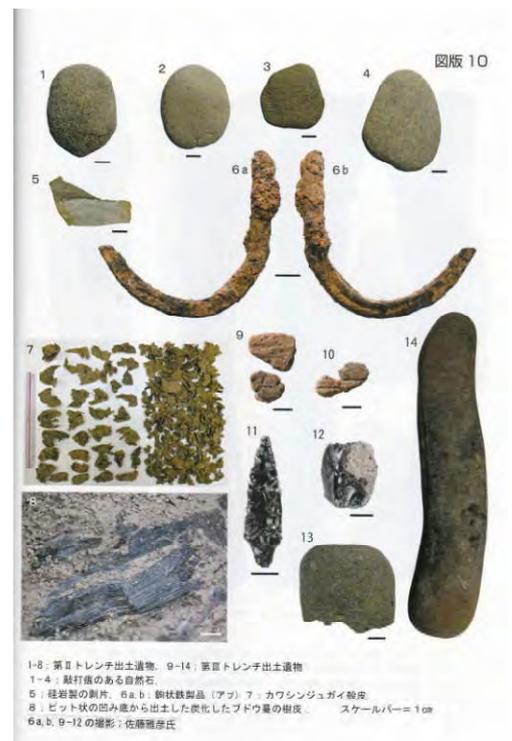
1a-c, 2a,b: 第Ⅲトレンチ出土ヒグマ骨, 3: 第Ⅳトレンチ出土ヒグマ骨
1a-c: 右脛骨 (近位端未癒合欠損, 遠位端欠損)
2a,b: 頭蓋骨左頭頂骨後部, 直線矢印: 外側からの穿孔痕 (陥没痕)
3: 中手骨もしくは中足骨 撮影: 佐藤雅彦氏

写真14. Ⅰ区第Ⅲトレンチヒグマ脛骨・頭蓋骨・中指骨



1a-c, 2, 3: 第Ⅲトレンチ出土ヒグマ骨
1a-c: 右尺骨 (近位端金属筒による切断, 遠位端欠損)
2, 3: 近位端の拡大 (金属筒によるカットマークが多数認められる)
1a-cおよび3の撮影: 佐藤雅彦氏

写真15. Ⅰ区第Ⅲトレンチヒグマ尺骨



1-8: 第Ⅱトレンチ出土遺物, 9-14: 第Ⅲトレンチ出土遺物
1-4: 敲打痕のある自然石
5: 経岩製の剥片, 6a,b: 駒状鉄製品 (アブ) 7: カワシジュガイ殻皮
8: ビット状の凹み底から出土した炭化したブドウ蔓の樹皮 スケールバー=1cm
6a,b, 9-12の撮影: 佐藤雅彦氏

写真16. Ⅰ区第Ⅱトレンチの遺物

5. 「オフイチャシ跡」、「もの送り場」、「安平志内川右岸遺跡Ⅰ区」の関係

2カ年の調査からは、「18世紀初頭に「オフイチャシ跡」が構築され、周辺では18世紀後半に「もの送り場」で様々な「物」が「送られ」、19世紀代に安平志内川右岸遺跡のⅠ区（「オフイチャシ跡」の麓、天塩川左岸）でクマヤカワシンジュガイを「送る」というアイヌの展開があった。幕末から明治頃になっても「貧乏徳利」を遺した人が「もの送り場」付近に存在したが「アイヌ」なのか「和人」なのかは定かでない。そして20世紀になってⅡ区にも和人が入植してきた」という歴史的流れを見ることができる。

また、これら以前の縄文文化後期頃に既に「オフイチャシ跡」の丘陵先端に人類の痕跡があり、Ⅰ区では縄文文化晩期～続縄文文化期にも人間活動の展開の痕跡を垣間見ることができる。

・松浦武一郎の記録「丁巳天之穂日誌 巻之二」(6月11日 陽暦8月1日)

アベシナイ 川巾式十間計……むかしは土人等此川端に多く有し由なるが、今は外え引取ぬ。
 ……又しばし上り、左ヲ、イチャシナイ、並でホロシフンナイ、此辺小石浅瀬にして鱒・鯨の卵を置処のよし……

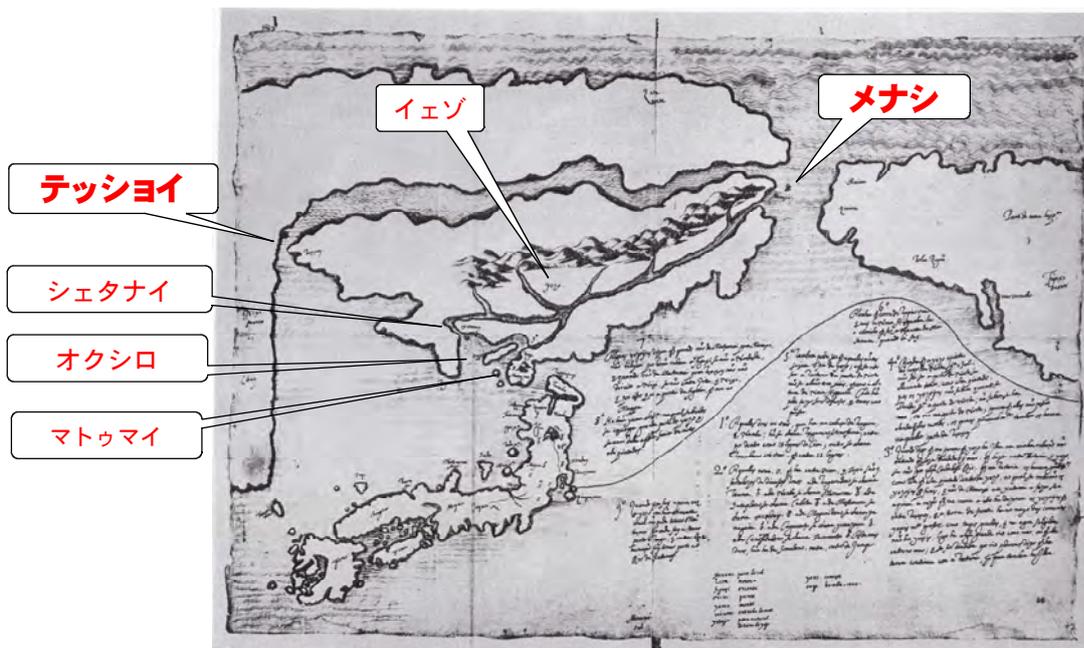
一方で、「東西蝦夷山川地理取調図」の中では「ヲフイチャシナイ」の記載がある。

6. 「北方史」の中での位置と天塩川アイヌの役割（可能性と期待を込めて）

・アンジェリスの蝦夷地図と記述「メナシ」と「テッショイ」

ジェロニモ・デ・アンジェリス：イタリアのイエズス会宣教師 1618年と1621年に蝦夷地を訪れ、松前においてアイヌから蝦夷地の情報を聞きとり、その状況を本国へ報告している。『第一次蝦夷国報告書』では蝦夷地は大陸の一部、『第二次蝦夷国報告書』では島。これらの中で「東のメナシの方からはラッコの毛皮」など、「西のテッショイからも様々な品物が運ばれてきて、その中にはドンキ（中国の織物）のようなものがある」

（「テッショイ」はイタリア語の「Texxoy」でアイヌからの聞き取りで表記。テッショ テッソワ テッソイなどと訳された発音もある。位置は「地図」では左端に位置しているが、形状はアイヌからの聞き取りで描いたもので、アンジェリスの想像によるもの。秋月俊幸氏は「一般には天塩と考えられているが、サハリン島北西海岸を指していたのかもしれない」。このように現行地名の「天塩」より広く考えておいた方がよい。＝例えば後年の「天塩國」など。



第3図. アンジェリスの蝦夷地図

・松浦武四郎の「丁巳天之穂日誌 巻の二」(6月9日 陽暦7月29日)

〔天塩運上屋から天塩川調査へ出発の日〕

…今此運上屋の有る処をテシホとするなれども 是は夷人等にては アシリコタンと云よし
アシリは新き、コタンは村也 近年此処え運上屋を立てまた村居せしが故に、新村の名を冠ら
しむるも宜なる哉…

※古いコタンがあったはず・・・何処か(天塩河口遺跡から北に広がる幌延町音類遺跡の9～12・13世紀頃の擦文文化期の遺跡群を遺した人々の末裔の可能性はないか)。その末裔こそが天塩地方のネイティブな人々(アイヌ)で、近世に展開されたアイヌによる三丹交易を、サハリンに近い北方(天塩地方=天塩國)のアイヌがその一翼を担っていた可能性はないか。踏み込んだ発言をする研究者もいるが、今現在は可能性の範囲。(サハリンには擦文式土器や擦文的住居があり、10世紀以降、サハリン島へ蝦夷地から人々の北上は確かに存在している。)

・「サロベツ原野の幌延町音類遺跡」(史跡 重要遺跡)

平成17年度から21年度にかけて796基の擦文文化期を主体とする竪穴住居跡が測量調査。概ね9～12・13世紀の「擦文文化期」のものである。未確認のものがある。

天塩町川口遺跡群、幌延町音類遺跡群、豊富町豊里遺跡群のほか未確認のものなどを総合すると2000基前後の数が予想される。



写真17.サロベツ原野と「音類遺跡」



写真18.「音類遺跡」の竪穴住居跡

7. 今後の課題(より詳しい実態の追求)

- ・「オフイチャシ跡」本体構造の詳細把握(壕 レイカ構造)
- ・構築絶対年代の特定
- ・「チャシ跡」本体と「送り場の出土遺物」との有機的関係
- ・コタンの位置の特定
- ・天塩川流域の「チャシ跡」との相互関係
- ・古文書類の探索調査(出荷、荷受帖など)
- ・サハリン島で古くから知られている白土の土城やベロカーメンナヤ遺跡と蝦夷地のチャシとの関係。
- ・「チャシ」の起源

「北方史」とダイナミックに連動していたであろう天塩地方のアイヌ期の人々は、自身の存続や地域社会のアイデンティティー維持の他に、東北アジア史の中で重要な役割を担っていたはずである。

蝦夷地 ……近世～幕末、近代 主要事項

慶長	8	1603		徳川家康 征夷大将軍 江戸幕府を開く
慶長	15	1610	花山院少将忠長、渡海着岸、暫時上ノ国に滞在。『新羅之記録』、『福山秘府』	1614 大坂冬の陣 1615 大坂夏の陣
元和	2	1616	マンジュ国が「マンジュ・アイシン・グルン(寛金国)」と改称。	
元和	4	1618	イエズス会宣教師アンジェリス、奥島ツガの浅に着く。公廣(慶廣の嫡孫)、松前は日本ではないとして好悪する。『アンジェリス第一次蝦夷報告』	
寛永	7	1630	江差に沖ノ口番所設置。	
寛永	10	1633	松前に初めての幕府参見使到来。	
寛永	13	1636	後金国が「大清」と改称。中国全土を支配すると、アムール川下流域の人々を「辺民」と位置づけ朝貢を義務づけた。	
寛永	17	1640	山形前線した土砂が噴火湾に流れ込み、むかわに津波を引き起こした。	
寛永	20	1643	オランダのフリスが厚岸に来航し、古紙が丘チャシ跡を「トリデ」と記載。鹿巻と名のチャシ跡に登り、人の丈の1.5倍の方形の防壁があり、柵内に2・3軒の家ありと記述。 ヘナウケ(シマコマキ=鳥牧を拠点にセタナイまで支配)の戦い。	
正保	3	1646	『新羅之記録』成立	
慶安	元	1648	シャクシャインがオニビシの部下を殺害し、慶安事件始まる。 ロシアがオホーツク海沿岸に進出し、根室都市オホーツクを建設。	
承応	2	1653	オニビシがカモクタイを殺害。	
明暦	元	1655	シャクシャインとオニビシが福山館で「會盟」し、慶安事件は停戦となる。	
寛文	3	1663	『新羅之記録』改題	
寛文	6	1666	この頃、円空が道内を巡行し、40体余の仏像作成。	
寛文	7	1667	『新羅之記録』改題	
寛文	8	1668	シャクシャイン勢がオニビシに奇襲攻撃を加え殺害。 4月、オニビシの姉婿沙流のウタフが、松前に援助を要請するが断られ、帰路に野田生で悪病に罹って死亡。これが松前藩による毒殺と伝えられる。 6月、シャクシャインが鷹を飛ばし、シラスカからマシケに至る東西アイヌ約2千人が蜂起。 7月、松前藩がクンスイに檣を設け防衛態勢を強化。 8月、松前藩が軍勢をオシヤマンベまで出すも、山中に隠れて毒矢を放つアイヌ軍阻まれ、クンスイに退却。 9月、松前藩がクンスイから東蝦夷地に渡海させる。 10月、ビボクに陣を張った松前軍が、シャクシャインに偽りの和睦を呼びかけ、祝宴の夜に殺害し、翌日、シャクシャインのチャシを攻めて焼き払った。	
寛文	10	1670	『津軽一統志』に、22・23年前の話として「みむろよりのしけ着……是よりらっこ島くなしりへ渡り申候」との記載あり、根室→野付→国後というラッコ交易の入手ルートがわかる。	
元禄	14	1701	?	赤穂事件
正徳	2	1712	『エトロフ島嶼日記』	
享保	年間	1716～	場所請負制のはじまり。	徳川吉宗 征夷大将軍
享保	16	1731	『津軽一統志 卷十』に、「ちやし、城の事」の記載あり。 オフイチヤシ跡は、樽前火山灰燼灰積りに積累。	
元文	4	1739	『新羅之記録』改題	
宝暦	2	1752	箱館大町の榊氏(角屋)が敷地内に井戸を掘らうとして、「貞治の板碑」や通骨・鍍金具・鐙・太刀を掘り出す。	
宝暦	4	1754	松前藩が初めてクナシリに交易船を送る。	
宝暦	8	1758	ノッシャムの酋長シクフが部下2,3千人を率いて宗谷を襲撃、60余人を殺し、200余人を傷つけた。	
明和	7	1770	ウルフ島に渡ってラッコ猟をしていたエトロフアイヌがロシア人に襲撃される。	
明和	8	1771	エトロフアイヌがウルフ島でロシア人を殺害。	
安永	3	1774	飛騨屋の商船が初めてクナシリへ渡るも、ツキノエの「乱妨」で交易できず。	
安永	3	1774	安平志内川右岸遺跡の「遺り燼遺構」は、この頃?	
安永	7	1778	ロシア商人シャペーリンがツキノエの案内でノッカマフに交易を求めて渡来。	
天明	元	1781頃	『津軽一統志』に「赤坂島風説」を著す。	
天明	2	1782	ツキノエが飛騨屋の高船と交易を開始。	
天明	4	1784	『津軽一統志』改題	
天明	5	1785	幕府の調査隊が蝦夷地に入り、最上徳内が参加。カラフトのオオトマリへ交易に来ている山巨人から、彼等がマンチウに従属し、獣皮を献上して絹布・青玉を手入していることなどを聞き取っている。	
天明	6	1786	佐藤玄九郎「蝦夷拾遺」著す	
寛政	元	1789	クナシリでアイヌが蜂起。(この戦いに際してメナシに5基のチャシが築かれたという説がある。)	
寛政	2	1790	嶋崎波曾が、メナシ・クナシリの戦いで功績のあったアイヌ12人の姿を『夷俗列傳』に描く。 最上徳内が「蝦夷草紙」著す	
寛政	4	1792	ロシア使節ウラスマンが、エカテリーナ号でアッケシのバツサンに来航、大黒屋光太夫ら捕縛。	
寛政	7	1795	ロシア人がウルフ島等に居住開始。	
寛政	8	1796	イギリス船プロビデンス号がアプタ沖に現れる。	
寛政	9	1797	イギリス船プロビデンス号がエトモ沖に現れる。 近藤重蔵がアイヌの協力を得て広尾のルベシベツ山道開削。 樺似に会所が設けられる。	
寛政	10	1798	近藤重蔵が「大日本東土呂府の木柱を立てる」。 近藤重蔵がアイヌの協力を得て広尾にルベシベツ山道開削。	
寛政	11	1799	幕府が東蝦夷地を仮直轄とし、樺似山道(中村小市郎意積が担当)と狼留山道(最上徳内が担当)開削を命じる。 幕府が野付に通行屋を設ける。	
寛政	12	1800	高田屋嘉兵衛が捉促会所を開き、同島住民1,118人の人別帳を作成。	伊能忠敬 蝦夷地測量
享和	元	1801	山越内閣所が設けられる。	
享和	2	1802	幕府が東蝦夷地を直轄とし、箱館奉行を設置。 箱館奉行が蝦夷三寺の建立を献策。	
文化	元	1804	蝦夷三寺の一つ、有珠善光寺が建立される。	
文化	2	1805	蝦夷三寺の一つ、厚岸国壽寺が建立される。	
文化	2	1805	ロシア使節レザノフが長崎に来航。幕府は通商を拒否。	
文化	3	1806	蝦夷三寺の一つ、樺似等淨院が建立される。	
文化	3・4	1806・7	ロシアがカラフト・エトロフなどを襲撃し、和人を拉致。	
文化	4	1807	カラフトを含む全蝦夷地が幕府直轄地となり、カラフトに白土会所が設置される。	開宮林蔵 樺太探検(開宮海峡) 近藤重蔵 天塩川探検
文化	8	1811	クナシリに上陸したゴロウニンが捕らえられ松前へ送られる。高田屋嘉兵衛は海上でロシアに捕らえられる。	
文化	10	1813	リコルドが高田屋嘉兵衛を伴ってクナシリに来航。ゴロウニンとの交換が成立。	
文化	14	1817	イシカリ場所で痘瘡が流行し、アイヌ2,137人のうち833人が死亡。	
文政	4	1821	松前藩が復讐。	
弘化	2	1845	松浦武四郎第1回蝦夷地調査。	
弘化	3	1846	松浦武四郎第2回蝦夷地調査でカラフトまで踏査。	1区で(オフイチヤシ跡の)クマ、カワシシジウガイ、鉤(ア)が送られる
嘉永	2	1849	松浦武四郎第3回蝦夷地調査で千島列島に渡る。	
嘉永	6	1853	松浦武四郎「三回蝦夷日記」著す	ペリー来航
安政	元	1854	日米和親条約締結。	
安政	2	1855	松浦武四郎蝦夷地開閉御罷となる。 長万部に陣屋(分屯所)設置。 日本国露西亜通商条約(日露和親条約)締結。捉促島とウルフ島の間が国境となる。	
安政	3	1856	五稜郭建造開始。 松浦武四郎第4回蝦夷地調査。 松浦武四郎第5回蝦夷地調査。	
安政	4	1857	松浦武四郎「天之日録」(「オフイチヤシナイ……此辺小石浅瀬にして蟹・蝦の跡を重畳のよし」との記載。 [他方ではoho=ohama=深い・産卵場・沢]の意味と解釈もある。]	
安政	5	1858	米英仏蘭露との修好通商条約締結。 松浦武四郎第6回蝦夷地調査。	
安政	6	1859	箱館開港(横浜・神戸・長崎・新潟も開港)。	貧乏徳利
安政	6～	1859～	松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調日誌」28冊、「戊午蝦夷山川地理取調日誌」62巻を完成。「蝦夷漫画」を出版。	
万延	元	1860	松浦武四郎「樺太日誌」「北蝦夷余誌」「石狩日誌」「夕張日誌」「納沙布日誌」「十勝日誌」「久留日誌」「知床日誌」などを出版。	榎門外の裏
元治	元	1864	五稜郭完成。	
明治	2	1869	松浦武四郎 明治政府より開拓使の開拓大主典・開拓判官に任命される。蝦夷地を「北加伊達」、国名・郡名も提案。明治政府が決定公布。	
明治	8	1875	千島樺太交換条約締結。	
明治	9	1876	「北海道鹿猟規則」が制定され、アイヌは事実上、シカ猟を行うことができなくなった。	

(5) 結びの挨拶

司会：清水池

今日、蓑島先生、鈴木先生、氏江先生にご報告いただきまして、それぞれ皆さん、お伝えになりたいメッセージが非常に多く、3時間半の時間に押し込むのはかなり無理があったという点で、報告者の皆さんには大変申し訳なく思っております。私自身も今回、初めて聞いた内容もたくさんありました。おそらく、道北地域のアイヌの歴史、そして社会に関する新しい知見を、皆さんそれぞれ受け止めることができたのではないかなと思います。

道北地域は今の日本地図で見ますと、どうしてもどん詰まりというイメージが非常に強い気がします。長らく続いた冷戦により、ソ連、ロシアとの交流がほとんどなかったことも影響しているでしょう。しかし、実は歴史を紐解いてみると、非常にいろんな地域とのネットワークの要衝であったことが、よく理解できたと思います。外部地域と活発に交流する中でも、アイヌ社会のアイデンティティ、オリジナリティを維持していたことは、これは現在の道北地域の課題、これは道北地域に限らないかもしれませんが、グローバル時代の中での地域社会のあり方を考える上で非常に示唆に富むお話だったのではないかと感じました。

この道北研究会では、開催しました講演会・セミナーの内容をすべて文字起こしをしまして、研究会誌『北海道北部の地域振興』という形で取りまとめております。今日いらっしゃらなかった方にも、会誌を通じて今日の講演会の内容を発信いたしますので、ぜひ、そういった形でも皆さんにお勧めいただければと思います。それでは講演会を締めくくるにあたりまして、今日ご報告いただきました蓑島先生、鈴木先生、氏江先生にお礼の拍手をもちまして終了いたしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。以上で、第22回道北の地域振興を考える講演会を終了いたします。どうも皆さん、長時間お疲れさまでした。

V. 道北の地域振興を考える研究会 現地研修会報告

ニチロ畜産株式会社名寄工場における「名寄天牛」の取り組み

1 視察先

- (1) ニチロ畜産(株) 名寄工場 (名寄市日進)
- (2) 視察日 3月20日
- (3) 参加者 5名



ニチロ畜産(株)名寄工場

2 ニチロ畜産(株)の概要

- (1) 本社 札幌市西区
- (2) 工場等 本社札幌工場 (ハム・ソーセージ類・調理加工品製造)
十勝工場 (芽室町、牛肉加工60頭/日・調理加工品製造)
名寄工場 (名寄市、牛肉加工60頭/日)
さっぽろ西町ハム工房 (直売店)
- (3) 従業員 550名、
- (4) 売上高 129億円 (平成28年度)

3 名寄工場の概要

- (1) 沿革
昭和37年 日魯漁業(株) (平成2年(株)ニチロに社名変更) が名寄市と連携し
名寄食肉センター (家畜屠畜場) 開設
昭和41年 名寄市食肉センターを公設(市営)食肉センターとして開設
昭和50年 日魯漁業(株)から畜産部門を分離し、ニチロ畜産(株)を設立
平成4年 新名寄工場建設
平成20年 (株)マルハニチロ畜産の100%出資子会社
平成23、25年 ISO9001、ISO14001認証取得
平成25年 名寄市食肉センター改築 (牛のと畜許認可頭数を80頭に変更)、新名寄工場建設
平成26年 マルハニチロ(株)の100%出資子会社
- (2) 業務概要
旭川市 (日本ハム北海道ファクトリィ(株)) : 豚肉 (原料は他から移送) を原料とするハム、ソーセージなどを製造) 以北唯一の広域食肉センターとして、道北地域の農家で搾乳していた乳牛 (廃用牛) を家畜市場で入手し、付加価値を高めた肉牛として飼育、と畜処理、食肉検査、

食肉加工（解体など）を行い、消費者に安全・安心な牛肉を供給している。

北海道は酪農王国で全国の乳用牛の6割が飼育されている。ニチロ畜産(株)は北海道でと畜される乳用牛の34%（北海道と畜乳用牛78千頭(2016年)内ニチロ畜産(株)25千頭、北海道での処理頭数1位、2位はホクレン）を仕入れ、飼育、牛肉の加工、製造、販売を行っているが、飼育から一連の処理を同じ場所で行っているところは少ない。

(3) 対象となる牛肉のカテゴリ

牛の品種と食肉の利用区分カテゴリは、付加価値の高い順に、①和牛（雌・雄去勢）→最高峰の和牛肉、②交雑種（ホルスタインと黒毛和種のかけ合わせ。別名「F1」）→和牛肉、③ホルスタイン雄の去勢牛→国産牛肉、④ホルスタイン雌（出産・搾乳を終えた経産牛）→国産牛挽肉の4種に分けられる。

ここでは、そのままでは安価な挽肉としてしか活用できない④のホルスタイン雌を4ヶ月程度かけて工場の隣接地で飼育し、肉質の改善を図る。飼育された牛の牛肉は、一般に直接食することができる③の国産牛肉と互角に競争できる商品として販売している。

4 名寄工場の業務内容

(1) 家畜市場による廃用牛の買い付け

牛などの家畜の公正な取引と流通の円滑化をはかるため家畜取引法により、家畜市場等を開設する場合は都道府県知事に登録をすることになっている。

北海道には、13の家畜市場（ホクレン7ヶ所、北海道ホルスタイン農業協同組合1ヶ所、家畜商業協同組合5ヶ所開設）が開設されている。

ニチロ畜産(株)名寄工場は、主に道北にあるホクレン豊富地域家畜市場、紋別集散地家畜市場、道北名寄集散地家畜市場（名寄市曙）で、セリまたは入札により乳牛農家の廃用牛を仕入れしている。

家畜市場から名寄への牛の運搬は、家畜運搬専門の関連会社である(有)昭和運輸が行っている。

(2) ブランド牛（肉質改善、増体向上）の肥育

出産、搾乳を終えた経産牛の肉は黄色い脂肪でかたく、風味がなく価格の安い挽肉としてしか活用できない。

ここでは、アマ、エゴマの油成分である α リノレン酸（オメガ3、n3系不飽和脂肪酸）を多く含んだ飼料（飼料メーカー提供、アマ・エゴマ（輸入品）の搾りかすと反芻動物が消



飼育中の経産牛



肉質を改善する独自配合の飼料



アマニ・エゴマ成分飼料

化できるようにCaを結合したもの)を与え、1頭当たりの正肉(骨や余分な脂肪などを除いた食用肉)の重量アップや部分肉比率向上によって正肉単価を上げる取組(1頭の販売価格増)がなされた。

この飼育により1日1kgの増体や内臓肉の品質向上、乳牛の黄色い脂肪が白くなる色沢改善が認められ、牛肉の風味やおいしさにかかわるオレイン酸(n9系不飽和脂肪酸)も増加した。

この牛肉を「名寄天牛(なよろあまうし、商標登録出願中)」とブランド化して、本年(2018年)1月以降、全国にむけ販売活動を開始している。

なお、仕入れた経産牛は、名寄工場と隣接した飛騨野牧場や函名ファーム(株)に預託され肥育されている。

(3) と畜処理

牛などの獣畜は国民の健康を守りまた感染症蔓延を防止するため、と畜場法により獣畜のと畜・解体はと畜場以外で行うことは禁止されている。

と畜場の設置は、都道府県知事の許可が必要であり、北海道には15のと畜場(休止中1ヶ所を含む)がある。

このうち市町が設置している公営のと畜場は、名寄市立食肉センター(ニチロ畜産(株)が指定管理者となり管理運営、現存すると畜場のなかで最も早期の昭和41年に開設、牛のと畜許可頭数80頭/日)、岩見沢市精肉センター、池田町食肉センターの3ヶ所のみである。

なお、家畜市場とと畜場がともにある市町村は、名寄市、安平町、釧路市のみである。

(4) と畜検査

と畜検査は、と畜場法により都道府県(家畜衛生検査所、保健所など)のと畜検査員(獣医師)が行い合格したもののみが、市場に供給されることになっている。

この施設には、名寄保健所の獣医師が常駐し、1頭ごとに、生体検査(疾病や異常があるものはと畜禁止、BSEの症状も確認)、解体前検査(と畜された牛を解体してよいか検査)、解体後検査(と体各部の望診など、必要であると判断した場合には、脳の延髄の一部を採取してBSE検査)や必要により精密検査も実施(検査料1頭1200円)し、食用に適さないものは排除(廃棄処分)、合格したものだけが食肉加工にまわされる。

なお、と畜場内で解体された内臓・血液などは、検査をうけた後でなければと畜所外に持ち出しできないことになっている。

(5) BSE(牛海面状脳症)特定部位の除去

牛の特定部位(異常プリオンたん白質がたまる部位:頭部(舌・ほほ肉を除く)、脊髄、回腸遠位部)の除去・焼却が法令で義務化されており、除去した部位は名寄工場の中の焼却炉で焼却する。



食肉加工処理

これらの特定部位が適切に除去されているか、と畜検査員によって全頭の確認が行われる。

- (6) 食肉加工処理とブランド化による販売
 検査に合格した牛は、北海道HACCP自主衛生管理を取得した加工場で部位別に解体され、安全・安心な牛肉「名寄天牛（なよろあまうし）」として、量販店、全国メーカー、問屋などへ販売される。



ブランド化された牛肉「名寄天牛」とレバー

一部はハンバーグやローストビーフ等に加工製造して、販路拡大が進められている。

- (7) 試食

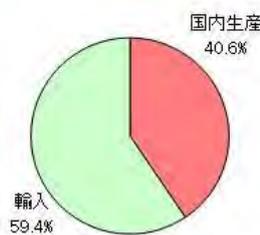
消費者に供給される牛肉は、冷凍・冷蔵されて数週間経過しわれわれに届くが、ここで試食させていただいた牛肉は、普通食することができない、もっとも食肉加工直後の新鮮な肉を味わうことができた。

5 日豪EPAとTPP11

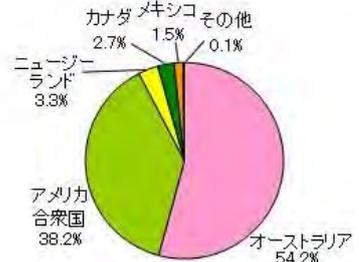
- (1) 日豪EPA

日本・オーストラリア経済連携協定（日豪EPA）は、2015年1月に発効し、牛肉の関税は、原則38.5%であるが、豪州からの冷凍牛肉は、発効1年目が30.5%、2年目が28.5%、以下段階的に削減し18年目に19.5%（約5割削減）まですることとなっている。冷蔵牛肉は、発効1年目が32.5%、2年目が31.5%、以下段階的に削減し15年目に23.5%（約4割削減）することとなっている。

牛肉の国内生産と輸入の割合
2015年



牛肉の輸入先
2016年 50.3万t

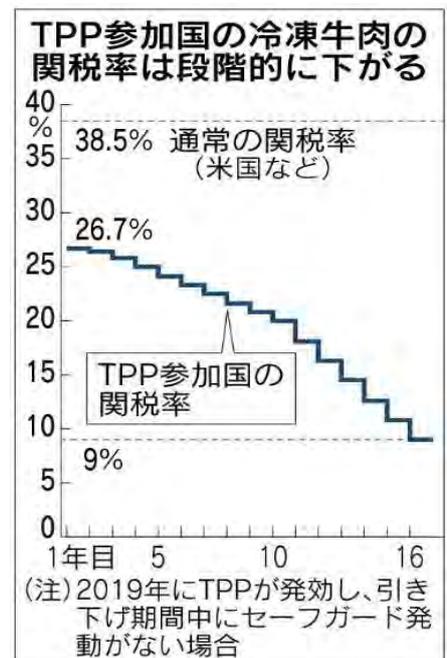


- (2) TPP11

牛肉の国内生産量（33.2万トン）と輸入量（48.7万トン）は、81.9万トン（2015年）で、図のように国内生産が4割、輸入が6割となっている。

輸入全体（2016年）の54%がオーストラリア、38%が米国、以下ニュージーランド、カナダ、メキシコの順となっている。

TPPは、アジア太平洋地域においてモノの関税だ



けでなく、サービス、投資の自由化など幅広い分野で21世紀型のルールを構築する経済連携協定で、2016年2月に12ヶ国がTPP協定に署名したが、米国ではトランプ政権が誕生し2017年1月に離脱したため発効しないこととなった。

引き続き11ヶ国が協議を行い、TPP11協定として本年(2018年)3月にチリで署名を行い、各国が国内手続きを行った後、6ヶ国以上の国が批准した場合協定が発効することとなっている。

TPP11での協定見直しにおいて、日本の農畜産部門は、オリジナルTPPと変更はなく大きな影響を受けることになる。

TPP11は来年(2019年)初頭に発効する見込みとなっており、協定参加国産の冷凍牛肉は1年目に26.7%、16年目で9%に下がる。参加国と締結済みの協定でTPP11よりも低関税ならばそれに合わせることになっている。

シェア2位の米国は、関税は38.5%のままで、TPP11参加国(輸入量第1位のオーストラリア及び3、4、5位のカナダ、ニュージーランド、メキシコはいずれもTPP11に参加)との競争力が低下し、2国間協定(FAT)への圧力を強める可能性がある。

(3) 北海道農業に与える影響

TPP11協定が締結されれば、日本特に北海道の農業・酪農が受ける影響が大きいと予測されており、北海道庁の試算によると、農畜産物の関税が即時完全撤廃された場合、北海道内農業の損出額は約1兆3700億円(内肉牛は422億円の損出)、雇用は約8万8000人が失われるとしている。

6 求められる今後の対応

ニチロ畜産(株)は、昭和38年から56年間にわたり名寄を拠点に食品製造を行い、道北地域の産業や雇用に寄与してきている。

日豪EPAやTPP11により関税が引き下げられ、安価な輸入牛肉との競争も激化して来るものと思われる。また、近年、酪農家の高齢化が進み、北海道でも乳牛の頭数が減少している。このことは、道北地域にとって大きな危機であり、早急に解決策を打つべき課題となっている。

ニチロ畜産(株)では差別化・付加価値化を図るために、「経産牛の肥育」に着手したが、国際・地域的な課題からさらなるブランド化、差別化、販売などの戦略が必要となっている。

さらに、地域の産業を守り雇用を維持するため、行政・大学や政治もからめた総合的かつ早急な対応策が求められている。

(執筆：会員 木村洋司、2018年4月)

『道北の地域振興を考える研究会』は、（一社）北海道開発技術センター、（一財）北海道河川財団、（一財）石狩川振興財団（順不同）による事業費支援を受け活動しています。また本研究会の事業運営に当たっては、名寄市立大学および名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターと連携して活動しています。

<道北の地域振興を考える研究会>

事務局 今野 聖士

〒096-8641 名寄市西4条北8丁目

名寄市立大学保健福祉学部

Tel. 01654-2-4199 *1210

Fax. 01654-3-3354 (代)

E-mail : m-konno@nayoro.ac.jp